噂の眞相

一九八六年十一月号

【今月の言葉】…犯罪的犯罪報道を繰返すマスコミに鉄槌を!



● マニラ市内殺人事件…第二話 大久保利久

● ファミコンの任天堂 神話を剥ぐ!

● なぜいま犯罪書なのか

● よど号 グループが送ってきた二〇〇枚の"原稿"……

● 自動車 業界のマスコミ対策……

第9巻第11号 通巻92号 昭和61年10月10日発行(毎月1回1日発行) 昭和60年2月26日国鉄首都特別扱承認雑誌 八二一九号 昭和54年6月2日第3種郵便物認可

第8巻　第11号　通巻92号

噂の真相

1986.11

CONTENTS

●表紙デザイン／杉浦康平＋谷村彰彦
●表紙イラスト／柴田仁志
●本文デザイン／清水真理









PHOTO SCANDAL

『フライデー』が楠田枝里子サンの「男」を遂にキャッチ！ “同業者のよしみ”の人物は月刊『カドカワ』の見城編集長





「なるほど　ザ・ワールド」のテレビ番組などで司会をやったり、CMタレントをやったり、はたまた作家をやったりという才色兼備の楠田枝里子サン(34)の「男」がついにフライデーされたというので、さっそく『フライデー』(10／10号)を買ってきた。しかし、事実経過はよく分かるが、カンジンの男については「ジーンズに、黒の半袖シャツ、がっしりとしたスポーツマンタイプ。齢の頃は30代後半のようです」、「フツーのサラリーマン」と書かれているだけで正体はまったく不明。

そこへ兄弟誌の『週刊現代』(10／11号)が追撃したが「男は有名出版社に勤めるA氏(35)で現在、某文芸誌の編集長。業界では“ヤリ手”として通っている。離婚歴はあるが現在は独身」とあり“SMクラブに通うマゾ男”といった記述はあるが、カンジンの名前はここでも出てこない。プライバシー暴露に関してはすこぶる熱心な『フライデー』『週刊現代』のこの“配慮”は、はっきりいって同業者であり、何かと仕事上の利害も絡むということでのエコヒイキである。本誌がかわりに教えてあげよう。角川書店の月刊『カドカワ』編集長の見城徹サン(35)である。

〈詳細は本文コラム〉



「なるほど　ザ・女ざかり！」楠田枝里子さんが頼りにしてる「男」と一夜

鹿内春雄議長！「こんな立派な大豪邸が必要でしょうか？」「こんなに若くて美人で未熟な女性〝同行秘書〟なんてのも？」

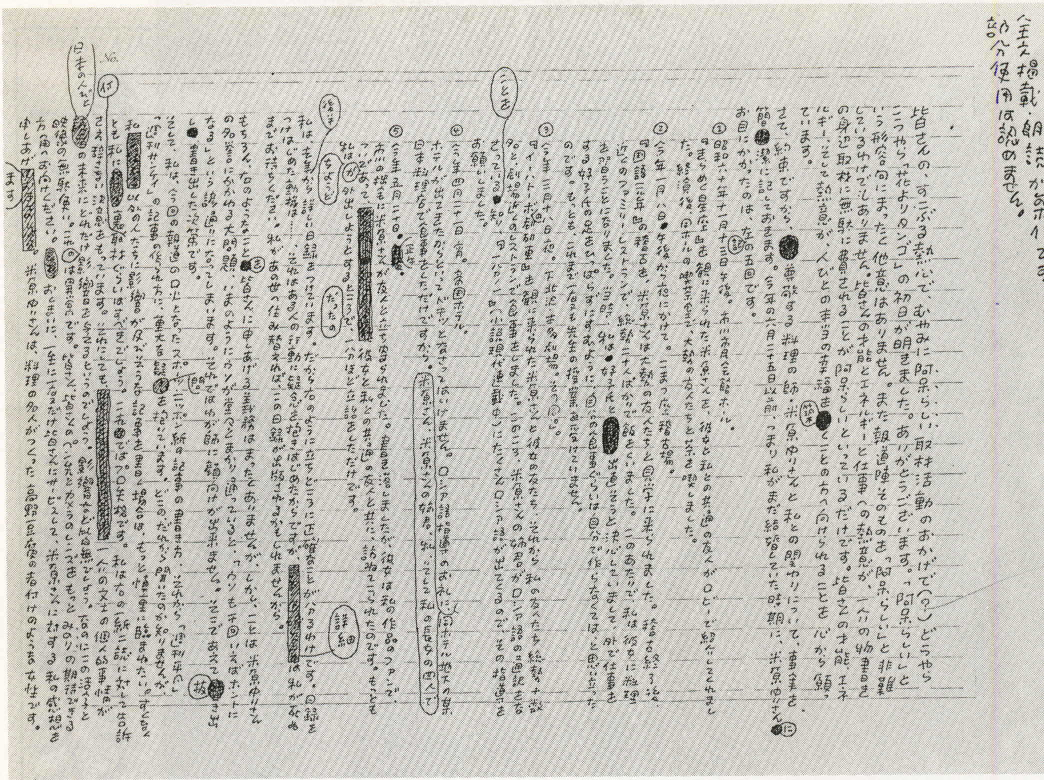


フジ・サンケイグループの総師、正式には議長と称する鹿内春雄サン(41)の人生は実に順調のようである。「笑っていいとも」や、おニャン子などのヒットでフジテレビは民放NO・1の位置を獲得し、「子猫物語」では猫と社員の犠牲の上に大ヒットを記録。こうした好調ぶりを背景にこのたび高級住宅地・田園調布に敷地二三〇坪、鉄筋三階建ての豪邸を二〇億で入手したのである。財界の尻馬に乗って「こんな立派な庁舎が必要でしょうか」と倉敷市役所を行革キャンペーンでコキおろした張本人が、である。薄給と経費のしぶさでは定評のあるサンケイ新聞の記者あたりに放火されなければ幸いである。

金とくれば次は女というのがこの手の人物の相場。春雄氏の夫人はいうまでもなくNHKから札ビラを積んでスカウトした元アナウンサーの頼近美津子サン(31)。頼近女史を上司の特権で通訳兼秘書としてアメリカに同行させてモノにした〝前歴〟をもとに、またもや入社一年目の美人社員を国際部から個人的な〝同行秘書〟にスカウト。丸の内ピカデリー2で開かれた「十手舞」の試写会に二人一緒に連れ立ってやってきたところを『週刊現代』に〝発見〟されていたが、その女性の名前は林万美子サン(23)。上智大仏文科をオールAで卒業した語学堪能な美人とくれば、怪文書で「ヘソから下にしまりのない性根…」と書かれた春雄サンの事「手がつくのは時間の問題でしょう」という社内の声にもリアリティがありそうだ。



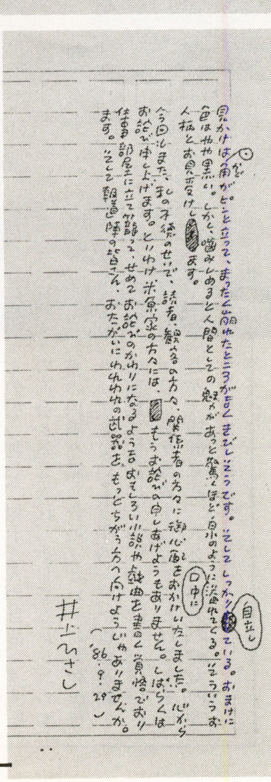
『週刊現代』に〝発見〟された鹿内議長と林万美子秘書▼



取材に押しかけたマスコミに井上ひさし方式で対処
マスコミの手口知りつくした条件付文書コメントで

フツーならば流行作家の私生活が芸能ゴシップ風に扱われることは珍しいケースといっていい。特に売れっこであれば著作権が出版社やテレビ局に暗黙の圧力として作用するからである。しかし、井上ひさし、好子元夫妻の場合はそうしたフツーのケースが通用しないほど派手な報道が繰り広げられてしまった。ひとつには「すべては小説で…」というひさし氏に対して、好子さんの自己顕示欲をマスコミが巧妙に利用してあおったことも一因だろう。

さて、写真の文書は9月29日午後、米原ゆりさんとの再婚問題で取材に押しかけたマスコミに対してひさし氏自身が手書きしてわたしたコメント。写真にもあるように「全文掲載・朗読が条件です。部分使用は認めません」とあり、マスコミ各社から「誓約書」を取るという念の入れよう。これははっきりいって井上氏のマスコミ対策の勝利である。それもマスコミをよく知っているから出来た方式である。まさかマスコミ各社がこれを〝大本営発表〟なみに扱うはずがなく、もてあますことは必定だからだ。芸能人諸氏もこれを見習ったらいかがだろうか?





「フルハムロードを閉店した良枝サンが〝慰安旅行〟へ 希望する普通の生活がやってくるのはまだ先の話か!?

「フルハムロード・ヨシエ」閉店フィーバーから二日後の九月十三日、良枝さんと家族、従業員ら総勢十六名は千葉県・鴨川へ二泊三日の慰安旅行に出かけた。鴨川はちょうど年に一度のお祭りの日にあたり、町中が大フィーバーの真っ最中だった。普通の生活を希望する彼女だが、一歩町に出ると、スッカリ有名人。若い男女からオジサンまで駆けよって握手ぜめにあったり、記念写真を求められたりとビッグスターなみの歓迎ぶり。

二日間は、鴨川シーワールド見学、ボーリング、つり、ゲーム大会、宴会、海岸での泳ぎ、焚き火、花火遊びといった文字通り〝慰安の時間〟だった。三浦和義氏との離婚を決意して肩の荷が下りたのか、母親という立場も忘れて、昔の少女ツッパリ時代にもどったかのようなハシャギようでもあった。

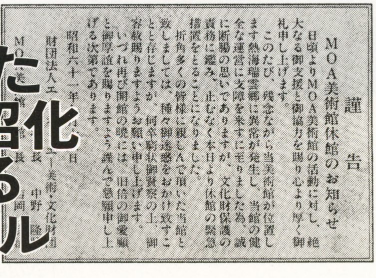
しかし現実にもどれば彼女には千葉からの引っ越し、親子三人の自活、三浦氏の面会と差し入れ、そしてカンジンの離婚の円満な話し合い、といった問題が待ちかまえている。年内一杯は雑誌連載の原稿料で生活はまかなえるメドがついており、新事業着手ということはなさそうだが、扶養家族二人をかかえた彼女の人生はまだ一波乱ありそうだ。



9月16日、大手新聞社会面の下段広告欄に「MOA美術館休館のお知らせ」なる〝謹告〟が突然掲載された。MOA美術館といえば、尾形光琳の「紅白梅図屛風」など国宝を含む一級の展示品を集め、いまや斜陽の熱海観光を支える新名所とまでいわれてきたところ。一体何があったのか——。

MOA美術館は総工費二五〇億円といわれており、これを支えてきたのは、年間予算二〇〇億円、総資産五〇〇〇億円といわれる世界救世教である。この宗教団体もご多分にもれず、総長のイスをめぐる内紛劇を展開中でMOA美術館休館もその余波を受けたものである。先頃〝ダヴィンチ疑惑〟が週刊誌を賑わしたが、これも内紛劇から出てきたものであった。目下のところ、この世界救世教は、岡田斎教主抜きで、松本康嗣総長派対中野隆昭理事長の対立抗争を展開中。熱海の本部周辺では写真のようにヘルメット姿の信者たちが〝武装〟してニラミあいを続け、機動隊員も出動するという日々なのだ。ある宗教評論家曰く。「今年のダブル選では、元警視総監で金権体質プンプンの下稲葉耕吉をスイセンした宗教団体。所詮、カネと権力をめぐる争い。どっちもどっちだと思います」

結局は、金が儲かりすぎる宗教団体の宿命的トラブルというわけだが、いつもツンボサジキに置かれるのは末端信者と相場は決まっているようである。



謹告

MOA美術館休館のお知らせ

日頃よりMOA美術館の活動に対し、絶大なる御支援と御協力を賜り心より厚く御礼申し上げます。

このたび、残念ながら当美術館が位置します熱海瑞雲郷に異常が発生し、当館の健全な運営に支障を来すに至りました為、誠に断腸の思いでありますが、文化財保護の責務に鑑み、止むなく本日より休館の緊急措置をとることになりました。

折角多くの皆様に親しんで頂いた当館と致しましては、種々御迷惑をおかけ致すことと存じますが、何卒窮状御賢察の上、御容赦賜りますようお願い申し上げます。

いづれ再び開館の暁には、旧倍の御愛顧と御厚誼を賜りますよう謹んで懇願申し上げる次第であります。

昭和六十一年 [illegible] 日

財団法人エ [illegible] ー美術・文化財団 [illegible] 長 中野 隆 [illegible]

MOA美術館 [illegible] 長 吉岡 [illegible]

〝ダヴィンチ疑惑〟で揺れた世界救世教の内紛が泥沼化結局、権力とカネをめぐる宗教団体の宿命的トラブル



東京 風俗景

'86 VOLUME 20

荒木経惟
Nobuyoshi Araki

なぜ、こんなイイコがこーゆーとこにいるかとゆーと、アラーキーが写す性風俗のコはいつも明るいのに、なぜ表情が暗いかとゆーと、ココは監獄だからです、ゆうこさん(21歳・音大生)はココにきてまだ3日目なのです。ある日、旅行から帰ったら居候の女友達が家財道具一切、預金通帳までももって消えちゃってた。お金がないからしかたなく……。面接には死ぬ思いで……。昼間はピアノの先生のアルバイト……。

パステル＆パンチ(TEL 207-9329) マジックホール(3,000円) 監獄ヘルス(4,000円) ショートコース(5,000円) フツーのヘルス(10,000円)











監獄ヘルス。

á·la·carte
マスコミ・ア・ラ・カルト

■MAGAZINE

BRUTUS 裸の絶対温度





故坂本藤良学園追悼式



■FUNERAL



■PARTY

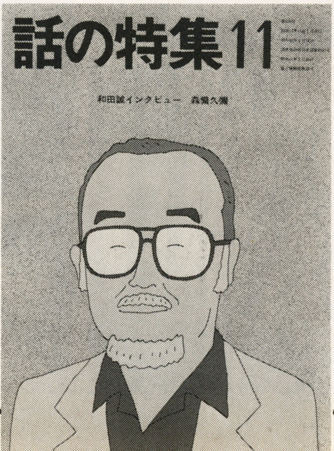
志茂田景樹著作一〇〇冊記念パーティ



9月18日麻布十番「マハラジャ」にて文芸記者日記参照

■MAGAZINE

『話の特集』五ヵ月ぶり復刊第一号



噂の真相

'86・11月号とびら——ゴシップ&ごしっぷ



イラストレーション・阿部正理

椎名誠写真集

海を見にいく

海へのやさしい憧憬を撮りおろし
書きおろしでつづるシーナ・マコト
スペシャルエディション――の登場だ！
十一月中旬発売

沢野ひとしの

少年少女絵物語



定価一〇〇〇円　好評発売中

本の雑誌50号

10月中旬に
ど〜んと発売
乞御期待！



本の雑誌社　〒160 東京都新宿区新宿5・10・11 第2スカイビル8F A☎03・352・5291

週刊読書人は こんなに内容のある 新聞です。

◇書評掲載点数日本一
◇バラエティに富む書評、他紙に見られない〈ビジネス〉欄
◇近刊予告と出版情報を満載
◇一流出版社の広告を網羅
◇現代の文化界の状況を伝え、的確に論評
◇ワイドなブックガイド特集
◇日本図書館協会の「選定図書」を解説つきで速報
◇大活字とオフ印刷で鮮明な紙面

みほん差し上げます（本誌で見たとハガキ下さい）

株式会社読書人
〒162 東京都新宿区矢来町109
振東5-57070 ☎03・260・5791

出版総合誌――――――◀

出版ニュース

●月３回発行（1、11、21）
●Ｂ５判・定価＝260円
●直接購読料　1年＝10000円
半年＝5000円

▶最近号の主要記事＝「出版教育」の可能性を探る－箕輪成男／「著作権という名の私有財産」等の利用の対価－豊田きいち／中国の出版研究の現状をたずねて－清水英夫

昨年の出版界のデータを網羅収録

出版年鑑'86

出版年鑑編集部編　Ｂ６判・9800円

〔主な内容〕年間史（年表／概観）、書籍目録、雑誌目録、統計（書籍／出版社／雑誌／小売店／教科書／図書館／広告／輸出入）、名簿（発行所、取次会社、輸出入会社、著作権エージェンシー、日本書店組合連合会、関係団体、広告代理店ほか）、法規・規約・参考（世界の出版統計、'85年度全国ベストセラーズ、戦後40年のベストセラーズ・10大ニュース）

〒101 東京都千代田区三崎町3-2-4 出版ニュース社 ☎(03)262-2076 振替東京5-66956

楠田枝里子サンの男の正体
角川書店の"ヤリ手"編集長
過去のあるユニークな人物

グラビアでも紹介した通り、楠田枝里子サンの「男」は角川書店、月刊『カドカワ』編集長の見城徹サン(33)である。この人、業界では肩で風を切って歩くタイプで、女性ライターにあえば、「オレにまかせれば、角川書店が全面バックアップして必ず有名にして売り出す」と豪語してきたヤリ手編集長の割には、今回の一件では実にサラリーマン的だった。相方の楠田サンが「ワタクシがいくつだとお思いになります? 付き合っている男性がいても当然だと思うんですけど……」(フライデー)と毅然としているのに比べて、見城サンの本誌へのコメントは、

「いや、そのことについては、ボクは何もしらない。何もわからないっていうしかないよ。僕と彼女はたしかに仲のいい友達だけど、そういうあれじゃないしね」

とオトボケ。そのカゲでは親しい友人に、

「彼女はコマーシャルをやってるし、スポンサーから何かいわれるんじゃないかと心配でね。どっちにしてもしばらくほとぼりがさめるまで身を隠すことにしたよ」

と語っているのである。実は、この見城サン、この二重人格ぶりがこれまでも作家や知人たちに嫌われてきたのがよく分っていないようだ。ヤリ手の人物にはよくあることだが、「いい人だ」「とんでもないやつだ」と相反する評価がこの人の場合も例外ではない。

実は何を隠そう、二人の関係を本誌がキャッチしたのはいまから二年前だ。見城サンが楠田サンのマンションから深夜出ていくのを二回も目撃しているのだ。当時はともかく、二万部で低迷していた月刊『カドカワ』を十万部台のメジャーにしてみせると編集長を引き受けたいま現在では、本誌が規定する"オピニオンリーダーとしての公人"に入る。武士の情も、もはやこれにて打ち止めである。

見城サンは慶応大卒。サンポウ・ジャーナルを経て角川書店に入社している。入社の際、神だのみのための個人神社まで持つ角川春樹ワンマン社長に"組合運動はやらず、社長に忠誠を誓います。社長の悪口をいってる奴の事は必ず報告します"といった調子の"黄犬契約"で採用されたというのは有名。自分でもスパイまがいの行為にイヤ気がさしたのか、酒場で酔っぱらって「どうせオレはイエロー・ドッグだ」と自己卑下していた時期も過去にはあったという。

その非人間的ともいえる行為のかわりに手にしたのが角川春樹の忠実なる部下としての社内における権勢だった。他の大手出版社に比べて"売れりゃ勝ちだ"的な角川商法がネックとなり有名作家獲得におけるハンデを無名作家やルポライターの中から発掘することで能力を発揮したのである。バックには神だのみの角川春樹がついていることで、ヤリ手編集者としてメキメキ名前をあげていった。

だが、人間、カネと名声を得ても二重人格のジレンマはそう簡単に消え去るものではない。彼の場合も屈折というパターンとなって表われた。私的には離婚した後、親しい知人にはインポテンツの悩みを語り、やがてSMへの志向へとつながっていく。「もともと強い女が好き」と語る見城サンの知人も彼のマゾ性を指摘する。もっとも彼のSM志向が団鬼六の作品を角川文庫に入れるというユニークな発想を生み、営業的に貢献したというか

ついに発覚した竹下登の再婚歴!前妻の悲劇的自殺の真相は伏せたまま

ら、やはり能力の人なのだろう。
　ともあれ、見城サンはかつて林真理子サンとの仲もウワサされたが、彼の美意識、マゾ性からいけば、やはり楠田枝里子サンの方だろう。幸いなことに二人とも独身である。二重人格の苦悩をいやしてくれるパートナーに出会ったことはさらに幸いなことである。いまこそ胸をはって堂々とヤリ手編集者の道を歩むチャンス到来ではないだろうか。

小佐野賢治をめぐるウワサ
第一勧銀と共謀取引が濃厚
フィクサー健在を見事証明

「小佐野賢治が極秘入院したらしい。病院がいまだに分らない」「行方不明とか死亡説もあるそうだ」といったウワサが流れたのは九月に入ってからだった。結局、胆石の手術で入院して、九月十二日に退院したことが後に判明し、ブッソウな死亡説は消えた。
　その小佐野賢治と第一勧銀の藤森会長をめぐるスキャンダルを〝三流誌〟の『週刊大衆』（10／13号）がスッ破抜いて話題になっている。タイトルは「第一勧銀会長がふっ飛びかねないアノ小佐野氏との取引!!」というもので、内容は、藤森鐵雄会長の実妹・小平薫が「みんなお兄ちゃんがやってくれたんだからね」という藤森会長と小佐野賢治の〝共謀取引き〟を示唆する発言を引き出したものだ。
　事情を知らない読者のために〝解説〟しておくと、藤森会長の実妹・小平薫が経営していた栃木県の塩原温泉にある「㈱ホテルこめや」が倒産し、暴力団や右翼などが債権がらみで介入してきたことが発端。その問題のホテルを小佐野が関連会社の「㈱ホテル青森」名義で十億五千六百万円で購入したのである。その時、これは小佐野が会長をつとめる帝国ホテルの犬丸一郎社長誕生と第一勧銀の藤森会長が取り引きしたというウワサが流れたのである。というのも帝国ホテルは十年前の経営危機の際、第一勧銀が前社長の原正雄を送り込んだといういきさつがあった。そのため、第一勧銀系の原社長が退陣さえすれば、ダミーに犬丸社長をすえた小佐野体制が確立するからだ。実際にそうなったわけだからウワサは当時からかなりの説得性があった。
　この一件では『週刊宝石』『週刊新潮』などが記事にした他、右翼、ヤクザ、ブラックジャーナリストなどが第一勧銀に押しかけ、第一勧銀から多額の口止め料をせしめていったといわれる。
『週刊大衆』といえば三流といえども第一勧銀は広告主として取引きのあるところ。現にこの記事が掲載された号にも第一勧銀の広告がしっかり入っているのになぜ？　という疑問がわく。本誌取材によれば、このネタに飛びついた編集部が広告部を出し抜いて独走したというのが真相のようだ。これも三流誌ならではの快挙といえようか。
　もっともこの記事は画竜点睛を欠いているとの見方もある。つまり、この事件の舞台裏における〝犯罪性〟の指摘がないというものだ。債務者と一部債権者が結託して、公正なる競売を妨げ、弱小債権者たる「善意の第三者」に意図的に損害を与えた行為は明らかに刑法に違反している。世間ではこの種の事業を営む人々を〝会社整理屋〟と呼ぶ。しかし、藤森、小佐野の取引きにしても、その舞台裏がいまひとつ明確でないためである。
　さらに注目すべきは「こめやホテル」が「ホテル青森」によって競落された六十一年六月十日から二カ月後の八月十八日に、今度は兼松通商に転売されていることだ。価格は二十数億円だが、その金を融資したのは東京相互とも関係の深い相銀住宅ローン㈱。いう

までもなく東京相互の長田会長と小佐野は近しい関係。小佐野はこの「こめやホテル」で十億以上儲けた上に、帝国ホテルの一元支配も手にしたことになる。さすが大物フィクサーといったところだが、一方の藤森会長はついに社内的責任が問われ始めたという。

「日刊ゲンダイ」が自主規制 千葉動労委員長談話が没に KIOSKへの配慮からか

九月十八日に街頭で販売される「日刊ゲンダイ」九月十九日号の第25面が、当日一八日の朝、急拠差しかえられた。スタンドに出まわった「日刊ゲンダイ」の25面は、宇能鴻一郎の連載小説「淫行くらぶ」の下が連載ものの「あの人は今こうしている」のコーナーで、元日劇ミュージックホールのトップダンサー岬マコが登場している。ところが、本来なら、岬マコは翌九月二十日号に予定されていたもので突然一日繰りあがったというのである。

それでは十九日号に予定されていた「あの人は」誰かというと、これが何と千葉動労委員長の中野洋だったのである。

差しかえとなった記事は、まず見出しに、

『国鉄内で分割・民営化反対を口にすると国賊扱いされる。だが、赤字解消もならず、大量解雇だけが確実な分割・民営化には断固として戦うぞ』と千葉動労の中野洋委員長」

とある。当然分割民営化反対論だ。

「民営化されたところで赤字が解消するどころか、初年度から借金しなければやっていけないのは歴然としているんです。しかも、職員の大量解雇だけは何が何でもやるつもり」

「まったく、最大労組の国労が当局側の攻撃に対して後退に後退を重ねているんだから情けない。（中略）国労や動労は〃雇用確保が第一〃といっているが、私たちは雇用を確保するには、労働者が立ち上がって闘う以外にないと考えている」

と、国労、動労にもきびしい発言。

「ヤマは今月（注九月）末から十一月にかけて。いよいよ正念場だから、今度は全国的規模の闘争を呼びかけているんです。従来のような総武線ストだけで終わらせたくない」

日本航空内で反伊藤会長派の高木会長＝萩原社長の復権工作が活発化へ

十月あたりにストをやりそうな雰囲気を漂わせている。

ところが、発売前日の十七日の夜に、この記事を読んだ販売局が横ヤリを入れてきたという。「日刊ゲンダイ」といえば「夕刊フジ」とともに有力な夕刊紙。KIOSKでの売上げが90パーセント以上を占めると言われ、まさに弘済会サマサマなのである。販売局としては、弘済会・国鉄当局側の心証を良くしておきたいとの意図で、記事差しかえを迫り、結果として編集局はこの要求をのみ、発売3日前に入稿の連載コラムであったことも幸いして、岬マコの一日繰りあげという差し変えが翌朝一番になされたという。

奇しくも、この日の「日刊ゲンダイ」1面は、中曽根首相が自民党タカ派集団に「藤尾発言やあなた方の本質的な考えは私も同じだ」と発言した事件。このことを「赤旗」以外の大手紙・TVが報じなかったことにひっかけて、お得意の見出しは、

「ずるいぞ　これだけの重大ニュースなぜ流さぬ　だから腐敗・堕落したなどと非難されるのだ大マスコミ殿」

人の振り見てナントヤラ。同じような自主規制をやっていたのでは、反権力を装ったって大マスコミは批判できませんぞ。

江本孟紀の最近の受難事件
個人事務所で受難事件発生
身から出たサビとの声も！

今や、野球評論家というより、完全にタレントづいてる〝エモやん〟こと江本孟紀。最近では、11PMのメインキャスターをつとめたり、ミュージカル俳優として「くたばれヤンキース」に出演したりと、幅広い活動を展開している。

さて、その彼の活動の拠点であるのが、江本エンタープライズなる個人事務所。そしてこの小さな事務所を実質的にキリモリし、最近の江本の活動をプロデュースしてきたのが、江本のマネージャーであり、同社の役員にも名をつらねているヤリ手と評判のY女史だった。

ところが、このY女史のおかげで江本が大きな金銭トラブルに巻き込まれているという。

事の発端はY女史が、副業として、フィリピン女性をダンサーというタテマエで、クラブやキャバレーに送り込む仕込み屋、つまり〝じゃぱゆきさん〟の斡旋業をはじめたことによる（Y女史は二年前にもこの〝ビジネス〟で入国管理法違反の疑いで摘発をうけたことがあるという）。

この時、ダミー経営者をたてるということになり、江本が友人のAをY女史に紹介した。ところが、このAがかなりのワル。仕込み屋で稼ぎだしたカネのほとんどを横領してしまった。しかもAはそのカネを個人的に借金していた江本への返済にあてていたというから話がややこしい。

とまれ怒ったのはY女史。Aに対してはもちろん、江本に対しても〝グルではないか〟との疑いもち、とうとうS連合系の暴力団幹部まで雇い、欠損分を取り戻そうと躍起になりはじめた。

江本をよく知る関係者によれば、

「Yさんと江本は愛人関係にあるというウワサです。だから、なおさらYさんにしてみれば裏切られたとの思いが強いのでは……」

と語る。

現在は、江本宅にまで連日のようにヤクザが押しかけてくるというから、いくら〝身から出たサビ〟とはいえ、エモやんにとっては災難としかいいようがない……。

JICCが危険な大バクチ 週刊少年まんが誌を創刊へ ノウハウなしを危惧する声

『宝島』の版元であるJICC出版局に〝危機〟の声が囁かれている。といっても『宝島』や『別冊宝島』が不調だというわけではない。年内に創刊を予定されている、ふたつの雑誌に関して、である。

ひとつは〝フェミニズムをベースにした批評誌〟で、創刊号は浅田彰と上野千鶴子の対談がメイン。変則的な刊行ペースになるという。もっとも、こちらの方は比較的に部数も少なく、失敗しても損害は知れている、という見方が強い。

もう一誌の方が危機説の直接の原因で、こちらはナント少年まんがが週刊誌だというのである。この分野は『少年ジャンプ』があれだけ大当りしていたのに、追随誌が出なかったくらいで、かなり大手の出版社ですら二の足を踏むというのが実情。JICCでは、すでにファミコン雑誌（『ファミコン必勝本』）を持っており、最近のコミック誌がファミコン記事とファミコンものに頼っている点を逆手に取って、そのルートで読者を開拓する狙いだという。

すでに12月スタートが決まり、創刊の目玉は永井豪だという。ところがこの編集部、単行本から来た大西祥一が編集長の新体制なのだが、まんが雑誌のノウハウを知っている人間が社内にはいないというのである。そこで、フリーの編集者、プロダクションを使うことになるのだが、週刊というペースの速さで、間にプロダクションが入るというのは、まんがが雑誌の常識からすると暴挙と考えられても不思議ではない。それでも、ファミコン記事のページを中心に何十ページかを下請けに出す方針は決まっているらしい。また、フリー編集者の方も、ギャラの安いことで有名なJICCに、人材が集まるのかと危惧する向きもある。

少年まんがが週刊誌などという、バクチにJICCがなぜ手を出したのか。それには理由がある。JICC出版局のこれまでの主たる財源は、地方公共団体発行の印刷物の請負いだったのだが、行革のあおりを喰って、軒並み仕事がなくなってしまい、全面撤退を余儀なくされてしまったのである。その分の余剰人員を抱え、あげくの果ての大バクチが、少年まんが週刊誌だったというわけだ。

JICC内部の事情はどうあれ、しろうと集団が三十～五十万部が平均という少年まんがが誌を毎週出していくことの無謀さを、心配する声は強い。しかも赤字の場合は、週単位でそれが累積していく。いやはやJICCも勇敢な選択をしたものである、というのが関係者たちのホンネのようだ。

週刊大衆セコム記事の裏側 犯人さがしを執拗に展開！とりまきの過剰防衛に問題

『週刊大衆』（9／29号）の「警備業界トップ・セコム会長女房の家出騒動…」なる記事をめぐる舞台裏のお話。このセコム会長・飯田亮(53)の奥さんが家出したという話をキャッチした『大衆』が取材してみたら奥さんはゴルフ場でゴルフをやっていたというキツネにつままれたような話。しかしその舞台裏を見てみると、この業界内一部に流れたウワサはやはりホントで、あわてたセコム側が奥さんを

金丸信がバックの土橋＝商工リース集団が「東プレ仕手戦」で50億円の穴

さがし出して、とりつくろったんじゃないかと思わせるに十分なのだ。

まず第一段階。『大衆』の取材を知った電通が少額の扱いとはいえスポンサーということで情報収集を開始。セコムの事情に詳しいジャーナリストによれば「セコムは成りあがり企業なのに新聞は朝日、雑誌は『文藝春秋』しか見ないなんて広言するから狙われたんだ」ということになるが、株価一万円乗せを間近にひかえた時期が時期だけにイメージダウンを避けたかったということで、その意向を電通がくんだと見るべきだろう。

第二段階。誰がこの情報を流したかの犯人さがしが始まったこと。まず疑われたのが、業界のシニセ「綜合警備保障」。同社は松本清張の『深層海流』にも登場する元内閣調査室長の経歴を持つ村井順の会社。セコムのライバル会社でもある。記事掲載後、同社には『週刊大衆』を名のる人物からヒンパンに怪電話。察するところ綜合警備側が、「この間はどうも…」などというものなら、やっぱりと決めつけるつもりだったのではないか。

この怪電話の主は複数の人間だったようで一説ではセコムに巣喰う〃情報屋〃たち。そのうちの一人はブラックジャーナリストのKで自ら警備業界の関係者に「(犯人が)だんだんわかってきたぞ」と語っていたとか。

もっとも当のセコムの飯田会長は「有名税だよ、ほっとけ」と呵々大笑しているといわれるが、側近たちが名誉キソンで訴えるとイキまいているのだという。しょせんチッポケな警備業界。そんなところで記事を書かれたからといって情報屋が暗躍したり、側近が息まいたりすることもなさそうだが、これも「警官もどき」のかっこうをしているガードマン会社の体質なのか……。

ワープロ普及で怪文書増加
『財界』のスパイ男を告発！
ミニ版針木康雄的人物評で

ワープロ普及で急激に増えたのが怪文書による告発。本誌編集室にも毎月何通も送られてくる。その中から一通紹介してみよう。タイトルは『財界』のAをご存知ですか」とある。Aは実名となっているが、本誌の配慮で伏せたことをお断わりしておく。

《自動車担当の経済誌記者として長いキャリアを誇る、「財界」でも数少ない〃書ける記者〃といわれている。

この御人、最近、何を血迷ったか頻繁にかの針木事務所を訪ねている。

事実、筆者も事務所で出くわし、驚き狼狽したA氏を見ている。(こう書くと、A氏は筆者が誰であるか想像がつくであろうが)何故「財界」を追放された針木氏をA氏が訪ねるのか不思議に思う向きもあろう。

A氏の仲人は針木氏であり、いわば親同然の存在なのだから出入りするのは当然といえば当然だが、現在の財界と針木氏との関係からみれば当然の一言で片づけられる問題ではあるまい。

A氏が針木事務所を訪れる唯一最大の理由は、針木氏と若林出版の若林照光氏とが組んで新経済誌の創刊を企画しており、A氏はこの準備の手伝いをしているのである。

「財界」八六年七月一日号で六ページにわたって「三菱自動車、三菱製鋼合併」の大誤報を書いたばかりのA氏は、さかのぼる八五年十一月二十六日号でも「日産ディーゼル、エ・販合併。日産自動車・日産車体合併」の誤報もとばしている。この合併報道好きの御人、これを誤報と思わないで胸張って各社の広報に出入りしているところがまた面白いのである。

しかし、これ程の大誤報をたて続けに書いたら、新聞マスコミの世界では、即左遷である。それでも自動車担当記者として今だに健在ということは、低迷する「財界」の記者不足を露呈していることの証左であろう。

三鬼氏が新しい経済誌を標榜して創刊した「財界」もここまで落ちたかの感がある。今や、「財界」の編集会議の情報はおろか、紙面刷新内容、広告収入情報まで針木氏に流れている。更にA氏の口添えにより、「臨増財界」でアルバイトする新聞記者が多数おり、御人は徐々に〃ミニ針木〃よろしく、フィクサーへの道を歩もうとしている。

マスコミ界にはよくあるスパイ行為とはいえ、歴史ある「財界」の内部崩壊にいたたまれずペンを執った次第である。

解説はあえてつけないことにしよう。

名高達郎婚約破棄の真相は事務所と西尾の母の対立が情けない名高と興信所介入

名高達郎と西尾かおるさんの婚約破棄騒動は名高が「それはいえません」を連発したことから芸能レポーターの好奇心に火がついたようだ。しかし真相は意外と簡単なのだ。

「名高の所属プロとしては今年の芸能界の結婚式の目玉にすべくイベント的に準備を進めたが、西尾かおるの母親がことごとく口ばしを入れてきた。頭にきた所属プロが二人の結婚をブチこわそうと西尾かおるの周辺を洗って、名高にあれこれ吹き込んだわけだ。芸能人志望とかプロ野球選手との交際、年齢詐称とかね。どこがお嬢さんだ、親子してグルになって名高をろうらくしたというわけだ。名高も名高で、所属プロのいいなりになってしまった。情けない話だけどね」(芸能評論家)

35歳のプレイボーイ名高も困りものだが、もっと困ったのは所属プロが調査を依頼したのが白橋栄治というウサン臭い人物を副社長に迎えたばかりの東京興信所。マスコミにしゃしゃり出てしゃべりまくっていたのを見てこの商売確実に客が減ると思わせてくれたほどだ。最近、何かと便乗屋が横行するのは困った風潮だ。

≪敬称略≫

毎日新聞の創価学会員説のある外信部長が更送されてロンドン支局長へ

「マニラ市内保険金殺人事件」

第二話　マニラの風——タイ人女性・モアイ

●大久保利久



●再びはじめに——編集部より

犯罪報道に関する問題点が今日ほど批判的に語られ始めたのはおそらく、近代史においても初めてのことだろう。批判のポイントは大手新聞を中心とした犯罪報道が、捜査当局——記者クラブというルートを通した官製の発表モノとして存在し機能しているという点に集約されるといっていい。

つまり、捜査当局側に与えられた部屋に待機して発表を待ち、それをそのまま本社に送れば事たれりとされている現状は、まさに戦時下の大本営発表とそれほど大差がないシステムといっていい。捜査当局が〝犯人〟と思

われる人物を逮捕して記者発表すれば、そのまま自動的に事件となり、犯人に仕立てあげられてしまう。手続きからいえば捜査当局が〃犯人〃を逮捕しても、取り調べを経て、ホンモノの犯人かどうかの証拠を調べた上で、起訴して公判維持が可能かどうかを最終的に判断する。起訴前に誤認逮捕だったというケースがあり得ることは歴史が証明ズミである。

さらに起訴されたとしても、裁判レベルで判決が無罪になったり、長期にわたる再審請求を経て無罪となる冤罪の例も数限りない。本来は、裁判レベルで刑が最終確定した段階で初めて犯人とされるのが民主主義のルールのはずである。ところが、大新聞を初めとしたわが国のマスコミは民主主義のルールも人権上の常識も持ちあわせていないのが現実である。いや、そう決めつけるのがいきすぎだというならば、不本意ながら、そうさせられているという現実は捜査当局へのまぎれもない迎合であることに変わりはない。

こんな子供にも分りそうな論理をあらためて書かざるを得ないところに、わが国の犯罪報道における救い難い現実がある。最近の事例でいえば一美さん殴打事件の三浦和義被告だ。目下公判進行中で刑が確定したわけでもない以上三浦和義ではなく三浦和義氏でなければならない。マニラ保険金殺人の大久保利久、小林良夫両被告も氏をつけて当然なのだ。しかし、そんな良識を持ちあわせているのは、残念ながら、商業ジャーナリズムの中ではわが『噂の真相』ぐらいのものである。

さて、前置きはこのくらいにして、本誌で二回にわたって連載してきた大久保利久氏の「マニラ市内保険金殺人事件」も疑問と謎の多い事件である。前号でも触れたように大久保、小林の両氏が逮捕されて以降、大新聞はいつもと違ってほとんどフォロー記事を発表していない。その理由は二人が黙否権を行使しており材料が出てこないこともあるが、当局に報道管制されているフシすら感じられる。

この事件に関する最近の報道で目についたのは9月12日付読売新聞の「マニラ殺人　捜査員また現地へ」という記事だ。すでに起訴ズミの事件で再びマニラに捜査員を派遣し、二週間にわたり「強力磁石」などを使ってマニラ市ロハス海岸沖で凶器とされるゲンノーを再捜索するのだという。これは異例のケースであり、警視庁としても公判維持にいまいち自信が持てないことの証明ではないのか。

もうひとつの報道は毎日新聞が小さく扱った、9月24日付で「詐欺未遂でも起訴　マニラ保険金殺人」という記事。8月22日に殺人罪（国外犯）として起訴されて以降も、二人は警視庁に留置されたままで一カ月以上もかかって保険会社の告発を受けて「詐欺」で追起訴されたことになる。ここにも捜査当局のあせりと強引さが垣間見えはしないか。

本誌は何も捜査当局の足を引っ張っているわけではない。過去、幾多の冤罪の犠牲者を思えば正当な捜査が望まれるし、捜査の結果たとえ心証クロの印象は残ったとしても、立証できなければ、警察の威信やメンツを捨てて、〃疑わしきは罰せず〃という民主主義のルールを守るべきだという主張を展開しているにすぎない。まして、本誌が大久保氏との接触で得た〃小林良夫氏は実行犯ではない〃という認識が正しければ、大問題となる〃事件〃である。捜査当局もそれを知ってか、二人は分離公判になるという。その辺に対する大手新聞のフォローがまったくないのも犯罪報道の今日的状況をよく表わしていることは確かだろう。

〈編集部〉

国鉄民営化に対する当局批判や国労支援記事に鉄道弘済会が検閲の動き

●退屈な日々の中で

日本に帰って退屈な毎日が続いた。ギラギラとした欲望などなにひとつなかった。

私は、家族三人にしては大きすぎる家の、部屋の片隅で、不規則な時間が過ぎていくのをうずくまって待っていた。時間の経過に意味があるとは思えず、ただただ、早く歳老いて、さらばえて、土に帰りたいと思うようになっていった。

夏の盛りだった。皆が皆、暑さなど、なんでもないかのように、適度に汗をかいて街を歩いていた。

私は、夏が暑かった。息子が明るい声で私を無視して、けなげと律義さだけを取り柄として生きている妻に、学校に行くことを告げる。妻が、私に「元気でね」といって〈何か〉を憐れんで仕事に行く。私は、どろどろとした何の感慨もなく、息子と妻に「いってらっしゃい」と告げ、階下の食堂におり、水を何杯も飲んだ。本屋が月に二回、どうでもよいほんの少しユニークなだけの妻が予約した書籍を持ってきて、二日に一回牛乳屋が牛乳四本を運んだ。水をたくさん飲んでも、妻の本をバラバラとめくって読んでみても、牛乳を四本全部飲んでみても、それで、大した長い時間が過ごせるわけでもなかった。

そんな時の昼日中、麻布に住むM氏から電話があった。

「はい、大久保です」私が電話器をとった。

「……Mだけど、ヘッヘッヘッ。どう元気」と社交辞礼。面倒くささが先につのってしまう会話の出だし。元気か、元気でないか、どうでもいいじゃないか、という対応。

いつもの事だが、自分が退屈だとM氏は私に電話をかける。そして針小棒大な用件をいって私を呼び出し、彼もまた退屈な時間を過ごす。退屈さに耐えられるか、耐えられないかだけの話。

「……何か、おもしろい話ない」

私が言葉もなく黙っていると彼はさらにこういう。元気かどうか、おもしろい話はないかどうか……。

「あるわけないじゃない」私は返事をする。

「……」M氏のしばしの沈黙、思い入れでもあるのなら、それでもいいけれど、彼自身が、ただたんに退屈だから電話する、という背景だから、とめどもなく、冷たい感じに感じるだろう私の対応、耐えられない面倒などうでもいい電話。

……何故、あなたは、用事もないのに、電話をするのか……受話器の内側で私が想う。

「ちょいと逢わないか？」M氏がそういう。

……逢って、何の話をすればいいのか？

しかし「うん、いいよ、何処で？」私が受話器の外側で喋る。

「〈ウィンザー〉で逢わないか」いくばくかの退屈しのぎができたM氏の声が、うれしそうな顔をうかべているのが、私に伝わる。

麻布十番温泉の横にある喫茶店……遠いなあ……それでも適度なドライブにはなる。

「ああ、いいよ。すぐに行く」退屈な話が待っている。……何故ハッキリと断わらない……面倒くさいだけなのに……。

〈ウィンザー〉につく。M氏のくるのが遅れる。何時ものことだ。わざと格好でもつけて遅れてくるような感じ。新聞を読む。

肩を少しゆさぶりながら、M氏が15分遅れてくる。ありもしない何かしら大事な用件でもかかえこんできたかのように……。

「やあ、元気？」私がとりつくろう。

「まあね。ヘッヘッヘッ」M氏が答える。
ヘッヘッヘッはM氏の単なる癖。
「……」M氏が何かを私に喋る。
「ああそう」と私。
「……」
「へえ。そうかよ」と私。
「……」
「それでどうしたの？」
「……」とM氏。
M氏が注文した飲み物がくる。
「あっ、どうも。へっへっへっ」注文した飲み物を見ながら、M氏が誰にいうともなく、ウエイターにいう。

彼の話は、私には何の興味もそそらなかった。いずれにしても結論が解りきっている話。ラジオ番組で時々耳に入ってしまう「人生相談」風なワクを決してはみ出さない内容。結局は、「会話」ではなく、単なるグチの聞き手役。グチを「会話」として聞いて、「ウンウン」とうなづいて、誰が考えても常識的な返事しかできようがない返事をする。

……帰りたい……特に他にやることが残っているわけでもないが、珈琲も飲んだし、新聞もパラパラと見た。熱心にM氏が何やかやと話かける。……この場を逃れる術はないか。

フッと思った。

マニラの風景。マニラの風。S氏のこと。三国間に渡る保険金殺人！

●保険金殺人の発想との出会い

M氏と親しい、タイ人の女性を妻にしているN氏がいた。
「Mさん。Nさんの住んでいるアパート知ってるよね」私が身をのり出して聞く。
「うん、知ってるよ。あんたも知ってるんじゃない。前に行ったことあるし」とM氏がいう。
「ウン、一度行ったことがあるけど、もうずっと昔で忘れてしまった。連れて行ってくれないか」と私。道に迷いながらさがすほどのことではない。この退屈な場所を逃げられれば、それだけでいいのだから……。
「うん、ちょっとなあ、遠いし」M氏がいい、「なんの話なの、ヘッヘッヘッ」とたたみかけて続ける。
「いや、何でもないけど、ちょっと用事を思い出した。N氏の家まで案内してくれ」と私。
「何の話なのよ、おもしろい話なら俺ものるよ。ヘッヘッヘッ」

……おもしろい話なら、それは退屈なあたならのるだろうよ。だけど、私は、この退屈な場から逃れたいのだ。私はM氏に話をしたいわけじゃない。
「いや、話の内容はいえない」と私。
「何で、……ヘッヘッヘッ。俺とあんたの仲じゃない。教えてよ」

……面倒くさい。別にN氏の家に行かなくてもいいんだ。このまま別れようか……。
「いやあ、まあ、話によっちゃあ、ヘッヘッヘッ」

また始まった。彼一流の「値ぶみ」。たかが、家まで連れていくということだけでも、何らかの「見返り」を期待する顔。

どうせ話のための話だ。
「Mさん、Nさんに話そうとしている内容を教えるわけにはいかない。ただし、万が一、その話が、ひょんなことからうまくいったら、あなたに600万あげる」と私。

身をのり出してM氏がいう。
「へえーそう……どんな話。ヘッヘッヘッ」
「だから、話の内容はいわないといったじゃ

電通マンガ業界紙の会合で〃エタ部落〃発言して部落解放同盟が糾弾行動

ないか。家を教えるだけで、600万円もらえるかもしれないんだ。ああだ、こうだといちいちいわないで、連れていってよ」と私がいう。

ほんの少しの間あい。

「じゃあ、いこうか……ヘッヘッヘッ。だけど、どんな話かぐらい教えてよ。ヘッヘッヘッ」とM氏。

「いいんだ、いいんだ。とにかくあんたは600万！」と私。

彼が、やっと腰をあげた。面倒くさいだけの会話。これで、やっとこの退屈な場を抜けられる……。

N氏と逢った。

「よお、ひさしぶり」彼のマンションのドアーが開き、私を確認すると同時に、本当にひさしぶりそうな表情をして、N氏が私にいった。

一緒に、部屋の中まで入ろうとしたM氏に、それを拒むために礼をいい、「さきほどの約束は必ず守るから……」と、機先を制し、彼を帰宅させた。

「まあ坐って下さい。何ですか、今日はまた大久保さん」独りで部屋に入り込んだ私にN氏が楽しそうにいった。

「おもしろそうな話があるから、持ってきたんだ」私はいきなりの質問のいいわけをしながら、席に座った。

「むっ、すると金儲けの話ですか。大久保さんは金儲けがうまいから」N氏がいって

「そんなことないよ」私が苦笑している。

「まだ、タイ人の女性と一緒に暮らしているの？」解りきっていることを、間をとりもつような感じで私が聞いた。

「当り前ですよ。私の正式な女房なんだから、それがどうかしたの」N氏がいう。

「ずいぶん〝勘〟がいいじゃない。当り前のことを聞いたのに、それがどうかしたの、だなんて聞くとは」と私。

ハッハハッハッと二人で哄笑した。

「ずいぶん今日は機嫌がいいじゃない、よほどいい話みたいだなあ。今日は楽しみだ」

えてして〝突然の訪問者〟というのは、不快かそうでないか、両極端だ。

「Nさんの奥さんという訳にはいかないから、他にタイ人の女性、知らないかな」と私。

「他のタイ人の女？……大久保さん、話ってのは、保険金とか何とかっていう話じゃないの？」

「ウン、まあ、ずばりそうなんだよ」人間が思いつくことってだいたい皆同じようなもんだよな、と私が思う。

「……ウン、そうなんだけど、でも、まだ、さっきもフト考えた事で、まだ具体的でもなんでもないけれど」

N氏が、幾分はりつめた様な表情でいう。はりつめるということは体に快感があるだけなのかもしれないようなはりつめ方。

「それ、おもしろいじゃない、大久保さんちょっと真剣に考えてみてよ。あんた、考えるの得意じゃない」

「まだ、何もいってないよ」笑いながら、私がいった。

「解りますよ。あんたが何の用事もなくて、暇つぶしでくる訳がない。保険金でしょ。保険金。やろうじゃないの」N氏が本気な顔でいう。

どぎまぎとしながらもなかば面白がって、私がいう。

「ところで、Nさん、殺人なんてできるのかね」そして「できるわけないよね」と付け加えた。

「そんなの簡単だよ」N氏がいった。

「えっ!? どうやって殺るの!?」表情ひとつ変えずに、N氏がいう口元を私がみながら思わず真剣に聞いた。

『殺し』の仕事まで聞いたわけでもないのに、N氏がたち上がり、バットを振って軽いスウィングをするような恰好をしながら、

「こうやるんだよ」といった。

……バット状の凶器をつかい、頭をネラッテ打てばそれでよい……N氏の仕草はそう語った。

私のノウリにその時、「話のための話」から「実行準備に入る話」に発想が移行した。

……人殺しの≪場面≫を何の前おきもなく、突然たち上がり、バットを振る恰好をみせていとも簡単に「こうやるんだよ」というような人は〈人殺し〉を実行できるのかも知れないな。ああする、こうすると真剣に手ほどきをする人に、そんな、人類最高の犯罪などできるわけがない……そう私は思った。

……よし、考えてみよう。彼の妻の友人のタイ人女性を選び、しかも、日本に住民登録がしてあり、なおかつタイ国籍を有する女性で、タイ国以外の外国に連れ出して、その人を殺害した場合、結果として、それで保険金を搾取することはできるのかどうか?……。

私のそうした≪発案≫をN氏に話し、タイ人女性に≪適当≫なのがいるかどうかの話題に入った。

「モアイが錦糸町の店に働いている」N氏が口を開いた。

「モアイ?」と私。

「大久保さんも、知っている筈だ」

「知らない」モアイといきなりいわれても、私に知る筈がないじゃないか。

「逢えば解る。以前、よくこのマンションに遊びにきていて、モアイの方は、大久保さんの事を随分に知っている。錦糸町の店に飲みにいって、うまいこと接触すればいい」N氏がいう。

●タイ人女性・モアイとの再会

錦糸町のロッテ会館の横道を入ると、めざす「フラミンゴ」というスナックがあった。

店に入った。小さな店で、N氏がいったとおり、タイ人女性が5、6人働いていた。席に坐った。知っている顔は誰もいなかった。すぐに私の左側に女性がつき、ビールがコップに注がれた。

「ヒサシブリデスネ」その女が私にいった。

「オオクボサン」モアイだった。

めざす≪標的≫が向こうから近づいてきた。

私は、つとめて平静にグラスに注がれたビールを飲んだ。

「本当に久しぶりですね」

「ホント。ワタシモ、ビックリネ」モアイが商売上の笑顔をつくっていう。

「ドウシテ、コノミセニ、ハイリマシタ」モアイが聞く。

「いや、偶然だ」私が答えて、

「偶然この店に入ったら、あなたがいた」と私がいった。続けて私がいう。

「久しぶりだね。二年ぶりかなあ」

「ホント。ワタシモ、ビックリネ」モアイが、素直に認める口振りでいう。たしかに二年振りだった。ずい分とニホン語がうまくなった。絶妙な機微にまで反応する。

閉店間際になった。私がいった。

「昔から、あなたが好きだった」

「ホントデスカ?」昔の私の素振りが、すぐに思いおこされたのか、モアイが不思議そう

写真誌に狙われた日教組女性副委員長のレズ説は高級クラブ筋では有名

な顔でいった。

……私達タイ人女性がよく集まるNさんの家で、よく大久保さんを見たけれど、誰に対してもくどくようなことは決してなかったのにとおそらく考えていたのだろう。

「モアイ、今晩つきあうか？」私がいう。

「オオクボ、カネモチ　ワタシ　イイヨ　ツキアウ」モアイがすぐにうなずく。モアイもまた、巷間伝えられるジャパユキさんであり、日本の男から、おそらく性的リョージョクを受け、それに気づかずに、過大な金銭の見返りの方に魅力を感じる〝東南アジア〟の女であった。

「それじゃ、店が終わったら、どこで逢う？」

「イイヨ、イマスグニモイイヨ。ワタシ、ダイジョーブ」モアイが、すぐに〝金で性を売る女〟にその場で変わった。

ホテルに入った。私は、度がすぎて酔っぱらったふりをして、寝入った。

朝、早めの夕方にモアイの店に同伴するといってデートの約束をして別れた。

そのまま、昼過ぎまで、私はそのホテルでねむった。

その日の夕方、総武線「平井駅」前の喫茶店で二人はおちあった。

「フィリッピンにいかないか？」

「フィリッピン？　ナゼ？」モアイが聞いた。

「仕事でつかれた。少しのんびりしよう」

「……？」

「二人でいきたい」

モアイからしばらく、はっきりとした返事がかえってこなかった。当り前の話だ。

「一日三万円あげる。フィリッピンに遊びに行こう」私がいった。

「イイヨ、ワタシ、ダイジョーブ、ワタシ、フィリッピン　ニ　イク」モアイがすぐに答えた。

その夜一時間ほど、モアイの店にいた。まずい、どうでもいい酒だった。また連絡する、とモアイにいって帰った。二万円を無造作にモアイに渡した。

翌日の昼頃、N氏から急に電話があった。

「もしもし、大久保さん、だめだよ、俺んちにタイ人女性が、やつらの仕事が終わってからモアイを囲んで、やいのやいの騒いでいる」

「何を騒いでいるの？」私が、わけがわからずに聞いた。

「大久保さん、モアイとセックスしなかっただろう」とN氏。

「ああ、しない。それがどうした？」と私。

「おかしい、私達が以前知っている大久保は、女に金を使うというタイプではない筈だ。急にモアイの店にきて、金をモアイにあげて、フィリッピンにいこうなんて、何かウラがあるに違いない、といい出して、不思議がっている」とN氏。

「何を不思議がっているの」私が聞き返した。

「もちろん、保険金のことなんか、解ってはいないが、要するに、〈モアイ、おかしいから行かない方がいい〉と皆がいっているし、俺の女房もいっている。それでマニラで殺しちゃったら、みすみすばれてしまうよ」とN氏。

「うーん、それじゃ、仕方がない、中止にするしかないじゃない。まあ、仕様がない、また何かあったら連絡するよ」と私。

「ああ、そうしてくれ」

「じゃあ」といって電話を切った。

……どっちみち、マニラに連れ出しに成功したところで、それで保険金殺人が成功するというわけでもなし、どうでもいい。……私は、食堂の冷蔵庫を開け、牛乳を飲んだ。

〈第二話・了〉

高杉弾のメディア散歩

コメディの巻

ここ数か月、仕事で内外のいくつかのコメディ・ビデオを見る機会があり、「笑い」というものの不思議さを痛感させられたのでした。僕が見たのは、日本でビデオが発売されているごく一部のものにしか過ぎませんが、それでも、例えばイギリス、アメリカ西海岸、ニューヨーク、現在の日本、戦前の日本というふうに分けてみると、その笑いの質はずいぶんと違うものであります。

イギリスの作品は「モンティ・パイソンズ・フライング・サーカス」です。イギリスの歴史的な伝統と過激なユーモアに支えられたこのシリーズは、もう何年も前に日本でもテレビで紹介され、そのあまりにも奇抜なギャグに七転八倒したものですが、いまビデオになって改めて見ると、これが何故かぜんぜん面白くない。モンティのメンバーたちも、もうとっくにこの番組を離れて、各自が独自の方向へ去っていきました。最近ではジョン・クリーズのシチュエーション・コメディと、テリー・ギリアムの映画「ブラジル」が有名ですが、両者に共通しているのは、やはりイギリス人独特の徹底的に作り上げる笑いの感覚です。イギリス人は笑いに対してもけっこう「本気」なんですね。

アメリカ西海岸のチーチ＆チョンの笑いは、あきらかにカリフォルニアの抜けるような空の色から出てきたもので、70年代以降のカリフォルニアが何の文化も生み出しえないように、彼らの人気もすでに過去のものとなって、アメリカ人にとってのクレージー・キャッツになってしまったようです。

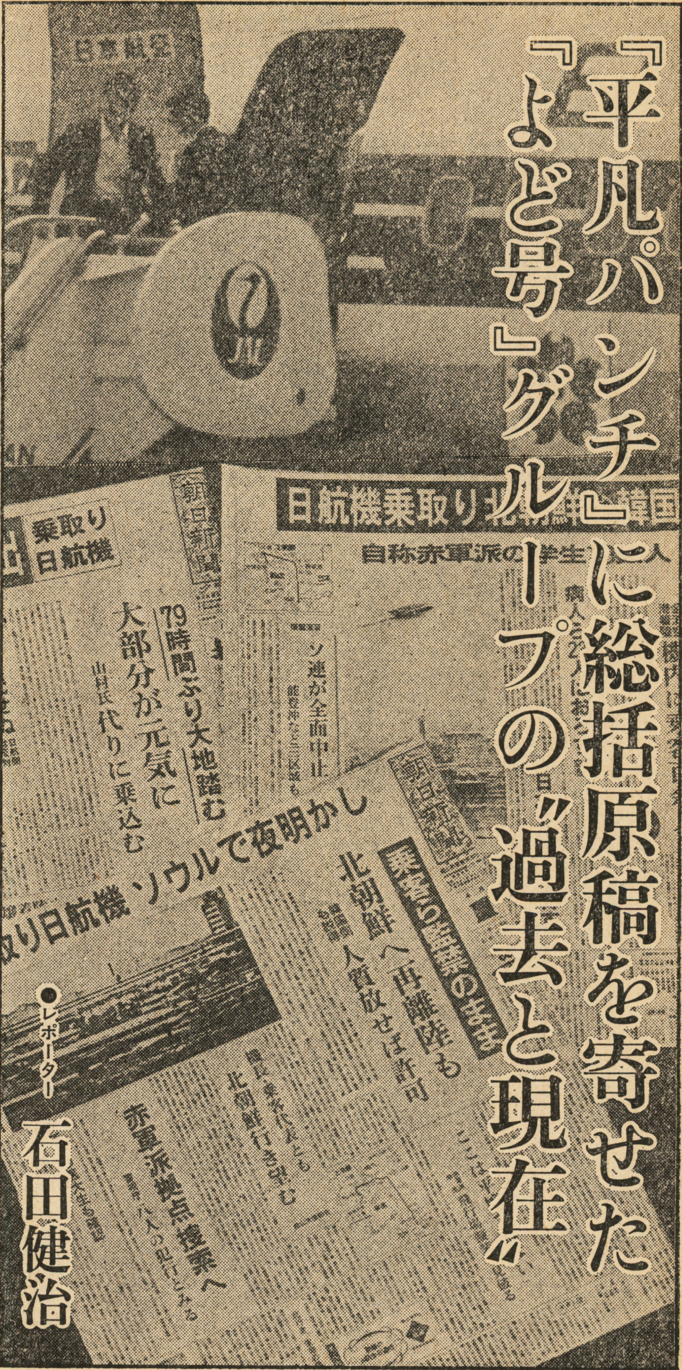
NBCテレビ「サタデー・ナイト・ライブ」からのジョン・ベルーシは凄いものでした。この番組は多くの優れたコメディアンを世に送り出したけれど、やはりベルーシにかなう人はいない。ベルーシの笑いには、アメリカ最良の精神であるカウンター・カルチャーの良心が息づいている。そして、ハリウッドきっての悪ガキでもあった彼の芸には、屈折したアメリカ人の怒りや悲しみが満ち満ちています。だから本当はあまり笑えないんです。

笑えないといえば、日本の天才コメディアン、イッセー尾形の芸もなかなか笑えたものじゃない。記号と化した演技をさらに演じている彼の「サラリーマン」や「土方のおっさん」や「画家」を見ていると、笑いというのは悲劇の裏返しなんだということがよく分かる。いっぽう。シティ・ボーイズに竹中直人といとうせいこうが加わったラジカル・ガジベリビンバ・システムにはあきれてしまった。彼らは「意味のない笑い」を強調するけれども、それが少しも面白くない。そしてそれが「新しい」というけれども、彼らははたして大正期のダダの笑いを知っているんだろうか。

そして戦前の日本の笑いの代表、エノケンの映画は、もっとも新しい娯楽メディアであるビデオでさえ、すでに廃版になっているのでした。タモリの密室芸も、やれるうちに早くビデオにしておいた方がいいんじゃないでしょうか。テレビじゃできないやつばっかり集めて。

『平凡パンチ』に総括原稿を寄せた『よど号』グループの"過去と現在"

●レポーター 石田健治



●ソウル・アジア大会と『よど号』グループ

第10回アジア競技大会は、まさに戒厳令下そのものの異常な厳戒体制の下に行なわれた。全斗煥大統領にとって、政治体制の強化、なかでも、北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)に対する優位制をアジア諸国にアピールするとともに、2年後に控えたソウルオリンピックの成功を保証する絶好の機会として、なんとしてでもアジア大会を無事終了することが必要であったからだ。

開会式を前にしてのソウル金浦空港爆弾事件の時も、事件後現場検証もない段階でいち早く北朝鮮の指令を受けた工作員の犯行の可

能性を強く打ち出し〝北の脅威〟に対する警戒心を一層強化するように国民に呼びかけたことがその辺の事情を逆に物語っていた。

日本の公安当局もアジア大会開催前から、新左翼各党派や韓国の反体制グループと関係を持つ団体、個人、北朝鮮系の在日朝鮮人活動家に対する監視を強化したことはいうまでもない。更に海外に拠点を持つ日本人活動家に対しても、ICPO（国際刑事警察機構）や在外日本大使館を総動員してチェックを強化したといわれている。なかには〝ソウルテロ戦争〟の危険性を煽り〝日本赤軍のソウル作戦〟などとブチ上げたマスコミもあったほどだ。

そんな〝テロブーム〟の中で、唯一リストアップされなかったのが『よど号』ハイジャックグループの田宮高麿以下8人のメンバーであった。本来ならば、メンバーがピョンヤンに滞在しているという地理的条件からいっても、ブラックリストのトップにランクされても不思議ではなかったかもしれない。もっとも無視したのはマスコミだけで、日本の公安当局は怠りなくチェックを入れたとも伝えられる。「この夏に『よど号』メンバーの数人がソウルに秘かに潜入し、秘密工作をした疑いがある」「日本の活動家が北京で『よど号』メンバーと接触した」などといった公安情報が一部に流布されたことでもうなづけよう。

そんな折に『平凡パンチ』（10月2日発売号）に『よど号』メンバーの〝総括文書〟が掲載され始めた。連載と銘打ってあるところから、かなり長文のものであることがうかがえる。

これまでも断片的には、メンバーの動静やコメントが伝えられることはあったし、本誌でもインタビューという形式で、彼らの近況を伝えたことはあったが、〝総括〟といったまとまった形で、彼らの内実が伝えられたのはハイジャック決行以来、16年目にして初めてであろう。

彼らが〝総括〟を公開しようとしたからには、〝帰国〟も含めて、方針に何らかの重大な変化があったのか――。また〝総括〟には何が書かれているのか、その周辺をレポートしてみよう。

「明日のジョー『ライブM朝鮮』」とタイトルがついた〝総括〟はどのような経過をたどって『平凡パンチ』に掲載されるに至ったのか。

「ウチでは以前、彼らからのアピールを『祖国・日本の若者たちへ』というタイトルで掲載したことがあったんです。その時の内容は正直いってかなり教科書的で肉声が伝わって来ないといった印象があったものですから、機会があれば、ハイジャック闘争を計画実行し、これまでピョンヤンで過ごして来た16年間を詳細にリポートしないかと、彼らにコンタクトしたわけです。彼らの闘争や今日の状況に対してはさまざまな批判があり、私たちも首をかしげるところがあるのも事実ですが、彼らのナマの声を聞くことが重要だという立場に立って、準備を進めたわけです」（『平凡パンチ』編集部S氏）

●〝帰国決意〟で総括公開か！

これまで新聞などで伝えられた彼らの発言を点検してみると、昨年秋頃から微妙にニュアンスが違って来ていることに気付く。

北朝鮮入りしてから数年間は、北朝鮮当局の「彼らは安全にかつ充分な生活を保証されている」といった公式コメントだけであった

部落解放同盟のA書記長がオリエントファイナンスから五百万円受領説

が、その後、現地で接触したジャーナリストや国会議員などを通じて「学習に励んでいる。今は帰国を考えていないが、いつの日にかは……」となり、ここ一、二年は、「無罪なら帰国を考慮する」といったコメントが伝えられてきた。

中曽根首相宛に「無罪を保証するなら帰国したい。われわれの意志を検討して欲しい」と、直接〝手紙〟を送りつけたりもした。もっともこの中曽根首相宛の〝嘆願書〟は、かつての活動家たちや遠くアラブの日本赤軍からもかなり強烈な批判を浴びたりもした。

それが昨年秋頃から「万難を排して帰国する！」といった、かなりせっぱ詰ったニュアンスに変わってきた。

「吉田君（吉田金太郎）が病死したことも大きな要因だけども、ピョンヤンでの彼らの置かれている立場が、以前とはかなり違って微妙なところに来ているからじゃないかと思いますけれど……」

（北朝鮮事情に詳しいジャーナリスト）

〝微妙な立場〟の事情については後半で詳述することにして〝総括〟公開の舞台裏をもう少し追ってみよう。

「正直にいいますと、彼らにそれほど強く手記を要請したわけではないんです。手紙の往復は何回かありましたが、細かく打ち合わせするなんていうことも物理的条件からいっても出来ませんし……。

原稿が私たちの手元に届いたのは、8月中旬です。最初は400字詰で1000枚以上の膨大な〝総括〟を書き上げたらしいんですが、実際手元に届いたのは、250枚程度のものです。内容を一読して、これまで伝わってこなかった事実や、彼らの〝変化〟の軌跡がわりと率直に書かれていたものですから、掲載しようということになったわけです。

ただ週刊誌ですし、長期に連載するのは内容的問題やこちらの誌面の都合などもあって無理なので、彼らに連絡を取って約四分の一程度に縮めました。彼らとしては全文掲載して欲しいという意向を強く持っていましたが、こちらの事情も考慮して納得してもらいました。それとあくまで若者向けの大衆誌ですので、活字だけを羅列してもしょうがない。そもそも読者の中には『よど号』ハイジャックの事件すらも知らない人が多くなってきているので、若干劇画仕立てのようなイメージで構成したわけです。彼らの行動の正否についてはいろいろ意見はあるでしょうけれど、かつての若者がこのような軌跡をたどったのだというノンフィクションとして読んでもらえればと思っています……」

（『前出の『平凡パンチ』編集部S氏）

1000枚以上書かれた〝総括〟といえば連合赤軍事件の永田洋子の〝自己批判総括〟があるが、永田はひとり、ピョンヤンでは8人、さぞ〝作業〟に手間取ったものと推察される。

その事をうかがわせるのが、署名は『日本を考える』編集委員会となっているが、原稿の各パートに筆者の署名が入っていることである。これまでスポークスマン的な役割りを担っていたのは若林盛亮であったが、今回は、田宮高麿、小西隆裕、安部公博、そして岡本公三の実兄・岡本武らの署名が見られる。

「単純なスローガンや生活のリポートならそれほどもめないでしょうけれど、いちおう思想的な総括も含まれているわけだから、かなり時間がかかったんではないですか。特に北朝鮮の政治体制に対する評価や帰国を含めての方針などについては、メンバーが100パーセント一枚岩だとは思えないところもあるように感じられますし、それなりに大変だったんじゃないですか……」

と、彼らと現地で面会したことのある関係者ももらす。
すでに『平凡パンチ』誌上で掲載された〃総括〃の一部には、事件当時、乗客や関係者から伝えられた模様とは違った事実が書かれている。ただ乗客の身代りとなって『よど号』に乗りこんだ〃男新治郎〃こと山村政務次官が朝鮮民主主義人民共和国とすぐにいえずに「北朝鮮……」と口走ってしまったり、石田機長ら乗務員も一緒に、豪華な朝鮮料理のフルコースを前に乾杯した様子など、昨今のハイジャック闘争とは違って、まだまだ牧歌的なムードがあった時代の様相がうかがえて興味深い。

●一年以上滞在する予定はなかった!

『平凡パンチ』の連載で詳しく書かれることになるだろうが、彼らの知られざる〃闘争〃ぶりをより正確に伝えるため、本誌は独自ルートで問題の原稿を入手することができたので、その一部を紹介していこうと思う。
ピョンヤンにひとまず落ち着き、今後の具体的な行動を討論するシーンでは、

≪われわれがチョソンに来る前に一堂に会したのは「二回のハイジャック」の前にそれぞれもった会議だけで、チョソンに行ってからどうするかについては、ほとんど討論されてはいなかった。それで宿舎に入るとすぐ、今後の方針と対策についての会議を開いた。ここでまず、三つのスローガンを確認した。
第一、「生きるも死ぬもともに」(中略)
第二、「過渡期世界論の防衛と発展」
われわれは赤軍派である。赤軍派の立脚点とは「過渡期世界論」だ。われわれはこうしてハイジャックしたのも「過渡期世界論」の具現である「世界革命戦争――前段階蜂起」を貫徹するためであった。そのためには「過渡期世界論」を指導する「世界党」を作らねばならない。(中略)
第三、「ハイジャックの完全勝利へ、立派に準備して日本へ」
ハイジャック闘争はそれ自体が目的ではない。ここチョソンで政治思想的にも、軍事的にも準備して、日本へ帰ってしっかりたたかうためである。だからハイジャック闘争は、日本への帰国が実現できたときはじめて勝利したといえる。初志を忘れずに自分をより立派な革命家として鍛えよう。いつも日本にいる同志のこと、人民のことを忘れずに生きていこう。どうすれば日本に帰れるか、その方法を研究しつくそう。(後略)≫
と、ハイジャック決行から北朝鮮入りまでの具体的な行動方針は、ほとんどといっていいくらい持ち合わせていなかったことを初めて明かしている。当時の運動情況から考えれば、彼らの破天荒なハイジャックという戦術を実行するには、やむをえなかったことでもあるのだろうが……。
北朝鮮側に対する具体的要求については、
≪①軍事訓練をしてくれること。同時に今年中に日本へ帰れるよう、条件を整えてもらうこと。
②「経済学」、「哲学」、「抗日武装闘争の経験」の講義をしてもらうこと。
③見学を組織してもらうこと。
そして最後に、日本の状況を知るために、
④日本の新聞・雑誌を見られるようにしてもらうこと、ラジオも性能のよいのを都合してもらうことも入れた。
結局、講義はすぐに始まった。「軍事訓練」については「研究してみよう」と言われたま

文昌堂で大型不良債権と得意先がらみのP&P事件を告発する怪文書が

『パンチ』に総括原稿を寄せたよど号グループ

ま今に至っている。

帰国については、「あなたがたは無茶をしてここにきたため、簡単ではないでしょうができるだけのことはします。よく研究し提案してください」ということであった。》

このような要求を出された北朝鮮当局も、彼らの扱いについて、かなり困惑したことだろう。社会主義国であり〝革命〟に理解を示す国柄とはいえ、素姓のわからない9人のハイジャッカーの〝素朴〟な要求を「ハイ、わかりました」というほど、おおらかではないだろう。

もっとも当初、彼らは北朝鮮ではなく、キューバを最終目的地にして、ハイジャック闘争を計画したという見方もあったが、カストロ首相だったらどのような対応をしたか興味深いが……。

このようにハイジャック闘争の大きな目的であった〝軍事訓練〟はそれから今日まで16年も待たされつづけているわけだが〝銃〟についての羨望も正直に吐露している。もちろんピョンヤン入りしてからしばらくの間だけだったようだが……。

《日本から来たわれわれにはピョンヤンの四月はまだ肌寒かった。しかし心のなかはカッカと燃えて、これから始まることへの期待に胸を膨らませていた。最初のころはピョンヤン市内の参観がしょっちゅう組織された。

（中略）

マンギョンデ、革命博物館、祖国解放戦争（チョソン戦争）勝利記念館、託児所等々。

そうしたなかで、当初われわれのもっとも興味をひいたのは、本物の銃が生身で見られることだった。日本では喉から手が出るほど欲しかったものである。街でたまに人民軍の兵士などに出会うと、「わぁ、いい銃をもっとる」と社会主義国独特のあのA－K歩兵自動銃にみとれていたものである。

楽天的なわれわれは、早くあれをもって日本へ入りたいなどと目をランランと輝かせていたものである。あれがあれば機動隊も自衛隊も恐るに足りず。今度こそ目にものみせてやる、と意気軒昂であった。》

結局、彼らは一発の弾丸も撃つことなく今日に到っているのであるが、当時赤軍派でハイジャックに加わらなかった何人かが、壮絶な銃撃戦を繰り広げて破滅していった〝連合赤軍〟のことと照らし合わせてみると、歴史の皮肉とでもいったような感慨にとらわれる。

●チュチェ思想に目ざめるプロセス

すぐにでも日本に帰り、北朝鮮で修得した武装闘争を大々的に展開するはずだった彼らの目論見は、見事に肩すかしをくらってしまうことになってしまったのである。

そんな中で、生活が落ち着き〝学習〟に励むようになると、彼らの内実も少しずつ〝転換〟するようになってきた過程をそれぞれの言葉で告白している。

《私（小西隆裕）は、私たちこそ日本でもっとも戦闘的な革命家として自負していた。もっといえば世界中でもっとも革命的だと思っていたところさえあった。だが、チョソンにきてから、私たちのそうしたおごりはふきとばされていった。

なによりも衝撃をうけたのは、私たちのところに来てくれた先生たち、宿所の管理員の人たち、見学先で案内してくれた工場や農場の幹部の人たち、そして様々な機会に出会い話し込んだ労働者や農民、漁民の人たち皆が革命的だったことである。（中略）

私たちは働く素朴な人々の力に目を見張りながら、自らの革命に対する態度をふり返っ

てみざるを得なかった。われわれは、自分たちだけが革命的だと思い、人民大衆の力を信じることができていなかった。だから人民大衆が自らの要求を自覚し、その要求を実現するため、自らの組織をつくっていくよう活動することができなかった。このための努力を決定的に怠っていた。これでは革命を勝利させることは不可能である。(中略)

われわれは革命に本気でなかった。銃をとり、爆弾をもち、革命に生命をかけているつもりだったが、それもつきつめれば、自分個人の満足のためだった。革命の勝利を具体的に見通し、そのために全身全霊うち込んでいるのではなかった。

それは金日成主席が領導した抗日武装闘争と私たちの闘いを比較したとき、より明確であった。かれらは人民の要求を自らの要求とし、人民大衆の力をかたく信じ、それに依拠してたたかった≫

他に、田宮高麿、岡本武らがそれぞれの〃転換〃の過程を一人称で書きつづっているが、全員に共通しているのは、全共闘運動、党派闘争、そしてハイジャック闘争を〃小ブル急進主義〃だったと自己批判的に総括し、北朝鮮の指導者、大衆の中で正しい〃革命思想〃に目覚めたと告白していることだ。

かつての自称前衛党の学習テキストに掲載されても違和感を抱かせないほどの〃変身〃ぶりである。社会主義国の中で〃監視付き〃の集団生活という特異な環境ということもあるのだろうが、パレスチナで武装闘争を呼びかけつづけている日本赤軍とは、まったく別の道を歩んできたことが良くわかる。

常に緊張状態にある朝鮮半島の事情に率直に触れた部分もある。

≪非常召集もある。これはチョソンがいつ戦争になるかわからないからやるのと同時に私たち自身の緊張した生活をつづけるためでもあった。

非常召集の笛と号令がかかると寝ていてもすぐに起き、服を着、荷物をまとめて外に集合しなければならない。五分以内である。照明をつけることは許されない。真っ暗な中で敏捷に行動しなければならない。

チョソン半島の情勢が緊張したときは、特にしばしば行った。共和国がアメリカの挑発に対処し、準戦時体制や戦闘体制に入れば、私たちも無関係ではなかった。

(中略)

こうした緊張した生活は、ただ革命のこと日本人民のことだけを考えるようにするうえで必要だった。私たち自身が要求し、自ら戦闘的な生活を強化するために努力し、そのなかで鍛えていった。たとえ、零下四〇度の寒さの中で飢えと敵の攻撃に撃ち勝ちたたかった抗日遊撃隊員のようにまではできないまでも、私たちなりに不撓不屈の精神を意識的に培っていこうとした。それが情熱に燃える二十代の私たちの心情だった≫

彼らはピョンヤンから一歩も出なかったわけではなかった。〃総括〃には北朝鮮各地へ旅行した時のエピソードもつづられている。ただ、物見遊山の慰安旅行ではなく〃体験学習〃の色合いが濃いものだったようだ。

そこでも彼らは交流した人々から受けた〃感銘〃を吐露しているが、額面通り受け取れば、大衆から〃革命〃を最も忠実に学んだ日本の若者たちということになるだろう。

北朝鮮側にしてみれば招かざる客だった彼らの経済的基盤については、

≪チョソンでの生活が長くなりそうになってから、われわれは仕事をさせて欲しいと申し

全逓左派がヤタガイ貸付け焦げつきなど幹部の資金運営告発本を発刊！

込んだ。なにもしないで生活させてもらっているのが心苦しかったからだ。しかし、チョソン側からの答えは「貴男方に働いてもらわなくても、われわれはやっていける」だった。

幾度か頼み込んでようやく仕事をまわしてもらったのは、チョソンに来てから七、八年たってからのことだ。初めは、すでに翻訳されたものの点検のようなものだった。日本語の言いまわしが適当かどうか調べるのだ。その後、翻訳や日本語教授の仕事もまわしてもらえるようになった。

われわれは、もともと仕事をする以前から生活費をもらっていた。それもチョソンの平均水準以上のものだった。そのうえ仕事をするようになってからは、仕事を多くやればその分だけ手当が出る。それで前々からやっていた貯金がぐんとふくれ上がった。なんせ、米、肉、野菜など基本的食料品は安価だからタバコやビールの出費を節約すれば、一カ月相当な額を貯金にまわせる。

この大量の資金をもとに始めたのが、季刊雑誌『日本を考える』の発刊である。一九八一年末から始めた。だが、この出費が馬鹿にならない。印刷費はチョソン側の好意でだいぶ安くしてもらっているが、日本や外国への郵送料が大変だ。さしもの貯金も最近では若干心細い状態になってきている。

そんなこともあって〝アルバイト〟は切実なものとなってきた。そうしたなかで私（安部公博）は、どちらかといえば日本語教授をすることが多い》

〝総括〟ではこのように〝亡命〟〝学習〟〝転換〟〝日常生活〟など詳細につづられているが、他にもメンバーの代表がリビアのトリポリで開かれた『全アフリカ青年フェスティバル』に参加した時のレポートなども付け加えられて、16年間の動静がかなりハッキリとうかがい知ることが出来る。

● 〝帰国〟は来年中にも？

最初に触れたように〝総括〟を『平凡パンチ』誌上で公開した彼らの真意を推測すると〝帰国〟が具体的なタイムスケジュールとして検討されているという事情もあるようだ。

これまでにも、岩井元総評事務局長、社会党の井上代議士などがピョンヤンで彼らと面会し〝帰国問題〟を話し合ったことがある。しかし、彼らが一貫して主張してきた〝無罪帰国〟というスローガンがネックになってきたようである。

「メンバーの中でも、いわゆる〝無罪帰国派〟と〝無条件帰国派〟に若干分かれていた時期があったようですね。こちらからさまざまな形で彼らと接触した人も多いんですが、どちらも建前論に終始しちゃって、ラチがあかない。でも、彼らだって半数以上は40歳を越して中年オジサンでしょ。北朝鮮に骨を埋めるつもりじゃないんだから、帰国して堂々と裁判闘争をやればいいんですよ。彼らがどのように変わったかはわかりませんが、あくまで〝亡命〟という形式で滞在しているわけだから、権力に対しても主張すべきところは断固として主張するという意志一致さえあれば帰国するのがいいんじゃないですか」

（メンバーと面会したことのある関係者）

一方、〝帰国問題〟に対しての北朝鮮当局の対応にも微妙な変化が見られるという。ソウルオリンピックを控え、日韓関係、日朝関係という複雑な構図の中で、出来れば懸案を早く処理したいというのが北朝鮮当局の意向だというのだ。〝重大な懸案〟ではないが、かといって現状のままで放置することも得策ではないと判断し、北朝鮮側が無理やり追い出したという印象を与えないで、彼らを帰国

させる方策を関係者に打診しはじめているという見方だ。

関係者の中には、早ければ来春にも帰国の可能性があると判断する人たちもいる。最近メンバーと家族との間の連絡が以前よりひんぱんになっているらしいということも〝帰国〟が現実のスケジュールとして問題になっている根拠のひとつと推測される。

「このような長文の〝総括〟を書き上げ、日本のマスコミに公開した彼らの真意は、やはり〝帰国〟を決意したところにあるんじゃないかと思います。もちろん現在の日本の情況では無罪放免なんていうことはありえない。

彼らだってそのくらいのことはわかっていると思いますが、その前に彼らなりの立場を表明しておきたいというのが〝総括〟の発表ということになったんだと思いますね。」（事情に詳しいジャーナリスト）

〝総括〟は〝帰国〟に関して積極的に触れているわけではないが、最後に次のようにつづられている。

≪いまやあれこれと論じている時ではない。『チョソンの日々』はわれわれにとって意義深く実り多いものであった。しかしそれにもそろそろ終止符をうつべき時が近づいてきたようだ。われわれは万難を排し帰国し、聖なるこの闘いの戦列に君たちとともに立つつもりだ。≫

七〇年初頭の日本を騒がせた『よど号』グループにも長い歳月が流れたのである。

この『よど号』グループのハイジャック闘争とともに日本を騒がせた連合赤軍による浅間山荘闘争の方もつい先月、判決が下りた。裁判はまだまだ続くにしても、七〇年代初頭の二つの闘争もそろそろ歴史的結着がつけられる時期になったということだろうか。

『平凡パンチ』というヤング向けの週刊誌に発表されたことで、当時を知らない〝新人類〟がどのような反応を示すかも興味深いが、『よど号』ハイジャック闘争に熱い眼差しを向けた全共闘世代が彼らの〝総括〟に複雑な〝感慨〟と〝歳月〟の重みを痛感させられることも、また確かだろう。

＜敬称略＞

季刊化宣言の「話の特集」が月刊で復刊するも森繁久弥起用に疑問の声が

『パンチ』に総括原稿を寄せたよど号グループ

●マスコミ日記

笑犬樓よりの眺望

筒井康隆



編集者が自殺する騒ぎまで起った五年越しの企画、小学館の「昭和文学全集」が、いよいよ刊行されるようである。

まずは、めでたいこと、と、祝っておこう。全集というのは祭りである。死者が出るくらいの祭りでなければ盛りあがらないし、喧嘩がなければ面白くない。こういう企画に対する作家としての正しい態度は、別段馬鹿にしているわけではなくて、やっぱり「めでたいめでたい。わっはっは」であろう。

それにしてもこの全集、おれの個人全集が出た時以上になんとなく気にかかるのは何故であろうか。

祭りとしてのこの企画でいちばん怖いのは笛吹けど踊らずという結果になることだ。見渡したところ他の出版社はこの全集に対して冷淡である。他社の企画だから冷淡なのはあたり前かもしれないが、ひとつには小学館という文学に無縁のところが出版することによる無関心がある。各社比較的すんなり作品を渡したのも大したことはないという判断からであったし、一度挫折して「やっぱりな」と安心しているところへ突然、ついに発足ということでもあり、「意地だろう」「文学史的インパクトには乏しい」などと冷たく見ているようでもある。あの下世話な文芸誌の匿名コラムでさえこの全集にはまったく触れていない。

さらにはまた、マスコミがまったく騒がない。おれの知る限りでは「サンデー毎日」が一度だけ記事にした。本来ならこの記事の如き「誰が落ちた」「誰がゴネた」という噂や憶測がマスコミを賑わすのが普通であり、少なくとも今までならば文学全集発刊をお祭り騒ぎに盛りあげるひとつの原因であった筈だ。実際、昔からこの種の全集が出るたびに「誰それはあいつと一緒の巻に入るのは厭だと駄駄をこねた」「扱いが小さいと言って全集入りをことわった」などの騒ぎが雑誌などのあちこちに載り、全集入りした作品以上のそれぞれの作家の人間臭さを、一読者であった頃のおれは大いに面白がったものである。

そのようなごたごたが今回、まったくなかったとはとても考えられない。何しろ第一回戦では自殺者が出ているのだ。しかるに下世話な面からの盛りあがりがまったくないというのは、一足とびに言うならばやはり小説衰退の一証左と考えられる。「そんなことは小説とは関係ない」と言いたい人も多いであろうが、おれはそう思わない。古来知名度は小説家の商売道具であり、知名なればこそのニュース・バリューであったのだから、文壇が一般の話題にならないのは作家の相対的知名度が落ちたのだと言えるし、一般に誰もが作家の名前だけでは驚かなくなったのだ。

さらにまた今回の全集は純文学が中心であり、約半数が故人である上、生存中の収録作家に偉い人が多くてゴシップが出にくいということがある。かといって、話題を盛りあげるためにはおれのような者が多少無茶苦茶なゴネかたをしたって「あいつならいつだって

ゴネるんだ」と思われ、やっぱり誰も驚かず、文壇内の噂とくすくす笑いで終ってしまう。

そうなのだ。今回の全集に限らず、本来ならばおれレベルのエンターテインメントの作家が何やかやと世間を騒がせ、底辺で話題になってこそ、純文学作家が雲の上の高みで光り輝くのである。その意味からは井上ひさし（レベルはおれより二、三巻ばかり上だが）の離婚→再婚騒動の功績は認めずばなるまい。悲しい話だが文壇関係でこれほどの騒ぎ、ここ数年来なかったのだ。しかもこの騒ぎだって半分は井上好子の活躍によるものであったし、一昨年の生島治郎の結婚美談にしてもそうだが、文壇に波及するものではなく家庭内の問題にとどまったわけであり、マスコミは今回の全集の如き本質的に文壇的な騒ぎにはやっぱりそっぽを向くのである。

昔は文壇そのものがドメスティックであり、それぞれの作家の家庭問題は文壇的な、もっと大袈裟に言うならば文学史的な問題にまでの拡がりを感じさせた。それを感じさせるような偉い作家が何か問題を起して騒がれるということは最近まったくなくなってしまった。作家同士で妻を交換したり、女優と逃げたり、殴りあいしたり、タクシーのガラスを叩き割って警察へ引っ張られるなどの騒ぎを起して然るべき若手の作家はみなおとなしく、そしてしらけている。

企画書によれば、この全集発刊にかける出版社の意図のひとつとして、小説の読者をとり戻すとか、低迷する文学に梃入れするとか、まあそういった意気込みがあったらしい。それならば、と、おれは思うのだ。純文学を中心とせず、エンターテインメントを中心にすればより効果があったのではないか。これは半年ほど前にもこの欄に書いたことだが、衰退しているのは純文学ではなくエンターテインメントなのである。純文学の最尖端は「今や小説言語の極北、虚構の高みにのぼりつめて」「まことに刺激的であり」その部分では「ちっとも衰弱していない」のであり、問題はエンターテインメントが面白くなくなってきたことで、これによって読者が減り、それに比例して、もともと少なかった純文学の読者までが減ってきているのだ。ならばここで、過去のエンターテインメントの傑作を再評価し、面白くない書下し長篇の量産に励む今のエンターテインメントの作家に活を入れるためにも、昭和娯楽小説全集全八十八巻の発刊をこそ望むのは当然ではあるまいか。

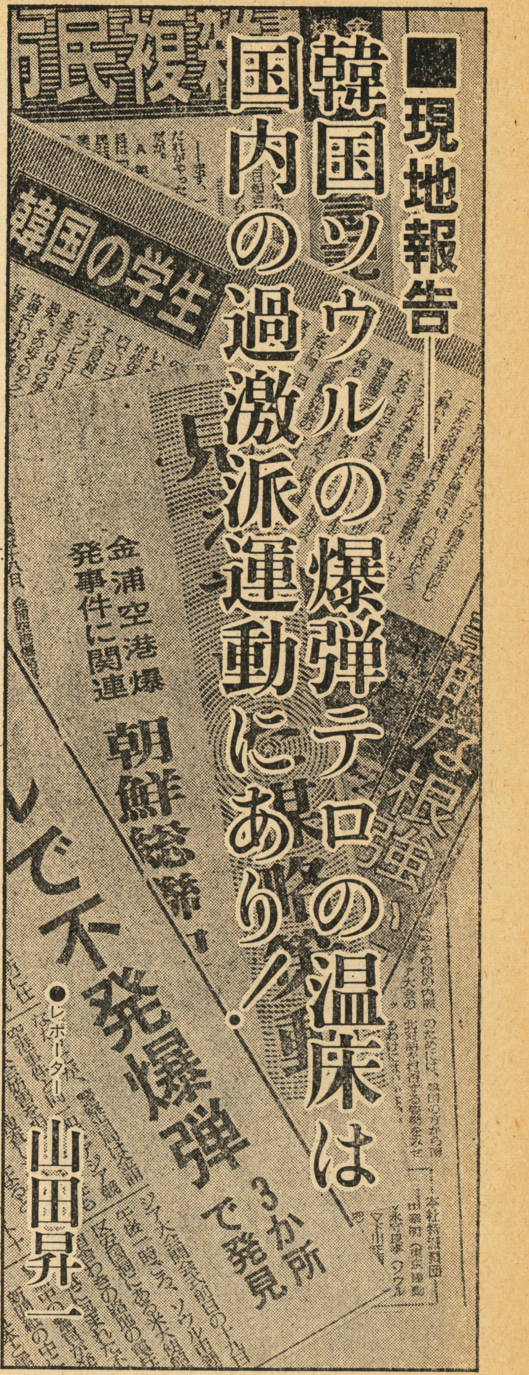
さらにうまいことには、過去にいかなるエンターテインメントの傑作を書いた生存中の作家といえども、かの崇高なる高みに存在する純文学の大家ほどには「偉いひと」にはなっていず、たいていはまことに人間臭い連中なのであり、マスコミも報道しやすい。全集発足の際の大騒ぎ、ゴネかた、喧嘩口論、今回の全集の比ではないと思うし、純文学作家に比べれば知名度の高い作家が多いわけだから面白く、マスコミも抛ってはおかず、でかでかと報道し、全集は盛りあがる。どこか、これをやる出版社はないか。



イラスト●山藤章二

■現地報告——韓国ソウルの爆弾テロの温床は国内の過激派運動にあり!

●レポーター　山田昇一



韓国光州市内のある光景

アジア大会の開幕を六日後にひかえた韓国・ソウルの金浦国際空港で起きた爆弾テロ事件は衝撃的ニュースとして報道された。事件直後から韓国の人々に限らず、誰が何のために仕掛けたのか、という一点に各国の関心は集中した。韓国の姜玟昌治安本部長は事件直後「北韓の所業か、その唆しを受けた者の犯行」と断定したものの、それは何かの根拠があるというものではなく、きわめて政治的色彩を帯びた発言でしかなかった。事件から、まもなく一カ月が経過しようとしているが、「北韓の所業—」といった証拠は何らあげられていない。北朝鮮サイドは一貫して「見えすいた謀略策動」と全否定したままだ。

そこで一体、誰が、何のために——という点にマトを絞って、本誌なりのアプローチを試みてみた。まず本編に入る前に、今年の五月十八日、韓国全羅南道・光州市内での光景から入ろう。

この日、光州市内は一日中デモ規制のため戦闘警察隊による催涙ガス弾の発射音が絶えず、道庁前の繁華街、忠須洞や忠錦洞一帯は夜更けまでガスが晴れなかった。ちょうどわが国でいえば、一九六七年頃の新左翼諸党派の街頭闘争で日常的に見られた光景と似たようなものであった。

八〇年五月の民主化要求運動が暴動に発展して死者百九十一人、逮捕者千七百四人（当局発表）を出した「光州事件」——。戒厳令解除を求める学生と戦闘警察隊の衝突を契機

に、市民約二十万人も学生側に加わり大規模なデモを展開、とうとう出動した軍の装甲車や小火器を奪って発砲する事態にまでエスカレートした。暴動発生九日目の五月二十七日未明、アジア競技大会直前のさる九月十四日金浦空港で爆弾テロ事件が発生した際大会期間中会場随所で見かけた、通称ブラック・ベレーで知られる韓国最強の特戦団(空挺部隊)がその時にも光州に投入され、政府サイドは実力で市内を制圧した。

あれから六年目のこの日、地元、全南大生を中心とする学生たちは道庁広場前で「光州事態六周年追悼集会」を計画していたが、数日前から増強された一万余人の警備陣の厚い壁に阻まれ、開催することができなかった。が、急進派学生たちは市内各所で投石や放火といったゲリラ戦を展開、終日光州市はその機能が麻痺した。

ところが、こうした過激派の街頭行動の陰にかくれてしめやかに行われた、小さな追悼集会について日本ではほとんど知られていない。

その日の午前十時過ぎ、市内中心部から十数キロ離れた望月洞の市立公園墓地で「光州事件」の犠牲者をとむらう集会が開かれた。白いチマチョゴリにタスキがけの遺族、野党第一党の新民党幹部、反体制派青年労働者、市民、そして一部学生ら総勢約千名が集まった。

まず集会の主催者側を代表して洪南淳弁護士の挨拶が行われ、次に新民党の楊淳稙副総裁が声明文を読み上げようと壇上に登ったところで、そのハプニングは起こった。青年労働者や学生たちが口々に「新民党は出ていけ」と叫びながら演台を取り囲み、同副総裁のスピーチを実力で阻止したのである。

まるでこれを合図にしたかのように、墓地内各所で騒ぎが起こった。学生、青年労働者の過激派グループが「殺人鬼・全斗煥」と書かれたタスキをつけた軍服姿の人形を燃やし気勢を上げたり、「軍事独裁打倒！」のシュプレヒコールを繰り返すなど追悼集会は大混乱となり、予定されていた追悼ミサを含む一切の行事が中止となった。

演台とマイクを占拠した学生たちはその後一時間半にわたって次々に壇上に立ち、「この集会を単なる追悼式にするのではなく、八〇年五月の未完の革命を継続する場所にしなくてはならない」と演説。参加者が街頭に打って出て抗議行動に立ち上がるよう呼びかけたというのも、その日の午後三時にはキリスト教団体による大規模な追悼集会が道庁前広場に通じる錦南路のYMCA会館で予定されていたため、過激学生グループはカトリック農民会や全南民主青年連合などキリスト教団体系の市民をも巻き込んだ大衆運動を展開しようとしたからにほかならない。

その後、学生らは道庁前広場に向かおうとしたが、すでに動員されていた四千人の警察機動隊が阻止したため学生らは止むなく、冒頭にあるようにゲリラ戦に転じ、夕方から夜にかけ市内各所では投石と催涙弾の応酬が続き、この日光州市だけで二百三十四人が逮捕された。

「北は誤判するな！」のスローガンも

ところが、混乱に陥った公園での追悼集会のあいだ中、じつに注目すべき横断幕が演台近くに張られていたのである。光州事件の犠牲者の追悼式が一転して「新民党糾弾集会」、さらには「反政府集会」に変わってしまったため、何枚かある横断幕のなかのスローガン

台湾で国民党の戒厳令統治に批判的なグループが「民主進歩党」を結成へ

に注意を払った者はそう多くなかった。

そして、そこに書かれていた過激派学生のスローガンは、韓国治安当局からはもとより北朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）から完全に黙殺されている。「軍事独裁打倒」、「ヤンキー・ゴーホーム」、「独裁政権を支持する米日は出ていけ」のほかに、「北は誤判するな」と記された横断幕があった。

北は誤判するな——とはいったいどういうことなのか。

この日の追悼集会について北朝鮮の国営通信社は、当然のことだが、「光州で人民蜂起六周年追悼式、反米、反政府デモを展開」と題し、以下のように詳しく報道した。

≪追悼式では犠牲者遺族協会代表をはじめ多数の学生、労働者、市民らが参加した。同日、追悼式が行われた光州市郊外にある光州蜂起犠牲者の共同墓地では「光州事件の真相を明らかにせよ」、「英雄たちに十分な補償金を支払え」などのスローガンが書かれた旗が垂れさがっていた。＜中略＞学生たちはまた、全斗煥（大統領）が政権の座から退くよう求め、全斗煥のワラ人形を焼き払った。学生たちはまた、全斗煥のファッショ支配を支持する米国と日本を糾弾した。追悼式終了後、学生、労働者、市民はファッショ無頼漢の野蛮な暴圧を退けて反米、反政府デモをくり広げた。＜中略＞追悼式が終わってから数時間後、青年学生と市民一千余人は道庁前広場に集まって「独裁者を打倒せよ」と叫びながらデモへ移行した。デモ隊が強い気勢で前進する道路の両沿いでは三千余の市民が熱烈な支援を送っていた≫

このような韓国学生運動への北朝鮮の〝認識〟を学生運動のリーダーはともかくとして、たとえばこの日デモに加わったノンセクト学生はどう受けとめているのだろうか。この種の北朝鮮による〝支持・連帯〟の意思表示については前々から苦々しく思っていたのではないかと推察される。自分たちの行動についてこのように報じられたことを知ったら、ビックリ仰天どころか怒り出すのではないか。北朝鮮が「全斗煥政権打倒（米・日の外勢は出ていけ」といったスローガンを支持するのは勝手だ。しかし、自分たちは北朝鮮の主張に賛同しているわけでもないし、ましてや彼らに指示されて運動をやっているのでもない。この点を誤解するなというのが、この日掲げられた横断幕に書かれていたスローガンの意味するところではなかったか——。

一方の韓国治安当局にとっても、学生らが日を追うごとに反米色を強め、行動形態もますます先鋭化する急進派学生組織を「容共団体」として取り締まっているので、学生のスローガンが〝反北＝反共〟というのではまことに都合悪い。そんなわけで、韓国政府当局も北朝鮮サイドも、「北は誤判するな」という横断幕については無視、黙殺するしかなかったのだろう。

最近の韓国学生運動の急進傾向

では次に、最近の学生運動の動きを少し細かくみてみよう。そうすれば、なぜこのような横断幕が掲げられることになったのか、また、今回のソウル・アジア競技大会直前に発生した金浦空港爆弾テロ事件に一部急進派学生が関与していたのではないかという疑いが生じたのが分かるはずだ。

第一にあげられるのが、学生運動の過激化ということだ。彼らの反米的主張は一見すると北朝鮮の主張に似ているが、その根底には民族主義的発想が根強いものとしてあるからだろう。また、「解放区実現」とか「労働者政権樹立」といった急進的なスローガンが目

立つようになったが、イデオロギーとして共産主義を体系的に体得しているとは思えない。ただ、六〇年後半の日本の全共闘運動や新左翼各セクトの理論的指導者だった黒田寛

金浦空港爆弾事件を報じた『フライデー』誌



一、太田竜といった人たちの文献が密かに韓国に持ち込まれ、翻訳されアングラ出版されている事実がある。さらには、今春になってからの特色だが、前線部隊入隊訓練拒否を主張するようになったということがある。分断国家の国民としての〃義務〃に真正面からチャレンジするというのは七〇年代から八〇年代初頭にかけての学生運動には考えられなかったことだ。

第二に指摘すべきことは、野党第一党の新民党に対し、公然と非難するようになったことだ。全斗煥大統領が四月三十日、与野党三党の代表を青瓦台(大統領官邸)に招き、八六年政局の最大の焦点となりつつあった改憲問題について「国会で与野党が合意すれば任中の改憲に反対する考えはない」と、暗に新民党がもし院内闘争に路線転換すれば政府・与党は改憲問題での〃妥協〃を示唆したことで、新民党は大幅な軌道修正を行なった。この決断は、新民党を中心とする在野勢力の組織「民主化のため国民連合機構」(民国連)が「学生たちの民主化のための闘争は支持するが、反米、反核などの左傾理論、過激な闘争は支持できない」とする、過激派学生との〃決別声明〃となって現われた。しかし、新民党内部には、実質的な最高指導者である金泳三・同党顧問派と金大中・民主化推進協議会議長派との間には学生グループへの対応についての意見対立があり、従来から指摘されていた党分裂の危機要因のひとつとなっている。金大中派と民推協は表面上は学生グループを公然と反論したり批判することにためらいがあり、さらに新民党内の金泳三派が改憲論議で最終的に与党・民正党の内閣責任制に与みするのではないかという疑心暗鬼から、主流派の金泳三派が強く唱える過激派との決別に全面的に踏み切れないでいる。

第三点としてあげられるのが、学生運動内部の分裂である。昨年三月、全国的な組織として「全国学生総連合会」(全学連)が発足、その傘下に「民族統一・民衆解放・民主争取闘争委員会」(三民闘)が結成されたが、同年五月の米文化センター占拠事件で一躍その存在がクローズアップされた。しかし、その後内部で闘争方針をめぐり路線対立が顕著となり、三民闘は事実上解散した。

その路線対立を一言でいえば、国内の民主化を優先する一派と米国や日本など外国勢力

中国共産党胡耀邦総書記の後任は政治体制改革推進の喬石書記が最有力

の排除を優先するグループへの分裂であった。その結果、今年の三月下旬外勢排除を優先させるソウル大を中心とする勢力が「反米自主化・反ファッショ民主化闘争委員会」(自民闘)として、国内の民主化を優先する延世大を中心とする派が「反帝反ファッショ・民族民主闘争委員会」(民民闘)として発足した。もちろん単純なアナロジーはできないが、こうした過激派学生組織の分極化は、六〇年代後半の日本の新左翼各セクトが路線闘争を繰り返し多極化していったことを想起させる。

そしてその間には、大量の逮捕者を出した「五・三仁川事件」、五月十八日の光州事件六周年を迎え全国各地での衝突、四月初旬成均館大学で端を発しその以後各大学で続出した前線部隊入所訓練拒否闘争、五月二十日のソウル大の学生の焼身自殺、五月二十一日の釜山米文化センター占拠事件、六月一日の韓米銀行ソウル支店放火事件など過激グループが引き起こした事件が相次いだ。

韓国の過激派闘争は何処へ

ここまで長々と最近の韓国の学生運動の動きを見てきたのはほかでもない。路線闘争によって、自民闘と民民闘に二分して結成された学生運動組織の前者の最近の傾向について指摘したいがためだった。現体制全面否定を主張するなどよりラジカルな自民闘の掲げる「先に反米、反帝、後にファッショ政権打倒」のスローガンに注目すべきだ。五月初め治安当局は自民闘系各組織の捜査に着手、機関紙『解放宣言』の押収、同紙編集者の逮捕などを通じ捜査結果を発表した。自民闘系学生グループは北朝鮮の対南放送を聴取、録音し、その内容を機関紙に転載していたとし、あたかも自民闘が北朝鮮の影響下にあるかのように公表した。

この事実を知っていれば、今回の金浦空港爆弾テロ事件の発生直後、日本的にいう初動捜査も終わらぬうちに治安本部長が「北の仕業だ」と発表したことも理解できよう。すなわち、日本の警察関係者も韓国側から通報されていたと認めていることだが、じつは韓国の治安当局も内部では「犯行はほぼ間違いなく国内の過激分子によるもの」と説明しており、事実、事件発生三日目の九月十八日付の朝刊紙『韓国日報』は、捜査本部が同事件に関連して過激派組織自民闘の中核メンバーであるソウル大生を指名手配した、と報じている。

つまり、こうである。日本の数多い新左翼各セクトの中でも最も過激に走ったグループが角材から鉄パイプへ、火炎ビンから爆弾へとエスカレートさせていった歴史を想起すれば、この爆弾テロ事件の背景が見えてこよう。韓国でも自民闘のような最左派の主張からすれば今回の金浦空港の爆弾テロのような事態は十分に予想できたことなのである。

いずれにしてもアジア大会は終わった。これからの韓国は〝政治の季節〟を迎える。野党の改憲運動とも一線を画したラジカルな学生運動は、ますますその標的を米国と日本に絞った外国勢力排除にその力点を置くことだけは間違いない。中曽根首相の訪韓で、アジア大会だけでなく八八年ソウル五輪への日本のテコ入れが露骨なものになるといったイメージを韓国の国民の相当数に植えつけたのも事実だ。ソウルの米文化センター占拠、米系銀行のソウル支店の放火などからも容易に想像つくが、今後、自民闘など最過激派のターゲットが日本関係機関そのものに向けられるのは明らかだ。何はともあれ、無差別テロによらぬことだけは願っておきたい。〈了〉

●連載 東京拘置所日誌——三浦和義

東京都葛飾区小菅一—三五—一A

第4回◉久々の良枝との面会で「離婚することなく頑張って行こう」と話したが……



●八月二三日

良枝が出国してから、もう10日になる。今頃どこで、何を考えているのかな……と思わぬ日なし……。

従業員Mさんから連絡あり、二五日お店再開するとのこと。先週来、知人から、従業員が給与をもらえず困っている、お店のお客さんの中にはボトルを入れたばかりの人も何人かおり、無責任だ、と怒っている……と知らされ、良枝がいつ帰るかもわからずこのまま皆さんに迷惑をかけっ放しにしておくわけには行かず、従業員のMさんに連絡をとり、何とか従業員だけでお店を再開するようにと依頼したことに対する返事で、本当に一安心。

●八月二五日

週刊現代I氏面会。Mさんの自宅に良枝から国際電話が入ったとのこと。とても元気らしい……と聞かされ、何よりも安心。三、四年前に私と二人でヨーロッパを回った時が初めての海外旅行といっていたし、一人旅が初めてと思うと実に心配だった。何回か英語を習ったとはいえ、ほとんど英会話も出来ぬ一人旅で……と思うと、無事だろうか、困ってはいないだろうか……と気になってならなかった。フジテレビの人に助けられたとも聞き、須田哲夫氏あて御礼状も出す。

裁判所より、弁護人選任に関する問合わせ書類が送付、再度五十嵐先生にお願いする所存と回答。九月四日予定の公判を職権により取消す件についての求意見も。これには、止むを得ないことと思料……と回答。

●八月二六日

ロンドンの良枝から手紙が。元気でいることがやっとわかって、本当にホッとした。I氏面会。全スタッフで昨日から店を再開し、満員だったとのこと、一安心。腰、激痛で歩くこともできず、終日横臥する。

●八月二七日

梅田事件に無罪判決と。いかに共犯者といわれる立場の人間の証言がいい加減なものであるか、死につこうとする時でさえも偽証することがあると明らかにされた事は大きな意味があると思う。しかし、それを伝える新聞報道を見ていると白ける思いがするのは、決して私一人ではないだろう。〃二度とこの過ちを繰り返すな！〃〃三十有余年、執念の正義、梅田さんよくやった〃等と伝えているこの新聞でさえも、その事件発生当時には、恐らく〃残虐な行為に反省の色もなく……〃とか、〃不敵な否認に反省もせず……〃とか報道し、その冤罪のお先棒をかついだのだろうと思うと、何か暗澹たる思い。

当時、梅田さんを犯人に作り上げた捜査官や検事、誤判してきた判事たちを罰すべきではないだろうか……？

●八月二九日

フリーライターの熊谷由貴男氏面会。この一年間〃貴君の無実を信じている……〃と手紙で励まし続けてくれた方。初めてお会いし、励まして下さることに深謝す。

良枝から持ち出された離婚の話をこの二〇日間余考えてきて、思いもかけなかったこと、人間としても信じ切ってきた良枝の行動だけに愕然とし、根底から自分自身が揺らいでしまったようで自信喪失の感深し……。逮捕されて以来、体中に張りつめてきた緊張感が一挙に崩壊してしまったよう……。何もかもが虚しく感じられてしまう。

マスコミが大騒ぎすることで家族や両親にも迷惑がかかってしまっていることを考えると、何もかもが、こうして自分が否認していることで……とも思い、出鱈目の矢沢証言でもいいから、認めてしまうことで早く裁判が終れば、その方がいいのでは……と思ってしまう。終日その考えと共に……。

●八月三〇日

腰痛ひどく、全く動けず。右ヒザ下より、つまさきの手前までしびれたままで全く感覚なし。

支援する会の結成の為に奔走してくれている、竹内輝夫氏面会。いろいろ叱咤激励される。〃君が真犯人なら堂々と認めろ！　犯人でもないなら弱音を吐くな！〃と……。また、〃僕は君の為に無実を信じ、動き回っているんじゃない、一美さん、H（娘の名）ちゃんの為に、そして君の真実を知っているからだ！〃と……。大声で怒鳴られ、言葉もない。

●九月一日

二日前に良枝が帰国しているとのこと、初めて聞く。お店を一日に閉める……といっているとのこと。どうして仕事に関わる話を勝手に何の相談もなくやろうとしているのかと思う。

『オミセシメルトノコト、ジジツカドウカシキュウヘンジオ」カズ』と打電。深夜まで返事を待つがこず……。

●九月二日

朝一番に再度良枝に打電。

『オミセニカンシボクカラノトイアワセニダイシキュウヘンジオ、ムセキニンナヤリカタハシナイデホシイ、ナゼナンカイモトイアワセテイルノニヘンジクレナイノカ」カズ』と。終日待つが、返事なし。

友人面会の予定が、突如I氏が面会に、一日一回ゆえ止むなくI氏断わり、一日友人を

ったが、その友人が来ず……??

●九月三日

一日中電報のやりとりが激しい。

昨日の友人の面会予定は、I氏が急ぎの用があるので……と代って来たとのこと、中にいる私にはわからぬゆえ断わるしかなかったが……。こちらで来ると予定がある日に、親しい人が突然こられてしまうと本当に苦慮する。結局、断わらざるを得ないし……。

電報も、通常は朝八時頃が〆切りで、土曜の午後、日曜日・祭日は一切打てない。このところ面会の予定についての問合わせに対する返事等で毎日千円〜二千円の電報代、多い時は六千円余になった日もあった！ たまったものではない……。

又、急な問合わせが多く、毎日速達便で返事を出したりで、所内で買える切手は週に一回二千五百円までと制限があり、直ぐに切手不足になってしまう。先月の本誌原稿も速達で送る切手がなく、普通便で出した程……。

お店の事を問合わせるべく、この三、四日毎日良枝に速達で手紙を出すが、全く返事なし。一体何を考えているのだろう……と思う。

●九月五日

本誌編集長面会。

良枝から全く連絡がなく、スポーツ紙の記者より、"……一日以後は一切知らない"と良枝がいっているという話もあり、初めはそんな馬鹿な！と一笑に付していたが、これだけ問合わせの電報・速達を出しても全く返事がなく、このままでは大家さんに迷惑がかかってしまう……と思い、一日も早く明渡すという事なら全ての備品を無料で欲しがる人にあげてしまおう……と話す。今の自分には自由もなくこういう方法しかできない……と。編集長から、良枝に真意を聞いてみようか……という事に。一夜返事を待ったが返事こず、諦らめざるを得ずと、スポーツ紙で欲しい人を募集してくれないかと、知人に速達で発信。

●九月六日

スポーツ紙記者O氏面会。

このところ、矢沢証言でも何でも全て、そうです、そうですと認めてしまえば裁判も直ぐにも終り、家族へこれ以上迷惑をかけることもないだろう……とばかり考えて、毎日息たえるような苦しさで過ごしてきた。何もする気もなかった。

今日、父から娘の写真が送られてきた。その様々な姿の娘を見ていたら、体中が震えるような思いに囚われ、一美の声が頭の中に響きわたるように聞こえた、ようだった。

和サン、それでいいの、それでいいの？と……。

千葉のマンションで、娘と最後に交した言葉、外出する私を見送るように、パパ、早く帰ってきてね〜という声が一美の声と交互に私の体内にこだまするようだった。……そうだ、娘のことを思えば、出鱈目な矢沢証言を認めてなどしまったら、取返しのつかない嘘になってしまう……。

夢から覚めたような思い、だった。

こうして独房で、全く人と話すこともなく生活していると、とんでもない方向に向って自分を見失いそうになってしまうことがある。改めて、へこたれず、頑張ろう！と決意を新たにし、良枝に抱かれた娘の写真、両親の写真を並べ、弱音を吐かぬと誓う。

●九月八日

『フンキシヘコタレズガンバリマス」スミマ

セン』『ミウラ』との電報をK氏、Y氏、竹内氏、佐藤友之氏、父に打電。又、速達で本誌編集長、I氏、A弁護士に〝お詫び〟の手紙を出す。

●九月九日

週刊ポストのM記者面会。既に送ってあるので、質問状に回答して欲しいとの件。了解し、その夕方には送られてきた質問に回答を書き始める。

●九月一〇日

週刊サンケイI記者面会。

突如、履歴書同封の手紙や、求人に応募したい……という手紙がドットきてビックリ。四、五カ月前に、良枝が忙しい、忙しいといっていた時に、それじゃこういう差入れや雑事をやってくれる人を一人置こうか……という話があり、当時そういう話をスポーツ紙記者との手紙のやりとりで書いたことを、今頃になってタイムリーとばかりに記事を出したらしい、と気が付いた。一人一人に鄭重に断わりの手紙を出し始める。スポーツ紙を信用して踊らされないように……と。

今日で〝フルハムロード・ヨシエ〟閉店とのこと、よくこの一年間頑張ってきてくれたと思う。良枝、御苦労様！ ただ、この時点で閉店することで一千万円以上の赤字になってしまうことが惜しい。

●九月一一日

逮捕されて一年。余りの出鱈目さにいう言葉もない。

●九月一三日

父より、良枝とのゴタゴタが治まるまで、当分の間、娘は預かっておく……という手紙が来る。良枝も帰国して以来一度も娘とは会おうともせず、電話もしてくれていないとのこと。寝言で、ママ、ママーと夜泣きするように叫ぶことがあるという。どうしてそんな風に娘を棄てさるような事ができるのだろうか……と情ない思いで涙止まらず……。娘は私が良枝に託してきたのに、その私自身と何ら話合おうともせず、娘をほうりっ放しにしている事が信じられない、本当に信じられない思い。娘が母と慕う心、その信じる心を何とも思わないのだろうか……と。

一五日、敬老の日は娘の六回目の誕生日、祭日は電報が打てないので、二日早く祝電を打つ。

●九月一五日

朝起きた時、声に出して、H、誕生日おめでとう！ と。かねてから良枝に、手紙で何回も誕生日には顔を出してやってくれ……と頼んでおいたが、一切知らん顔をされてしまったとのこと……。

●九月一六日

良枝面会。

知人からは、〝私は会って話したくないから、小沢遼子か五十嵐先生を行かせて話をつけさせる〟と良枝がいっていると聞かされていただけに、来てくれたことにホッとした。

自分の過ちを詫びると共に、二度と過ちを繰り返すことのないよう正して行く、そういう努力を積み重ねてこそ、夫婦なのだから、離婚することもなく頑張って行こう、と話す。短い面会時間、それも第三者が立会っている中で、夫婦として意志を通じ合って行くことの難しさ、行き違いや思い違いで心が離れ待

ることはあっても、それに気が付いた時点で正して行こうという気構えがあるのに、何で離婚などしなければならないか、そんなことで離婚しようと考える以前に、過ちを認め心を正して行くと努力を誓っていることを何故考えようとしてくれず、ただ離婚する、離婚するとマスコミにいってばかりいるのか……。

自分にはそういう気持から、離婚する意志は全くないこと、夫婦とは何かをよく考えて欲しいと伝える。

親しい知人からも「今の良枝さんはマスコミにあおられているばかりで引込みがつかなくなってしまっている。良識ある人たちは、〝こういう過酷な生活の中で意志がスレ違ったり、ヒステリー気味になり思わぬことをいってしまうのもわからぬことでもなく、こんな事ぐらいでいちいち離婚などしていたら大変なことだよ〟といっている。一年でも二年でもかけて誠意をこめて説きなさい。わからない良枝さんじゃないだろうから……」と、助言され、私自身も、こういう苦しい時にこそ助け合うのが夫婦であり、努力を重ねて行かねばならないと思っている。きっと良枝はわかってくれる……と思っている。

●九月一七日

雨ばかりの毎日、半袖半ズボンでは肌寒い。暑さにうだっていたのが何日か前だったとは信じられない……。

週刊ポストM記者面会。

●九月一九日

週刊ポストに追加質問の回答を発送。月刊誌のS編集長面会。三浦報道ウオッチャーの私に、具体的事実による三浦報道批判の連載開始についての打合わせ。

●九月二〇日

竹内輝夫氏面会。文春を中心に〝創られた銃撃事件〟ではなく、正確な事実だけをとらえ、事実が語り出す推論のみによって、実際に何が起きたのか……を再構築することで〝ロス疑惑〟とは何なのかを検証しようと努力して下さっている。私も問われること、事件に関わることも全てお話しする。

良枝、どうしているかナ……と思う。面会に来てくれても、帰国してから一〇通余り手紙を出しても、一通も返事くれず、今までは一日置きに手紙をくれ毎日の事を知らせてもくれたのに、手の平を返すようなことに堪えられない寂しさを感じる。

●九月二三日

このところ毎日三時間余、六、七〇センチにも積み上げられている調書を読む。矢沢証人が〝検事の作文〟といっていたのが実によくわかる。同じ検事が作った何人もの調書は、用語や言葉づかいが全く同じ。供述人が代わっているのに言葉、用語が同じなどという事があるだろうか？　調書を作る側のレールに沿ったものを作ろうとするから、必然的にこうなってしまうのだろう。とりも直さず、そのいくつかの検事調書自身が作文であることを語っている。

そこに、〝犯罪を創り上げよう〟とする意志を読みとるのは決して私一人ではないと思う。このような証人たちの供述を一方的に無理矢理に持って行こうとするやり方が多くの冤罪を作ってきたのではないか、そういうことを今も続け、新しい冤罪をこれからも作ろうとしようとするのだろうか？

＜つづく＞

今月の有名人〃株式市況〃

●〃株式〃評論家
亀和田　武

◇**概況**

「文藝春秋」での藤尾文部大臣の朝鮮併合、中国侵略を肯定した問題発言が、文相の罷免で結着をみたのもつかのま、今度は総理大臣自らが、アメリカは黒人とヒスパニック系のせいで知識水準が低いという大ポカ発言をやってのけ、先月に引きつづき今月も外交関連は波乱の商状を呈した。

ひとまず総理のアメリカ側への陳謝で鎮静化したとはいえ、今回の発言はかつての「北海道は生活レベルの低いところ」発言と同様の差別的体質によるもので、このままでいけばまだまだ〃問題発言〃〃放言〃は続出するに違いなく、一般投資家には楽しみな展開気配といえよう。

労働関連では、引きつづき官↘公労の大型株の急落傾向が目立っている。

なかでも、行革、民営化のあおりをまともに食らっている国労はついに組織率も過半数を割り、当局の度重なる不当労働行為に対↘

スポーツマンって奴は信用できなくて46円安
供の間に流れ，これも人気の証拠の２円高
ややでは，あまりにも気の毒で，デキズ。
メだ」と打ってるなんて噂もありますが…。
者がボケてるからツケコマレルわけで53円安
ッに耐えての銅メダルは立派だぜ，３円高
テの遠藤といえば有名だったんですが…。
騒動といい，ホントよく喋る女だぜの18円安
ト女性読者の皆様は気をつけて下さい。
を熱狂させた黒人ロック・シンガーは２円高
て私，大ファンなんですよねえの６円高
コさんのスケールの大きさに敬意を表し１円高
●■やややややややは情けなくって21円安
？？？？？？？で，女優生命が危機の15円安

になるが，ま，オメデタイ話なので１円高
ャ性格も汚くって，相撲協会のガンは41円安
た『塀の中の懲りない面々』が好評で３円高
に上げ他人の肌の黒さを差別するとは38円安
だりして，さすが大物感が漂っていて３円高
発表なのだから，御祝儀をはずんでの７円高
ように躍り，高卒パワー期待の星に３円高
るいノリも鼻についてきたしで４円安かな。
トも面白いんだから，５円高じゃ安いかな？
トとは大時代な。関係ねーやで変わらず。
当にプロ野球は江川で持っているのだ９円高

今月の指定銘柄

富士銀行山形支店▼
支店長がスーパーで婦人服を万引き。といっても，誰が迷惑したわけじゃなし，単身赴任先で盗んだ９号サイズの服を贈って歩く中年男に同情して３円安

平和相互銀行ー
10月１日で住友銀行に吸収合併だが，女子行員はコレで結婚のときぐっと有利になったと喜んでるという話だし，ま，国鉄と比べりゃ天国と地獄ですよ。

国鉄・人材活用センター▼
ここぞとばかりの国労イジメは陰湿でエゲツナクて139円安だが，このドタン場に来てストのひとつも打てない国労もホーント情けねえよなあ。

第10回アジア大会▼
メダルは中国，日本，韓国の東亜三国が独占だし，北朝鮮の爆弾テロも開会前の一回きりだし，学生デモは抑えられるし，あーあ面白くねえなあの６円安

戦艦ニュージャージー▼
核トマホークの疑惑を残し，修理総額はたったの300万円，中にはボルト４個で３千円の社も，と金は残さぬ佐世保出港でアメリカもシケてるぜ，の25円安

しても満足などころではなく不満足な闘争ひとつ組めずにいたずらに値を下げたが、さらに大引け直前にかけて執行部の労使共同宣言受諾の転向方針も打ち出され、内部の分裂はより一層激しい動きを示すに違いない。

官公労の一翼を国労と担っていた日教組も、社会党系の主流右派、協会派系の主流左派、そして共産党系の反主流派の三派の抗争で軟調。

プロ野球関連では、セが巨人と広島、パが西武と近鉄の間で、一進一退の首位攻防戦が展開されているが、果たして「日刊ゲンダイ」がずっと主張してきたように、セ・リーグの総意による八百長によって巨人が優勝するのかどうか、興味が尽きない。


朝日新聞
首相、11月にも訪中
訪韓に続き釈明
中国が招請、日程検討
藤尾発言・靖国・教科書
対ソ外交の足場固めも
田中派

釜本　邦茂▼	悪い奴っちゃなあ。柏木由起子を朝ワイドの司会から降板させたというから，本当に
高橋　利幸△	通称，ファミコンの高橋名人，岡田有希子の幽霊騒動の次は名人逮捕の噂が全国の子
水戸　泉一	痛ッ痛ッ痛ッ痛ッ痛ッ痛ッ痛ッ痛ッ痛ッ痛ッ痛ッでもって，やややややややややや
田中　角栄一	機能回復のために，自由になる左手でワープロに何度も「竹下はダメだ」「竹下はダ
細木　数子▼	ボケ老人の右翼の論客(イデオローグ)の妻に入籍で問題になった女だろ。『六星占術』ってのも，読
瀬古　利彦△	陸連のミスでブッツケ本番のソウル大会1万mで，痛ッ痛ッ痛ッ痛ッ痛ッ痛ッ痛
遠藤　幸吉一	痛ッ痛ッ痛ッ痛ッ痛ッ…ん，御存知ない？　昔，力道山の頃のプロレスで，イテ
キャシー▼	ワッ，出，出たあ!!　と，なぜか笑っちゃうが，佐良直美レズ騒動といい今度の麻薬
名高　達郎▼	ズルイ奴っちゃなあ。ヤルだけヤッタラ，ハイ婚約不履行は11円安が妥当だが，ホン
プリンス△	といっても無論チャールズ皇太子でもプリンス・ヒロでもなくって，満員の横浜球場
桜井　洋子△	といっても御存知ないでしょうが，NHKの朝のニュースの池田裕子サンの後釜でし
永江　洋子△	といっても永田洋子とは別人で，イタリア人の夫の100億円の遺産でモメているヨー
双葉　黒▼	場所前の食当たりや虫垂炎は本人の責任ではないが，初日の傲慢な態度と○○●○●
藤谷美和子▼	オトコ問題で自殺未遂とも心身症とも噂される謎の行動に？？？？？？？？？？？
古手川　健一	といっても，ナンノコッチャで，デキズ。
井上ひさし△	再婚話が急浮上。あまりにもテンポが急なのと，共産党の元代議士の娘というのが気
春日野▼	輪島，琴天山の国技館出場にクレーム。昔っから尻の汚い栃錦で有名だったが，今じ
安部　譲二△	良家の御曹子から安藤組ヤクザの異色経歴の物書きは，府中刑務所の囚人群像を描い
中曽根康弘▼	うーむ，ゴーマンな野郎だぜ。黒人とプエルトリカンは馬鹿と，自分の腹の黒さは棚
高倉　健△	うーむ，ミステリアスな野郎だぜ。エイズでパリの病院に入院かという怪情報も飛ん
中野　浩一△	うーむ，下品な顔をした野郎だぜ。とはいうものの，世界自転車V10につづいて婚約
清原　和博△	高卒ルーキーのホームラン新記録ということで，新聞の見出しに高卒の文字が毎日の
星野　仙一▼	不倫したい男№1？　うーむ，けっこう策士という噂だし，最近あの体育会的な明か
落合　博満△	うーむ，スゴイ野郎だぜ。トボケタ顔で，結局今年も三冠王の気配濃厚。で，コメン
吉永小百合0	岡田裕介との密会発覚でサユリスト落胆かとマスコミは騒いだが，いまどきサユリス
江川　卓△	肝心カナメの優勝を争う時機になってポカをやるというのが，いかにもらしくて，本

ファミコンで急成長・任天堂神話とマスコミ工作を剝ぐ！

●レポーター 真藤 靖



任天堂のファミリーコンピュータ、通称「ファミコン」がここ三年の間にもたらしたブームはとにかくすさまじいものがあった。家庭用テレビゲーム機のシェアの九〇%を占め、その普及台数は年内に九五〇万台を突破するといわれているから、実に四世帯に一台の普及率なのだ。

ゲーム機本体だけではない、ソフトウェアであるゲームカセットは三〇〇〇万本、中には「スーパーマリオ」のように二〇〇万本を売るソフトも登場し、さらにはゲームの名手というだけで〝高橋名人〟なるアイドルまで

うみだした。
また、ファミコンがうみだす膨大な利益は様々な分野に波及していった。ファミコン用のゲームソフトを製作するソフトハウスはもちろん、こうしたゲームの攻略本、雑誌などが次々に発売され、映画、レコード、製菓と、ファミコンの商標を利用して売れないものはないとまでいわれたほどなのだ。

しかし、当然のことながら、もっとも注目を集めたのはこのファミコンの発売元である任天堂の急伸長ぶりである。五八年にファミコンを発売して以来、倍々ゲームで株価をハネ上げ、その商標を利用して膨大な利益を得てきた。そしてこの京都のオモチャメーカーの周辺はつねに成功者の栄光に包まれてきたのだ。たしかに経済誌や単行本の多くは、今でも任天堂の技術陣や経営陣を、読む方が面映ゆくなるほどにほめあげている。

しかし、はたして本当にそうなのだろうか。

「任天堂の成功は、〝犯罪〟スレスレの悪どい商法と強引なまでの既得権保護の工作によって支えられてきただけだ」

そんな声が、ファミコンによって潤っているはずの流通ルート、ファミコン用ゲームを製作しているソフトハウスからたえないのである。そして、市場を制圧した現在も、暴利をむさぼりつづけるそのヤリ口に批判の声が高まってきていることもまた、事実なのだ。

独禁法スレスレ!? の流通事情

「一発あたれば、何年かは食っていける。オモチャ業界なんてヤマ師の集団ですからね」

と語るのはこの業界の元関係者。

フラフープ、ダッコちゃん、ルービックキューブ、ゲームウォッチと、オモチャはヒットすると全国的な大ブームを呼ぶ。そしてある日、突然ブームは終わり、忘れ去られていく。〝大ブームによる市場形成〟というこの業界の特性は〝ヒット商品は売れる時に売りつくす〟というメーカーの体質をうんだ。そして同時に、流通に対してのメーカーの立場を非常に強いものにしている。なにせ、ひとたびブームになれば完全な売り手市場だ。需要に供給が追いつかず、必ずといっていいほど、品切れ販売店が続出する有様なのである。

メーカー側がこの状況を逆手にとって、その商品をエサにブームの谷間で消え去った失敗商品を押しつける、というヤリ口もまかり通ってきた。いわゆる〝抱き合わせ販売〟だ。

ファミコンに関しても噂は早くからあった。販売店・問屋に対する過去の失敗商品との抱き合わせという噂はもとより、ファミコン本体とゲームカセットの抱きあわせ販売が直接、消費者に対しておこなわれているのだ。

なにしろ、五八年二月には当時のヒット商品であるゲームウォッチをめぐり、公正取引委員会の立ち入り調査をうけた経験を持っている任天堂だ。事実、昨年三月の東京新聞に、同社がファミコンの出庫調整と抱き合わせ販売をしていた疑いがあると二面ブチ抜キで報道されている。もちろん任天堂側は否定、「小売店で行われている抱き合わせ販売は当社の指示したものではない」という旨のコメントを出した。そしてなぜかこの時は公取委も動く気配をみせず、一件落着したかにみえた。

しかし、一年半をすぎた現在でも、抱きあわせ販売は、堂々と行われているのだ。中には、「当店ではファミコン本体だけでもお売りします」と看板を出す販売店もあり、抱きあわせ販売をしていない事がキャッチフレーズになってしまうのだから、状況は推してし

カネボウ批判本買い占めはブラックのT、I、Mらのマッチポンプ説が

るべしだろう。
というのも、売れまくるファミコン本体に対してファミコン用ゲームソフトはあたりはずれが激しい。問屋筋には売れなかったゲームカセットの不良在庫が山づみになっている。これらの不良在庫を処理するために、一部の問屋はファミコン本体をつけて、いわゆるバッタ屋ルートへ流すというわけだ。今年春の段階ではバッタ屋ルートからファミコン一台を買うごとに五〜一〇本の売れないゲームカセットを買わなければいけなかった。

正規のルートでも事情は同じだ。大手であればあるほど、任天堂に近ければ近いほどバッタ屋ルートへ流すという方法は使えない。任天堂の流通締めつけは厳しく、バレてしまえば即出荷停止だ。結局、正規ルートでも、ファミコン本体に二〜四本のゲームカセットを抱きあわせざるをえなくなったのだ。

こうした状況が、よしんば任天堂のあずかりしらぬことだったとしても、問屋、販売店を追いつめている首謀者が任天堂であることは間違いない。

毎月、何十種類ものゲームソフトが発売される現在、否応なくかなりの数のゲームソフトを任天堂から押しつけられているのは事実だからだ。

さらには任天堂への商品発注の問題もある。たとえば一月に四〇個発注して、二月末の段階で二〇個しか納品されていなかったとする。つまり二〇個の発注残があるわけで、これは以後の追加発注等より、優先的に納品されるのが普通である。ところが、任天堂では発注からある時間を経過すると、発注残は白紙にもどされてしまう。あらたに二〇個、追加発注しなければいけないのだ。いきおい、各販売店はスムーズに数を確保するため、あらかじめ多めに発注することになる。いわゆる見込み発注だ。

これはファミコン本体に限っていえば需要の一助になった感もある。しかし、ヒットサイクルの短いゲームカセットの場合は売れずに、不良在庫と化していくのは自明のことだった。任天堂の商法によって、見込み発注で失敗した不良在庫は小売店問屋を圧迫し、結果的に独禁法違反である抱きあわせ販売を余儀なくさせてきた、という一面は否定できないものとなっている。

ゲームソフト制作会社への高姿勢

こうした商法と並行して、任天堂がおこなってきたのが「ファミコン」という商標がうみだす既得権益の保護だった。

まず、任天堂が自社供給の他、三十数社に発売を許可しているゲームソフトである。

任天堂がファミコンを開発したころ、アメリカで一大ブームを呼んだTVゲームコンピュータ「アタリ」が消えてしまった。このアタリのブーム消滅の原因を「駄作ゲームの乱発」と分析した任天堂は、ファミコン発売当初は、ゲーム発売をしぼっていた。

普通、パーソナルコンピュータ、いわゆるパソコンでは、ハードメーカーの役割はハードの製作と供給のみをおこない、その上で作動するプログラム、いわゆるソフトウェアに関しては援助もせず、制約もせずという態度を貫いてきた。

ところが、任天堂は前述のアタリ敗北の分析を理由に、商標権を武器にしてソフトのしぼり込みを行った。駄作ソフトを防ぐために、ファミコン用のゲームカセットは、任天堂が認定した「実力と実績のあるソフトハウス」にしか製作を許さず、同時に、できあがった製品は任天堂で審査するというものだ。

これを可能にした根拠と称するものには、

ファミコンの持つ最大の問題が内在しているが、それは後で述べるとして、この方法は、任天堂に最大のメリットをもたらした。
一つは、「ファミコン用」のソフトを開発するために一メーカーあたり二〇〇〇万円をこえる認可料を徴収（技術指導料と称した）できた点だ。次に、ごく一部の自社内に生産ラインを持つソフトメーカーを除いて、ほとんどのソフトハウスの商品の生産権を任天堂が握ってしまったのだ。
現在、四八〇〇～五八〇〇円で売られているゲームカセットの中身はROMと呼ばれるICと、それを搭載する基板、そしてプラスチックケースである。バラ買いで買っても六～八〇〇円もあれば秋葉原で買う事ができる。まして何万、何十万台のオーダーでは製造原価は五〇〇円を切る事は間違いない。
ところが、任天堂では開発したソフトハウスから一本二〇〇〇～二五〇〇円（ソフトハウスとの力関係で決まる）でゲームカセットの生産を請けおう。しかも、最盛期には最低五万本とも一〇万本とも言われる最低制限をもうけ、おまけに、この生産費は先払いだというのだ。
ソフトハウスでは、初期の認可料以外に、最低でも一億円の製作費と、ゲーム自体の開発費を準備しなければならない。
それでも、ソフトハウス各社があらそって参入したのは、ヒットした場合のメリットが大きいからだ。
ゲームカセットの価格のうち一本一〇〇〇～一五〇〇円程度がソフトハウスに入る。とすれば、スーパーマリオのように二〇〇万本をこえるヒット商品では二～三〇億円の純益。その上に、キャラクター商品として使用料が入ってくればいう事はない。
北海道に本社を持つ有力ソフトハウス、ハドソンが東京にビルを建てたのはファミコンのおかげだ。
本来ならファミコンの対抗商品である家庭用パソコンのMSXの推奨者であるアスキーがファミコン用のゲームを出したら、それ一本で、何十本もあるパソコン用のソフトの売り上げをこえてしまったほどなのだ。
これらの成功例を見ると、危険を承知でも参入したくなるのも無理はない。そのために任天堂の出してくる傲慢ともいえる条件を飲まざるを得ない。この構造、任天堂の強引なヤリ口は〝ディスク・システム〟の導入でさらにエスカレートすることになる。

ディスク制作の法外な契約書

今から約半年前、任天堂は一息ついたファミコンブームの喚起剤として、従来のカートリッジ方式の三倍もの情報量をもりこめ、多機能を備えた〝ディスクシステム〟のファミコンを発売した。ROMカセットのかわりに、ディスクをファミコンにとりつけるという方式のものだ。当然、ディスクは小売店に設置されたディスクライターで書き換えができ、一枚二五〇〇円ほどのゲームディスクは五～六〇〇円の書き換え料を払えば別のゲームとして楽しめるというわけだ。
そして、任天堂はこのディスクシステムのソフトを発売するソフトハウスに対して、さらに法外な条件を提示したのである。たまたま、ディスクシステム開発・販売にあたっての契約書を入手することができた。部外秘ゆえファミコン業界でもあまり知られていないが、信じられないような内容である。
まず何より、アッケにとられるのは《乙（ソ

東京中日スポーツであの森路英雄がペンネームを使って企業告発執筆中

フトハウス）は甲（任天堂）から提供される技術資料を利用し、これにもとづいて作成されるものであるから、その成果であるプログラムの著作権は共有とし、各自2分の1を持分とする≫という記述。カートリッジ方式では、開発・販売会社に独立した著作権を認めていたのが、ディスクシステムになってとうとう他社が開発したソフトの著作権まで、わがものにしようというのだ。

さらに≪ディスライターにセットするかどうかの選択権≫は任天堂にあり、その≪書換料は任天堂がその額を定める≫という記述。

金銭的な条件もますます厳しいものとなっている。例えば、このディスクシステムのディスケットはミツミ電機のクイック・ディスクと同じであり、一般に四～五〇〇円で市販されているものだ。つまり、おそらくは大量発注のため二〇〇円程度のディスケットとケースその他一枚一一〇〇円で任天堂から買わなければならず、しかも発注分納入完了後一〇日以内の現金決済。もう一つ、任天堂では市場動向把握と称し、いくつかの百貨店に対し直接納入しており、その分については、任天堂が小売価格の半額で納入する権利を持つというのだ。

たとえばＶＨＳのビデオ機用のソフトビデオを販売するのに、上記のような条件で松下やビクターと契約しなければいけないとしたらどうだろう。

ファミコンであれほどもうけたハドソンでさえ、ディスクシステム用のソフトは開発しないと明言している。

駄作ゲームの乱発を防ぐため、という名目でのこれらのシステムは、たしかに名目でしかない。さらなる暴利をむさぼろうとする任天堂のおごりにすぎないだろう。現に、ディスクシステム用のゲームの内、一番書き替えられている（書き替えると元のゲームは消えてしまう）のは当の任天堂の開発した「謎の村雨城」というゲームだという話もあるぐらいなのだ。

攻略本・雑誌に対する完全な支配

こうした高圧的な姿勢は、業界内部だけでなく、ファミコンでかなり恩恵をうけたといわれる出版界にも及んでいる。

ファミコン・ゲームのノウハウを公開した攻略本が爆発的に売れはじめたのは二年前。徳間書店、二見書房、アスキー出版等が火をつけ、中には三十万部もの売れゆきを見せた。現在もこうした攻略本は低価格でポケットブック化され、月刊ペースで発刊されている。

また、ファミコン情報誌も次々に創刊された。昨年六月創刊された徳間書店の『ファミコンマガジン』はいきなり完売のうれゆきを見せ、全盛時には実売七〇万部を突破したという。

その後は他社も、次々と参入。角川書店『(勝)ファミコン』、ＪＩＣＣの『ファミコン必勝本』、英知出版『ハイスコア』、そして最後発にアスキー出版から『ファミコン通信』という具合だ。

当然、任天堂やゲームを発売するソフトハウスからの情報なくしては成立しえないこれらの出版物は、情報の規制をうけることになる。しかし、やはりパブリシティ色の強いカー雑誌やビデオ雑誌とくらべると、その規制の厳しさが段違いなのである。

「他のソフトハウスはそうでもないんですが任天堂さんのチェックはすさまじいの一言につきますね」

と語るのは、あるファミコン雑誌の編集者。

「任天堂さんの新作の資料には、必ず規制書というものがついてまして、情報公開の明細

がびっしり書き込まれてるんです。例えば、この八月六日に発売された『メトロイド』というゲームを例にあげますと、八月二一日までに公開していい情報、九月二一日までに公開していい情報、という具合にね」

　さらには、ゲームに登場する隠れキャラクターや裏技のうちゲームを台無しにするような情報には、永久規制がつくという。ちなみにその「メトロイド」では、

「五、六画面目の天井にある隠れエネルギータンク、それから最後に登場するキャラクター・サムスの正体が女であること、などですね」

　もちろん、ゲラ刷りのチェックも厳重に行われる。単行本では文字校、色校の二度、隔週誌でも必ず色校には目を通すという。

　その度に各編集者は京都にある任天堂本社にわざわざ出むくのだという。

「総務の稲葉というのが担当なんですけど、重箱の隅をつつくようにチェックするので有名なんです」

　また、任天堂のチェックは自社製品に関する記事にとどまらない。雑誌全体の編集方針にも目を光らせ、競合企業の広告出稿まで検閲しているというから驚きだ。

　そして、もしミスがあろうものなら、即〝出入りさしとめ〟という報復措置が待っている。今までにも英知出版『ハイスコア』、角川書店『㊙ファミコン』などがトラブルをおこし、制裁をうけたといわれている。

　こうなると、もはや雑誌と呼べるようなシロモノではないという気がしてくるが、中でも古参である徳間書店の任天堂への媚びようはあまりに露骨。

　ファミコンのバグ（プログラム・ミスにつけ込んだ裏技のひとつ）を他誌が公開するやいなや、≪そんな技を用いると、ハードが壊れてしまう≫≪〇〇誌はウソ八百を書いている≫と任天堂広報部を代弁するような論陣をはる。なんでも同社の『ファミコンマガジン』に読者が質問したら、翌日京都の任天堂から答えが返ってきたという話もあるほどだ。

　まあ、任天堂第二広報部と陰口をたたかれている徳間ほどではないにせよ、各社の任天堂への気の使いようは大変なもの。各誌ともほとんど表④には任天堂のカラー広告が掲載されているが、必ずといっていいほど無料だという。

　また、攻略本にいたっては一冊につき3%～3・5%のロイヤリティを任天堂に払い続けなければならない。パブリシティまでもお金に変えてしまう、任天堂のやり口の強引さにはただただあきれるばかりだ。

ファミコンは
任天堂の登録商標ではなかった!!

　それにしても、ソフト製作における契約といい、出版界の圧力といい、いくら独占企業とはいえ任天堂のここまでの高姿勢の根拠はどこにあるというのだろう。

　パソコン雑誌を一読してほしい。広告や、記事の中に、「～は×××の登録商標です」という記述が随所にある事に気がつかれただろうか。

　例えばカー雑誌のブルーバードの記事の最後に「ブルーバードはニッサンの登録商標です」などと書かれたものがあるだろうか。

　コンピュータに関する技術の基本はアメリカから来たものが多い。そして、アメリカほど権利意識の強い国もない。雑誌記事などでも、あとで難クセをつけられるのを恐れるあまり、特定商品を扱った場合に、前述のよう

一部上場の摂津板紙㈱の増田芳久社長一族の女性乱脈告発の怪文書が！

なことわり書きを書いた、というのが始まりのようだ。

任天堂はここに注目した。任天堂の考え方はこうだ。

「ファミコン」はコンピュータでなくオモチャである。そしてゲームカセットやディスクは、このオモチャの別売部品であり、あくまでも、「ファミコン」の一部だ。このゲームカセットを含め、一つの商品である以上、基本的にすべての権利は任天堂に帰属する、という論理なのである。

ところが、最近になって面白い事が判明した。パソコン雑誌の中で、唯一どこにも迎合せず、孤高の存在を続けている「The BASIC」(技術評論社)10月号で、任天堂の問題を精力的に取りあげている多摩三郎氏の記事だ。

それによると、ファミリー・コンピュータ、あるいはファミコンという単語は、まだ登録商標としては確定していないというのだ。

特に、電機商品が入る24類では登録を拒否され、おもちゃを含む11類では公告の段階で他メーカーから異議が出て、審判中である、と多摩氏は述べる。

もう一度パソコン雑誌を見てみよう。なんと、ファミリーコンピュータの記事では「ファミリーコンピュータは任天堂の商標です」となっている。

となると、これまでいわれてきた、「勝手にファミコン用と銘うった商品は商法違反で提訴される」という話は嘘ということになる。

著作権の問題でもそうだ。もし、ファミコン用ゲームカセットが「プログラム」だとすると、新しい著作権法により、そのプログラムを作った人、ないし会社が、そのプログラムの中で、基本的なハードの部分を利用したとしても独立した著作権として認められることになる。

任天堂が、ファミコンはコンピュータではなくオモチャだ、と強弁し、ファミコンを電機ルートにのせるのをいやがり、文具・オモチャルートにこだわる理由は、すべてここにあるのだ。

ファミコンが電機製品であり、ゲームカセットがプログラムである事を認めたとたん、今までの強権はすべてついえ去ってしまう。カセットの製造を受け持つ事で得ていた、リスク負担のない暴利も消えてしまうのだ。

しかし、もうけに眼のくらんだソフトハウスは任天堂の非常識な路線にやすやすと乗ってきた。自分の首をしめているにもかかわらず、である。

IBMがうわさ通りにマイクロソフト社を買収し、MS―DOSのドライバールーチンを使うソフトに対して著作権を半分よこせ、と要求してきた時、任天堂に唯々諾々としたがってきたソフトハウスはどう反論するつもりなのだろうか。

ベンチャーであり、独自の動きができたソフト産業が、巨大資本であるコンピュータ・ハードメーカー、IBM、NEC、富士通などに首ねっこをつかまれてしまう、という危険性を任天堂の路線は内包している。

ソフトハウスにとっては、そんな危険性よりも、目先の利益の方が大事なのかも知れないが。

ファミコンはどこへいくのか?

さて、任天堂が栄華を極めていたファミコンブームもここへきて翳りが見えたといわれはじめている。ケチのつきはじめは前述した〝ディスクシステム〟。任天堂の〝ヨイショ本〟では「爆発的に売れて市場を混乱させるのを恐れたため、二度も発売時期を遅らせた」

と大見栄を切った商品だ。（真相はもちろん、単に開発が遅れただけのことらしい）これが完全にコケたのである。

当初、予約注文が二〇万台とのフレコミもあったが、その後約半年たった現在もわずか四〇万台にとどまっている有様。理由のひとつは、小売店が嫌ったことだといわれている。カートリッジ方式だとカセット一本で一〇〇〇円近かった粗利が、ディスクの書き換えだと一〇〇円程度にしかならないからだ。

さらに、前出した契約方式の移行で従来の主戦力だったソフトハウスの多くはソッポを向いた、ということもある。

自社制作するゲームソフトでは、ディスク方式のもののみをつくり、ROMカセットは今後一切発売しないと宣言した任天堂だが、最近になって、ROMカセット製作を再開する動きさえ出てきたというから、事態はかなり深刻だ。

こうした傾向は他分野へも波及しはじめた。一時は完売も珍しくなかったファミコン雑誌の返本率も悪化の一途をたどりはじめている。鳴り物入りで創刊されたアスキーの『ファミコン通信』などは返本率五〇%を超えたといわれるほどだ。

事実、日経をはじめ、各誌紙で落ち込みは報道され、『創』九月号のレポートでは《アタリの終末と同じ》風景だとまで書かれた。

確かにファミコンもオモチャである以上、ブームの終焉は必ず訪れるだろう。

しかし、同時にファミコンはコンピュータという最先端技術の末端部分でもある。シャープ、リコーはおろか、今やミサワホーム、福武書店といった異業種までがそのニューメディアとしての特性に注目し、参入してきているのだ。

そして何より、前述したような任天堂の悪どいまでの利潤追求の姿勢がある。よしんばファミコンがついえたとしても、ブームの去った後に累々と横たわった屍は、ソフトハウスをはじめとする関連業者のものでしかない。そして、当の任天堂がその屍をもむさぼりつつ肥っていくのは目に見えているのだ。

〈©ファミリーコンピュータ、ファミコンは任天堂の商標（笑）です〉

加藤紘一元防衛庁長官の銀座ママ愛人をF誌が追跡するも潰されたの噂

国民的女優・斉藤由貴も信者のモルモン教の不祥事件

●レポーター 東園浩一



●モルモン教とは!?

〃ダビンチ疑惑〃でマスコミに話題を投げかけた世界救世教が、東洋一の美術館として誇ってきた熱海にあるMOA美術館を突然休館してしまった。約三千五百点という国宝級の重要文化財を所蔵する〃美術の殿堂〃を見学に訪れる人々も多く、ややカゲリのあった熱海への観光客のまき返しにも一役買ったといわれたほどの人気だったのに……である。

こうした一般信者や見学者不在の閉鎖措置はモトを正せば、世界救世教の松本康嗣総長の解任劇に端を発した総長派対MOA美術・文化財団理事長派という対立・内紛が原因である。この世界救世教に限らず、高橋恵子や沢口靖子など芸能人信者の多い真如苑も先頃お家騒動が発覚し、本誌をはじめマスコミでも話題になったばかり。極論すれば、金絡みの利権やうまみがつきまとう宗教団体にはこうした内紛やお家騒動は不可避的現象といって

いい。しかもそれらは例外なく一般信者不在の形で展開されている。いつの時代、いかなる体制、組織でも、善意ひとすじの人々が喰いものにされるという構造が見られるようだ。

今回とりあげるモルモン教、正式には末日聖徒イエスキリスト教会の〝不詳事件〟もその例外ではない。このモルモン教、NHK朝のドラマ「はね駒」で一躍国民的女優としての人気を勝ち得た斉藤由貴ちゃんとその家族も信者だという。その他では変な外人タレントとしても売り出し中のケント・デリカットや、弁護士でもあるケント・ギルバートも、もともとはモルモン教の布教活動のために日本にやってきて、そのまま住みついた人々といわれている。

街を歩いている際、キチンとしたスーツを着た背の高い白人男性に「英語に興味ありませんか?」と日本語で問いかけられた体験の持ち主も少なからずいるだろう。それがモルモン教の布教活動のひとつのパターンでもある。一般的に伝えられているのは「コーヒー」「酒」「セックス」をつつしむという厳しい戒律があるらしいということだ。もっともセックスは快楽のためのセックスを禁じたまでで、子孫繁栄のためのセックスは別ということのようだ。「万有百科大事典」によると、モルモン教に関しては、こう説明されている。

≪1830年、ジョセフ＝スミスによってアメリカ・ニューヨーク州マンチェスターで設立された。スミスはモルモン教典を黙示によって発見したと称し、新約聖書の他にこれを教典とした。1843年、黙示によって一夫多妻を是認とされたが、95年廃止。今日では事実上行なわれていない。1844年、スミスは群集によって殺されたが、ブリガム・ヤングが後継者となり、47年、本部をユタ州ソルトレイクシティにうつす(略)≫

そして信者数に関しては1958年に百万人を超えたといわれ、現在は三百万人、日本の信者は公称八万人実数三万人ということから考えれば、わが国では少数派の宗教団体の部類である。

さらにモルモン教の組織を見ると本部のあるアメリカには「大管長会」―「12使徒委員会」―「70人第一定員会」があり、アジア担当(香港駐在)者はウイリアム・R・ブラッドフォードとなっている。今回の不詳事はもちろん、アジア担当の管轄下にある日本・韓国地域管理本部の最高責任者・北村正隆(地域監督)、岡本亮(総合施設部長)、大久保浩(不動産管理課長)といった面々が登場人物である。

●不祥事件の告発文

まず発端となったのはモルモン教の日本人信者がアメリカ本部の幹部にあてた〝直訴状〟。その一部を抜粋してみよう。

≪昨年タバナクル―合唱団日本公演においては、多くの出入り業者が泣かされました。それは入場券が思うように売れなかった為にMr岡本が総責任者となって各業者に大量の入場券を押し売りしました。それにもかかわらず合唱団が本国へ帰国したあとになっても出入業者は、この公演の穴埋めの為に一社当たり50万円から100万円の現金をさらに強要されたので弱い立場である出入業者としては、泣く泣く納金した業者もおります。またプロジェクトの支払に上のせして、その分を仕事上でバックされている業者もあります≫

≪某出入業者の工事ミスに対し、Mr北村はその業者に対し300万円を納金させました。工事

NHKラジオ回答者の聴取者食い物事件の後始末でNHKが被害者訪問

ミスは工事をやり直させるべきだと思います。この300万円のたどりつく先は一体どこなのでしょうか。この件は部長クラスの方々ならご存知のはずです。以前にもMr北村はこのような事を行ないました≫

以上は直訴状の第一弾の内容だが、さらに第二弾、第三弾と続く。次は第三弾のポイント部分を紹介してみる。

≪――東京管理本部に於ける、出入業者との癒着、業者いじめ、あるいは使い捨て、また役職者の地位を利用した職権乱用等々ほんの氷山の一角を確たる証拠のもとに申し上げましたが、これは単なる中傷としてではなく、（略）一部の人達の為に、ペテン師の集団であるかのごとく見られております。特に重責にあるMr北村は英会話が堪能なので、アメリカ本部へは、すべての不名誉な物事に対しては、うまく、つくろっておられる訳ですが、部下からは非常に反発をかっているのも現状です。アメリカ本部でもこの様な事が、やはり行なわれているのでしょうか。略≫

そしてこの末尾に「追伸」として書いてあるのが興味深いポイント部分である。

≪Mr北村のカウンセラーであるMr大久保が部下にもタッチさせずに行った不動産売買契約で非常に不明瞭な領収書類がありますので、ここに添付致します。Mr大久保とはMr北村に東京管理本部につれてこられて採用された人で現在は不動産課の課長をしている人です。通勤もMr北村と一緒で、なにかとMr北村に特別にかわいがられております。その為に日頃口うるさいMr岡本でさえMr大久保に対しては、一目おいた不自然と思える接し方です。この不動産売買契約の他にもMr北村↓Mr大久保の線での黒いうわさを、よく耳に致します。≫

●不当な評価額売買か

問題の不動産売買契約に関してレポートしていこう。

昨年の五月三十一日モルモン教の日本管理本部は沖縄県具志川市に集会場として使用するために土地と家屋を買い取る契約書を交わしている。売り主は「国吉真幸」、買い主はモルモン教の正式名称「末日聖徒イエスキリスト教会」だ。代金は総額七千九百七十六万円也。同年、五月十日付で内金一千六百万円、五月二十一日付で残金六千二百七十六万円と、仲介の不動産屋（コザ不動産商事＝代表石川清）に百九十九万四千円が支払われている。さらに六月十日付で百万円が土地建物残金として支払われている。これが、この土地売買にからむ確認された領収書のすべてである。

これだけ見ると何ら問題はない契約のようにも思われるが、この売買に不信を持ったある信者の熱心な調査によるといくつかの疑問点が出てきたのである。調査した人物の名前はあえて伏せておくが、かねてより日本管理本部の幹部たちに不信を持っていた人物とだけ書いておこう。

①売り主の国吉真幸氏の名刺に「有限会社きもの処　渡月」とあるが、法務局で調べてもこの会社は存在しない。名刺の住所にも所在せず、会社はつぶれていたことが判明。

②国吉氏に逢って質すと「自分もそのことで今困っている」といい、「税金の支払いが四百万円以上もあり、親族で問題になった。又、親からは『実印』を取りあげられ、女房にも逃げられた」という。さらに国吉氏は「新川繁さんに紹介されて土地売買に立ち会ってキリスト教会を買主として私が売主として契約をむすんだ。新川さんが全部受け取りましたがこれについてはキリスト教会も知っています。そのあとのことは新川さんから何もきい

てません」という〝念書〟も書いている。

③新川さんというのは国吉氏が「渡月」につとめていた時の仲間で、この人物のいいなりに契約をすすめ、謝礼金として百万か百五十万円を受け取ったが、飲み喰いでつかってしまったと国吉氏は語っている。新川氏は教会と売買契約をする際、残金支払いの際の二回立ち会っており、教会側も黙認していた人物だった。

④売買された問題の土地と建物の登記簿を見ると、もともとの土地の持ち主は「城間トヨ子」さんで㈱沖縄大建（既に倒産）が購入契約し更に国吉真幸氏へ売渡し契約。建物の方は「島袋正太郎」氏から六十年三月七日付で国吉氏へ売買済みとなっている。不自然な操作が臭う。

⑤土地、建物の評価額に関しても問題がある。当初たのんだ不動産鑑定士に断わられており、結局引き受けた鑑定士も「当該物件の評価につきましては、ご依頼の当時、売主買主双方とも売買金額についてはすでに合意に達しているということであったので、その市場合意に基づく価格を正常価格として鑑定評価しました」（長田不動産・長田義丸氏）という「申出書」が提出されている。

⑥調査人氏は正当な土地と建物の評価額を聞いたり調べたりした結果、通常価格より総額二千万円ていどが、高いと判断。ただし契約仲介者のコザ不動産商事の石川清氏は「高いはずはない」と反論しているという。

その他、領収書に関してもいくつかの疑惑があるが、以上が疑問点の主な内容である。

●ケント・ギルバートの名も

モルモン教会の規定によると、教団関係の不動産売買に際しては法律上の顧問格的人物が立ち会うことになっているという。この問題の沖縄集会場の売買に際しては、アメリカの弁護士資格を持つタレントでもあるケント・ギルバートが立ち会ったともいわれる。もしそれがホントだったら、ケント・ギルバートは、こうした疑惑を知った上でグルになってやったのか、それともまったく気がつかないままに立ち会い人をやってしまったのか、問題とされるところだろう。

こうした集会場など教会関係の建設や売買は毎年何件かあり、これまでも不動産業者や建築業者と結託した〝汚職〟のウワサは囁かれてきたようだ。前述したアメリカ本部への直訴状の存在が何よりもそのことを物語っているといっていい。

もっともこうしたウワサは一般の民間企業においてもよく聞く話である。しかし問題はこれが宗教法人において囁かれている疑惑であることだ。厳しい戒律を信者にさとしているはずの教会の幹部が自分たちだけは、金の欲にくらんでしまっているというのでは笑い話にもならない。

もっともモルモン教の敬虔な信者ケント・ギルバートにしても、以前写真雑誌でホモ説を打ち出されたこともあった。ホモの性行為は子孫繁栄とはまったく無縁の悦楽的行為であることを思えば、これも笑い話にもならない。それよりも、われらがアイドル・斉藤由貴ちゃんが、生殖のため以外のセックスをしないということの方が興味ぶかい。一刻も早く、こうしたモルモン教団内部の不祥事や疑惑を知り、自由な女としてはばたいて欲しいと願うのは筆者だけの思いにすぎないだろうか……。

〈了〉

またもやテレビ朝日の水曜スペシャルのヤラセが発覚し局の体質に批判



うわさの人

いま注目のノンフィクションライター

家田荘子の巻



目が大きくて顔立ちが岸本加代子に似た、きゃしゃな体つきの女の子が、これを最後に女優業に見切りをつけようと、ある雑誌に「表紙グラビアに出してほしい」と売り込みに行った。世間話に六本木で遊んでいる若い男女の話をしたら、そのネタで是非書いてみないかと勧められ、「とにかくメチャクチャに書いた」それが、そもそもこの世界に入ったきっかけ。

以来五年。その記事を見て引っ張ってくれた「週刊文春」を舞台に、「黒い肌に群がった女たち」「極道の妻たち」、そして最近では「代議士の妻たち」と、次々と意欲作を書いてきて、いまや最も注目される若手ノンフィクションライターの一人だ。とりわけ、二作目「極道の……」は大変な反響を呼んだ。

「活字の世界に入ろうなんて考えたこともなかった。ただ、自分が知ってるだけの話でお金になっちゃったのが、すごく魅力的だったのね。あの頃、かけ出しの女優で生活が不安定だったし、〃もう女優はダメかな〃って思ってた時期だったから。何も知らないまま、この世界に転がり込んじゃったわけだけど、いま思うと、ただ夢中でやってた最初の頃がいちばん楽しかったみたい（笑）」

「代議士の……」のための選挙同行取材で、みごとに陽焼けしたままの顔をほころばせてそういう。

それにしても、目の前にいる彼女が、例え仕事のためとはいえ、大の男でも二の足を踏むヤクザ世界に自ら飛び込んで、体当たり取材をやり遂げた女性とは、とても思えない。

今年で芳紀二十八歳だが、小柄で愛らしくて、見かけはまだハイティーンといっても通じるほど。髪をポニーテールに結って、ミニのワーピースを太いベルトでキュッと締めて決めた姿は、六本木や原宿を遊び場とするギャルそのものといった感じなのだ。

その彼女のどこに、門前払いを何度も食い、時には紹介者たちに体まで要求されながら、ついには山口組の幹部宅で居候取材までやってのけちゃったというエネルギーが潜んでいるのか。しかも、時あたかも山口組VS一和会抗争が勃発、いつ血腥い闘いに巻き込まれるかわからない状況下での取材だったのだ。

「取材であった親分や姐さん方からは、〃もっと年とった偉い先生がくるとばかり思ってたら、こんな若い娘がくるとは〃とアキレられましたし、いまでも〃エッ、あなたが書いたの。もっと強そうな女の人かと思ってた〃ってずいぶんいわれます。当然ですよね。だって私、実際、気が小さいし心臓も弱いし、最初の頃なんか、体じゅう震えながらやってたんですから（笑）」

「それでも続けたのは、意地もありましたけど、途中で投げ出すわけにいかなくなってたというのが、最大の理由。極道という非情の世界で生きる女たちを描いてみたいと思って始めたところまでは良かったんですが、取材のメドもつかないうちに、前借りしたお金は

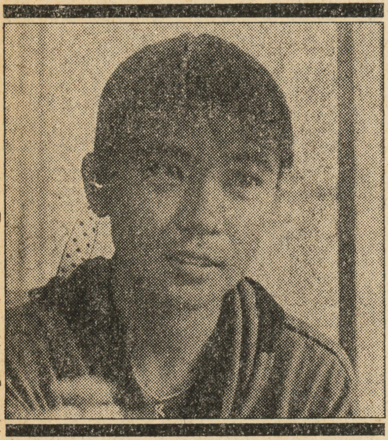
なくなる、ステレオから古着、靴まで売って作ったお金も底をついていく……。一日五百円でどうにか凌いでましたが、なんとしてでもものにして原稿料をもらわないと、破産するしかなくなってたんです」

「人が思うほど格好いい理由じゃないんですよ」とでもいいたげに、コロコロっと笑う。

話を聞いているうち、彼女が取材対象に肉薄し得た〝秘密〟がわかるような気がした。彼女には生一本な情熱がある。本人によれば、取材でテープは使わず、大学ノートにひたすらメモするのだそうだ。恐いのを我慢しながらも、媚びずおもねず、素朴な気持ちで相手に知りたいことを聞く。そんな彼女を前にしたら、いかなゴツい倶梨伽羅紋々の親分でも、「しゃべってやらなしょうがあらへんなぁ」という気になるのではないか。男性のヤクザ記者の中には「女だから食い込めたんだ」と嫉妬まじりにいう輩もいたやに聞くが、要するに、取材記者としての資質に彼女が優れていたということなのだ。

本人は「女だからといわれても仕方ないと思ってます。まっ向からじゃ、極道の取材は男にかなわないと思って、妻の方から入ってったんですから」と、謙遜するのだが……。

MONTHLY FACE



とまれ、窮乏生活の恐ろしさの〝結晶〟でもある「極道の妻たち」は、この八月の単行本化に続いて、十一月中旬には東映から映画が封切りになる。映画には、昔取った杵柄で自らホステス役で出演するそうだ。「ほんの端役。グアムにロケで連れてってくれるといわれ、つられて引き受けちゃった」。

もっとも、いいことばかりでもなさそうで、「親分らへの紹介を頼んだことのあるワルたちが〝金貸してくれ〟って早速、いってきました。紹介するまでは〝体寄こせ〟で本になったら〝金寄こせ〟。どうしようもない」。アフターケアがまた、ひと苦労らしい。

連載中だった「代議士の妻たち」の方も間もなく終了。ちなみに、代議士の妻と極道の妻と、世間的には正負の両極にあるような世界をふたつながらに取材しての感想を聞くと、「妻がいくら一生懸命やっても、名前が残るのは夫の男の方だけなのに、それでも、自分の愛する人を男にしてやろうと自分を殺してまで尽す。そこがすごく似てますね。私なんか尽されるのが好きな人間だから、自分のための苦労はできても、男のために自分を犠牲にするなんて、とてもできない。どちらの妻にも不向きです（笑）」と、明確な答えが帰ってきた。

書くたびに力作をものにしてきた彼女のこと、〝次〟が楽しみだが、十二月ぐらいまでノンフィクションは休業するとか。「ノンフィクションて辛い仕事だから、自分を駆り立てる情熱がいつまで続くかわからないけど、いま興味を持ってるのはエイズ。誰かスポンサーになってくれないかな」と夢も大きい。

極道の取材後、過労で倒れ、「陽がまるでささない部屋」で三ヵ月間も寝込んだ。その、いろいろな想い出ある住まいから、近々、陽当たりのいい場所へ引っ越す。その話をした時の彼女が、思いなしか、いちばんうれしそうだった。

〈取材・文　辻井　雪〉

自動車業界における〝レコード大賞〟をめぐるマスコミ攻防戦

●レポーター 五野井博明



▼車業界の〝レコード大賞〟

世界を股にかけて稼ぎまくっている日本の基幹産業である自動車メーカーにとって、大変気になる12月があと2カ月後に迫ってきた。その年に売り出された乗用車のなかから選ぶ〝日本カー・オブ・ザ・イヤー〟の第1次ノミネートが、今年は12月中旬に予定されているからだ。恒例となっている自動車メーカーのあの手この手の根回しが、選考委員である自動車雑誌の編集長や評論家に対して火蓋を切るのだという。こうきくと、かの有名なレコード大賞をめぐって画策する芸能界を思わず想起してしまう。

〃日本のカー・オブ・ザ・イヤー〃、年間で最も記念すべき優秀な乗用車に与えられる賞のなかでは、いちばん有名で〃権威〃もあるとされている。賞を設定したそもそものきっかけは、欧州に現存していたことからヒントを得て、昭和45年に自動車雑誌の『モーターファン』(三栄書房)が、自社の企画としてスタートしたことが発端。その後、他の雑誌も独自に賞を設けはじめたことから、一種の大同団結めいた理由で〃日本カー・オブ・ザ・イヤー〃へ発展した経緯がある。

今年で7回目になるこの賞は、昭和55年の第1回が皮切り。過去6回の受賞車を列記すると〃ファミリア〃(マツダ工業)、同56年〃ソアラ〃(トヨタ自動車)、同57年〃カペラ〃(マツダ)、同58年〃シビック〃(本田技研工業)、同59年〃MR2〃(トヨタ自動車)、そして昨年は〃アコード〃(本田技研工業)の順で、マツダ、トヨタ、本田がそれぞれ平等に2回の栄冠に轟いている。競合メーカーである日産自動車、ダイハツ工業、鈴木自動車、いすゞ自動車、富士重工業、三菱自動車工業など6社は、いまだ宿願を果していない。

いったい何が受賞の基準になるのかというと、コンセプト、デザイン、スタイル、性能、品質を総合的に評価し、さらに価格を加味するという。毎年、軽自動車も含めたフルモデルチェンジ、マイナーチェンジなど50〜60台の乗用車が売り出されるそうで、このなかから10台が、予選通過として第1次ノミネートされる。そして、この10台を一堂に集結させてテストデーなる試乗会を盛大に行い、その結果を記名投票し、年末までにはナンバーワンが決まるというわけだ。

この〃日本カー・オブ・ザ・イヤー〃を選ぶ選考委員は、まず自動車雑誌の編集長を中心にした18社18人で形成する実行委員会で、この推せんを受けた36人の選考委員(自動車ジャーナリスト16人、自動車評論家9人、学識経験者6人、関連者5人)が加わって、合計54人で投票するシステムである。選考に当たっては、特定の自動車メーカーや媒体の政策あるいは利害に左右されるものではない、と毅然とした姿勢を一応は打ちだしている。

受賞の対象となる自動車メーカーは、前出の受賞経験3社に、まだ片目をあけていない6社を加えた9社である。企業としてはいずれも収益好調、知名度バツグン、東証第1部上場で株価は高値追い、名実とも大企業でいってみればキラ星的存在。これらの実績にはとても足許にも及ばない〃日本カー・オブ・ザ・イヤー〃なる勲章に、なぜ各社は、根回ししてまで情熱をたぎらせるのだろうか……。

この点について自動車メーカーに質してみた。根回しでは定評があるといわれているトヨタ自動車は、その有難くもない評判をすかさず覆えして、むしろ、賞そのものを意識していない風に、こういい切る。

「あれは大したことではありませんよ。当社では、お祭り的な感覚でみてるんです。だいいち、売上げになんて寄与しませんしね。かつて宣伝に使ったといっても、当社では大きく扱いませんでしたよ。それを大々的にアピールするくらいなら、自動車そのものを強調した方がはるかにマシですよ」(広報部・江口修司氏)。

聞きようによってはケンもほろろ、世界に名を馳せているトップメーカーの余裕であろうか。しかし、他のメーカーになると、そのような余裕は持ち合わせてはいない。日産自動車広報室の新田良二氏は、ちょっぴり声を弾ませていうのだ。

『経済界』が佐藤正忠再ダウン説の中、近々自社ビル建築の計画が浮上へ

「賞はやはり欲しいですよ。何といっても話題性を呼ぶでしょう、それだけでも車の告知効果があります。それに何回もテレビ宣伝や販促活動に使えますし、何かと合理的です」

いちども受賞していないせいか、もしモノにできれば、宣伝・営業対策を布く腹案がありそうな口ぶり。こと受賞に関しては日産自動車に限らず、どのメーカーも、テレビを中心とした宣伝には恰好の材料であると口を揃えている。

ところが、その舌の根も乾かぬうちに、各社は売り上げに寄与するとは思えない、とおっしゃるのだ。宣伝には必要、しかし、売り上げには結びつかない、明らかに矛盾するこの論理はいったいどういうことだろう。宣伝とは販売促進に欠くことのできない、主要な営業戦略である。ただ宣伝したことによって、売り上げがこれだけ増えたという確かなデータは、いまだに世間に公表されたためしはない。あるとすれば、宣伝に惜しげもなく大金を放りこんでいくスポンサー側に、希望的観測を働かせて納得せざるを得ない、一種の気休めだけである。

とはいうものの、宣伝はテレビやラジオに限らず、消費者を錯覚させる点ではまたとない強力な武器。いっときでも注目させることによって、購買意欲をくすぐり、ぐらつかせる。そして、そのうちの何割かは手をのばしていく破目になる。とうぜん分り切っているからくりを、あえて否定してみせる自動車メーカーは、たかだか54人の小集団で決めた〝日本カー・オブ・ザ・イヤー〟のお陰で、多少でも業績が潤ったと自認するのは、大企業としての沽券(こけん)にかかわるとでも解釈しているのだろうか。

▼賞の背景に見えるゆ着関係

自動車メーカーの虚勢に反目したわけでもなかろうが、非常に説得力のあるコメントを出してくれたのは、自動車評論家で選考委員の三本和彦氏(55歳)。7、8歳は若く映る三本氏は、東京新聞の記者から転向してこの道25年のキャリアを積んでいるという。毒舌家として定評があり、旺盛な反骨精神が表情に滲みでている。三本氏は歯切れのいい口調で話す。

「車はざっと2000種もありましてね、おまけに毎年、数十種が売り出されてくる。自動車メーカーのセールスは、新規の客に売るには、説明するだけで2時間ちかくもかかるんです。ところがですよ、〝カー・オブ・ザ・イヤー〟を獲った車なら、ものの、20〜30分で決めてしまう。営業効率がケタ違いなんです」

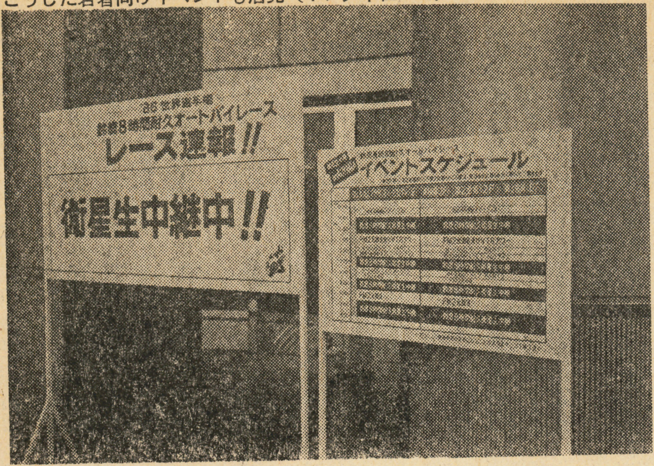
日本民族は、実像よりも虚像を大事にするお国柄である。セールスには、この上もない〝殺し文句〟になるのだろう。なにせ、企業は効率最優先の時代である。国内の年間消費は、全体の20％前後を占めるという中古車も含めると、500万台に届くという。アメリカの800万台に比較すると、人口比率から捉えても大変な市場である。販売合戦は、とうぜん苛烈になるというのもうなづける。

〝日本カー・オブ・ザ・イヤー〟を獲らんがための、あの手この手の自動車メーカーは、これでは顔色が変るハズである。

自動車メーカーの選考委員に対するアプローチぶりについて、前出の三本和彦氏は煙草を手にしながら答える。

「昨年はすごかったですね。とってつけたような招待がかかってくる。とりあえず行ってみると、ほかの選考委員たちもやってきている、ナルホドと思いますよ。例えばゴルフですがね、マツダ、三菱自動車、いすゞなんて

こうした若者向けイベントも活発（ボンダ本社にて）



ところはプロ相手の大会をもってますから、それに招待して、大会前日に有名なプロと引き合わせる。優越感を味あわせるってことです。そうかと思うと、ふだん会ったこともないメーカーの幹部から、酒の席がかかってくる」

ことこまかに話そうとはしなかったが、いささかうんざりしている様子である。このような利害絡みの多種多彩な接待はどの業界にも付きものであるが、それにしても、とかくの噂がある実弾まで飛び交うとあってはおよそ大企業のイメージにはふさわしくない。この件についても三本氏は含み笑いをして否定しなかったが、ある自動車雑誌の編集者である井上光二氏（仮名・37歳）は、匿名の条件にしたため、安堵したのかこう明らかにした。

「評論家やフリーのジャーナリストに比べて、媒体を持っているのは強味ですよ。待遇の内容が違いますから。こちらも雑誌をバックにしてるんで、一例を挙げると堂々と広告出稿を要求する。色刷りで、スペースは全頁、それも1回なんてケチなことじゃない。ふだんは料金を割引きさせられますけど、正価で押すんです。メーカーの担当者なんて、しょせん会社の金でしょう、偉そうなこといってたって、会社あっての担当ですからね。ある大手メーカーなどは、掲載したことにして金を払い込んでくる。受けとる方は会社に入れようが入れまいが、自分が経営してるんですから、どうにでもなる。そんなうま味が毎年あるから、選考委員はことごとく編集長でしょう。編集長などは昔はそれなりに知っていても、現代のメカにはついて行けませんから、むしろ、若手の方が熟知してるんです。ジャーナリスト精神があるなら、直接タッチしている若手に投票権を与えるべきなんですよ。酒の席に呼ばれても、それは表向きで、帰りになると奥さんか子供さんにでもといって、封筒が出てきますよ。うけとる側の肩書きによってランクがあるみたいで、5～10万の現ナマなどはCクラスじゃありませんか」

色白で長身の井上氏は、一気にまくしたてた。

▼車業界に生息する物書きたち

現在、自動車業界には約２００人の評論家やジャーナリストが、執拗に食らいついているという。自動車雑誌はざっと90誌ちかくもあるので、レポートを発表する舞台には事欠かないといわれている。

しかし、肝心の原稿料は、破格だと恩に着

伊勢丹恐喝の右翼が二人逮捕されて伊勢丹の右翼総会屋に甘い体質露呈

せられても、400字詰め1枚3〜4000円止まり。このクラスは10指にも満たないというから、通常稿料といわれている、800〜1500円クラスがゴロゴロいるわけである。雑誌社にも、それぞれ記者はいる。フリーの売れッ子が仮りにいたとしてもひと握りであろうから、大方の日常生活は推して知るべしであろう。

　ところが実際には、立地条件にも恵まれた洒落たマンション住いが、ごまんといるのだそうだ。たぶん、そのへんのからくりを御存知なのだろう、もう20年のキャリアをもっている評論家の砂村義春氏(仮名、46歳)は、

「評論家にせよ、ジャーナリストにせよ、本物はひとりもいませんね。そう、私だって残念だが、そう思っちゃいません。ときどき本物ぶってみせるだけで、巧みにコントロールしていかんと、こんどは私の死活問題になってくる。だからトータルで平和なら、それでいいんじゃないですか」

　こうなると、出入りする側もされる側も、大人の付合い、ということなのか。しかし前出のトヨタ自動車広報部の江口修司氏はこう反論する。

「実弾が飛ぶなんて考えられませんよ。何でも段取りをするのは我々ですから、仮りに上司がしたとしても、決済などですぐ分ってしまうでしょう。ただほかの面では、常識的なホドホドの付き合いはしてますけど」

　言葉では否定してみせたが、しかし、もうひとつ力強さがない。もっともあからさまにブチまけようものなら、こんどは自分自身の進退問題に関わってくる。間違っても、取材する側を喜ばせることはタブーであろう。

それでも取材のプロセスでつい油断でもしたのか、かって〃カー・オブ・ザ・イヤー〃を担当した当時を、江口氏は披露してくれた。

「ぼくが関わったのは3、4回目まででしたけど、その頃は接待などの要請がひどかったですね。具体的にはいえませんけど、考えさせられました。当時に比べると、今はよくなりましたよ」

　よほど苦戦を強いられたとみえて、実感あるいい方をした。3、4回目といえば昭和57年の〃カペラ〃、同58年は〃シビック〃が受賞した年である。この57年〜59年にかけて、自動車メーカーと選考委員の癒着が目立ったことでは、記憶に新しい。

　まず57年に話題をさらったのは、マツダ工業が8日間にわたる〃スペイン試乗会〃を主催、選考委員25人を含めた自動車ジャーナリスト約50人を招待したこと。これを見習ったわけでもあるまいが、三菱自動車工業の〃サラエボ試乗会〃。この方は冬季オリンピックに、公用車として車を寄贈したことを理由に、自動車雑誌8社を招いた。本田技研工業も、負けず劣らずのイベントを実施した。札幌にある定山渓の温泉ホテルに、選考委員25人を含めた210人を招待して〃シビック試乗会〃を行い、スケールの大きいところを示したのだ。それぞれ正当化する理由はあるにせよ、やはりどうみても癒着の構造ではあるまいか……。

　では現在、他の自動車メーカーはどうだろうか。富士重工業広報室長の早藤善雄氏は、

「このポストに就いて日が浅いものですから、正直いってまごついてますよ。これからおいおい分ってくると思いますが、ジャーナリスト対策はとくに意識していません」

　温和な話し方で、対応はホドホドにというニュアンスである。似たような表現をしているのが、ダイハツ工業。広報部係長の小川新一郎氏は、

「車が欲しいというときには付き合いがある以上、多少の便宜をはかってあげますけど、

不良債権の日総リースの大口債権者は大手の生命保険と徳陽、興銀など

そこから何かを期待するなんてことは考えませんね。ですからふだんの対応も、ごく平均的で、目立ったことはしてません」

どこまでがホドホドで平均的であるのか、その尺度は知るよしもないが、揃って差し障りのない回答である。

だが、オフレコでいきましょうと切りだした途端に、ある中堅メーカーからこんな言葉が出てきた。昨年まで広報部にいて、今年から営業部へ転出したという柳谷勤氏（仮名・36歳）。

「ホドホドの付き合いなどしてたら、本当にホドホドの記事しか雑誌に載りませんよ。広報は大変なポジションです。評論家にしろ、雑誌の記者にしろ、その気になれば車など買わずに済みますよ。新車が次から次と出るでしょう、そのつど、試乗などといって乗り回してますからね。会社としては試乗レポートを期待するから、イヤともいえないでしょう。彼等が負担するのは、ガソリン代だけですよ。でもこの程度なら、まだ序の口です。頼みもしないのに車の写真を送りつけてきて、それとなく金をせびる。そんなクセをつけさせたメーカー側にも責任はありますけどね。とにかく、こんなに雑誌が多いのに、いまだに倒産したなんてケースはありませんから……」

できれば淘汰されてほしいといわんばかりの柳谷氏は、特徴のある大きな目をぎょろつかせた。

確かに自動車雑誌の数は多い。業界売り上げ20兆円、免許保有者5234万人という図抜けたスケールを前提にしても、ひとつの業界に約90誌とは異常ですらある。いずれも貧相な作りではない。ファッション雑誌のように派手な装幀で、頁をめくると色刷りの車が満載である。紙質がいいため、ことのほか豪華でもある。どの自動車メーカーへ出向いても、50誌〜60誌はこれみよがしに陳列されているのだ。表紙の配色が多彩であるから、単調な色合いのオフィスに華やかさをそえている。裏返せば、それだけ付き合いの良さを示すものだろう。

▼円高でピンチの業界事情

ともあれ自動車メーカーの本音に迫ってみると、個人的には非難ごうごう、会社人間へすり替ると心にもない言葉の連発となる。要するに、うさんくさい対象ではあるが、身銭（みぜに）を切っているワケじゃないという、平均的サラリーマンの無責任な像が見え隠れするのだ。詰まるところ、自動車メーカーにとって、自動車雑誌の寄りどころは何かとなると、

「発行部数が多いでしょう、ユーザーはかなり読んでいると思うので、無視するワケにはいきませんよ」

という、三菱自動車の広報部主任朝日勉氏のコメントに代表されるありさま。それにはやはり、選考委員も含めた自動車ジャーナリストのご機嫌を、損ねてはいけないということだろう。

私の手元に、自動車雑誌社の発行部数一覧表がある。これはトヨタ自動車、日産自動車、本田技研工業など大手メーカーも所有しているものだが、この一覧表では雑誌は67誌を数え、公称の発行部数は、全誌をトータルすると何と1297万部強に達している。『カーセンサー』の60万部を筆頭に、50万部台1誌、40万部台5誌、30万部台7誌、20万部台19誌などが主なところで、1万部割れは僅かに1誌にすぎない。公称部数は営業活動

を念頭においたデッチ上げにすぎないから、実態を知れば、たぶん自動車メーカーは腰を抜かすのではあるまいか。

それでも、自動車メーカーは揃って寛大である。

「公称部数を額面どおりうけ取っていませんけど、でも各誌60％前後の部数は出しているでしょう」

こう話すのは、本田技研工業。つまり、780万部である。頭をかしげながら、50％とみたのは富士重工業。いちばん低い見方をした日産自動車は、39％に当たる500万部と推定しているのだ。大多数が読者へのダイレクトであれば別だが、一般書店向けに販売比重がかかっているとすれば、各誌の公称部数の実態は9割方が10％以下ではあるまいかというのが私の実感だった。自動車雑誌にとって、自動車メーカーのこのような思いいれは大いに歓迎されているに違いない。

今年は円高の影響で、いちばん打撃をうけているのは自動車メーカーである。三菱自動車の広報課主任朝日勉氏は、この点について実感をこめていうのだ。

「輸出台数は落ちないと思いますが、利益が20～30％ダウンするでしょう。これは当社に限らずです。打開策は生産コストを下げるか、それとも輸出先の現地で値上げをするかです。しかし、どちらもムズかしいと思います。当面、内部留保でカバーできますが、いつまでもというワケにはいきません。国内販売でと思っても、すでに横バイでしょう。よくても2～3％の伸びだと思いますよ」

タイムリーな善後策が欲しいという話し方である。その点、国内販売に強いダイハツ工業は、こと円高の影響に関しては深刻度が薄い。広報部係長小川新一郎氏は、ちょっぴり余裕のある態度で、

「円高では、大手メーカーがかなりの打撃をこうむっているでしょう。トヨタ、日産、本田はもともと輸出で儲けてきた会社ですから、おそらく大変だと思いますよ。国内販売の大手はよくてトントン、下手をすると赤字になっているかも知れません。当社は輸出で出遅れたばかりに、国内へ力を入れましたから、こうなってみると大手ほど心配しなくて済みます」

軽自動のダイハツを自負している様子だが、しかし、こういえるのも大手メーカーが輸出に力を入れていたからである。これからはそうはいくまい。海外市場が駄目なら国内市場があるさとばかりに、営業政策の転換だってあり得るだろう。ちなみに昨年の生産台数は、1227万台である。乗用車は62％強を占める765万台で、このうち輸出は58％をマークする442万台を数えている。

とにかく円高の影響を意識すると、打撃をうけている大手メーカーは、自ずと国内販売の見直し、あるいは再攻勢の必要性に駆られはしないだろうか。大手は図体が大きいだけに、営業効率を重視する。長々と時間をかけて説得するセールスよりは、短時間で決着をつけられる〝日本カー・オブ・ザ・イヤー〟の存在こそ、一種の救世主として再認識されるのではなかろうか。

一部には「軽自動車も含めた一括の評価基準には、賞の説得力などありませんよ」「たった一台の受賞ではどうしようもないね、せめて部門別の受賞があっていい」「公正を期すために、自動車雑誌の編集長は投票権を持つべきではありませんよ」など、もっともな意見も輩出しているが、しょせんは少数意見で陽の目を見ていない。

これらの批判に対して〝日本カー・オブ・ザ・イヤー〟実行委員の小林彰太郎委員長（カーグラフィック編集長）は、

「差別などしていません。軽自動車でも画期的なものであれば、受賞の対象にはしますよ。ですから大手優先ではありません。その証拠に日産自動車はいちども受賞していないでしょう、決して二流軽視などとも思ってもいませんよ。メーカーと選考委員の癒着ですか？　それは大事にされているだけのことで、それがすべてではありません」

温和な口調で毅然としたところをみせているが、しかし、今年の自動車メーカーは状況が状況であるだけに、受賞を目指して、水面下の動きはより白熱化しそうだと専らの評判。自動車ジャーナリストのひとりである桜井芳文氏（仮名・34歳）はその点にもふれながら、苦笑混りにこう話したのだ。

「今年は円高で厳しいですから、プラスになるものなら何でも欲しいでしょう。ある大手などは、ジャーナリスト対策にすでに取組んでいるそうですから、それをあてこんでいる人は楽しみにしていると思いますね。いつものケースだと、ノミネートされた車の試乗会が終ると活性化するんです。受賞を決める投票日が近づいてくると、決まりきったようにメーカーから電話がかかってきますよ。重役であったり、部長であったり、とりあえずこっちの自尊心をくすぐるわけです。業界の情勢を知りたいとかなんとかいって、もっともらしい口実を設けてくるんですよ。そりァ、丁重な誘い方です」

メーカーに受けの悪い選考委員は、重役が課長になり、誘う場所も都心の料亭から副都心あたりのスナックへ、それぞれ格落ちとなるのだそうだ。〝日本カー・オブ・ザ・イヤー〟は、その公正さについて度々とかくの風評をふりまいてきたが、車の方は年を追うごとに充実しているのに、メーカーと選考委員の腐食の構造は、いまだにマイナーチェンジすら至難というのが内情のようである。

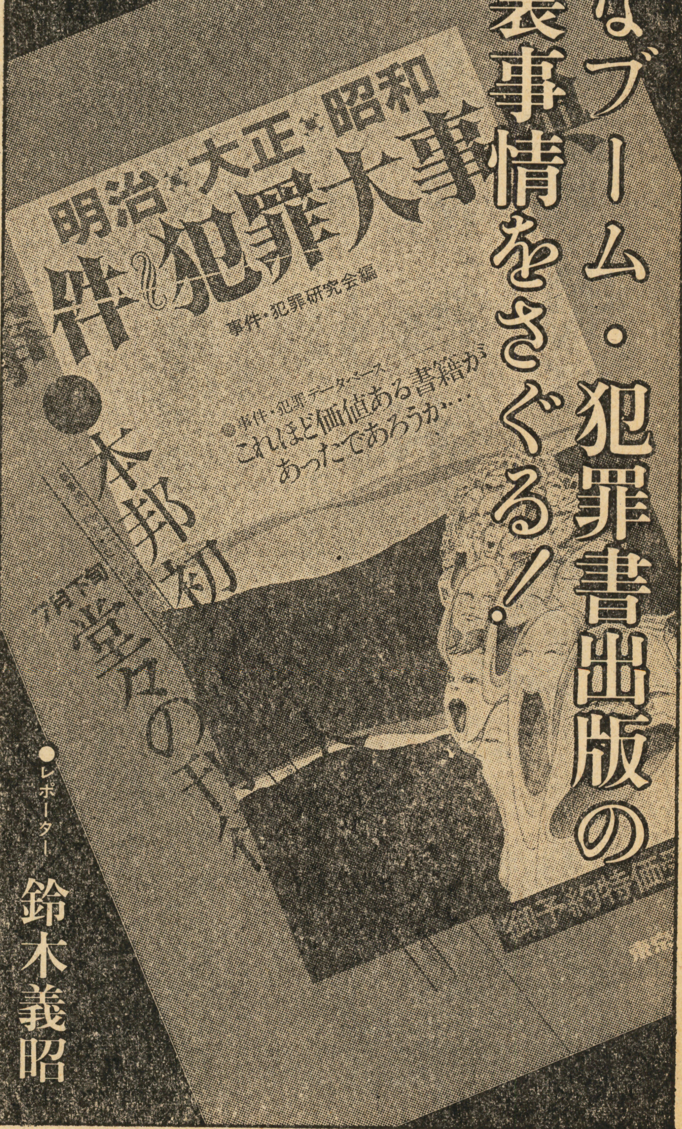
結局のところ、こうしたメーカーとジャーナリズムのゆ着というのは多かれ少なかれ、いずこの業界にも見られることではある。だからといって、それが当然と思うジャーナリズムはどう考えてもジャーナリズムとはいえないだろう。いや、そう考えるべきではないかと思うのだが…。

（了）

稲川系右翼団体機関誌『大吼』支援の三菱・住友・三井などを赤旗が批判

静かなブーム・犯罪書出版の舞台裏事情をさぐる！

●レポーター　鈴木義昭



犯罪本ブームの傾向

犯罪書の出版が、静かなブームである。都内の国電車内の中吊り広告等で大々的に宣伝を打って7月に刊行された東京法経学院出版の「明治・大正・昭和　事件犯罪大事典」は、一冊一万三千五百円（特価一万二千円）という高価な本にもかかわらず五千部を刷って、すでにそのほぼ半分が売れた。版元では「伸びがよい」となかなか気を良くしているとのこと。これは、事件・犯罪研究会編ということで作られたA５判760ページ・二千三百項目を網羅、70ジャンルに分類した索引をもつ本邦初の本格的な犯罪事典である。執筆者

は、犯罪研究に古いキャリアをもつ加太こうじ氏をはじめ、猪野健治、松永憲生、下川耿史、穂坂久仁雄、保坂正康、安田雅企…他57名。刊行前にいちはやく予約注文して来た人たちの中には、田辺聖子、佐野洋、青木雨彦といった著名人、物書きも少なくない。

出版元の東京法経学院出版では、警察1600、法務（検察・弁護・裁判所）665、全国図書館1200、テレビ・ラジオ690、新聞632、出版社285、大学図書館530、他銀行、保険、教育、福祉関係にまで特価予約受付の出版案内を送付した。東京・新大久保駅前にある東京法経学院は、各種資格を獲得するのに適したその種の専門学校としては有名。その出版部は、法律、教育関係の本で二十数年。教育図書、受験参考書、刑法の教科書を出して来たが、今回の出版もその延長線上にあるという。同出版は、昨年の5月からこれに先行する企画として〃犯罪ドキュメントシリーズ〃を発行して、反響を呼んでいる。『戦後女性犯罪史』（玉川信明）と『少年少女犯罪』（安田雅企）で始まったこのシリーズも、最新刊の『やくざ犯罪の研究』（猪野健治）と『演劇としての犯罪』（鳥井守幸）でシリーズ全13巻を完結する。

犯罪多発時代に正統派犯罪論のシリーズとして脚光を浴びてもいる。

さて、その事典の反響であるが、意外と警察関係者が多いという。犯罪の手口が知りたいのでその手口まで入っているのが良い、ということで、公費で購入する警察関係も少なくない。出張のついでに直接会社まで買いに来る地方の警察関係者もいるとか。また、捜査の過程まで入っていないと文句をいう警察関係者もいるそうだが、警察のための犯罪捜査の手引書ではないのだから仕方ない。「犯罪の事実だけが漠然と五十音順に並んでいて、あの家庭医学事典のような分厚い本を一体誰が買うんだろうか。ましてや、パソコンと連動させたデータベース通信を新聞社が開発した時代に」（『週刊文春』8月28日号）という批判もあるが、そうしたデータベース通信を常に利用できる人はまだまだ限られている。

ジャーナリスト、犯罪研究者といった個人だけではなく、警察、被害者になりやすい保険会社、銀行からも引き合いがあったことは注目に値する。さらに、単なる新聞情報ということではなく、各執筆者を明記して各専門分野に当っているので資料価値だけではなく、読みもの、娯楽書としても利用できる。もちろん、あのまま放り出しておいたのではダメだが、じっくり読めば「パターン研究」であるとか「犯罪民族学」の研究などもできるという声もあるようだ。

代表ライター・朝倉喬司の場合

ルポライター朝倉喬司さんも、犯罪書ブームを突っ走るトップランナーのひとりである。一九四三年岐阜県生れで、六八年から『週刊現代』の記者となり事件を追って日本全国をくまなく歩いたという。八二年10月の『犯罪風土記』（秀英書房）が初の犯罪論集だったが、すでに『続・犯罪風土記』も出版され、目下パート3を書きおろしで構想中でもある。大菩薩峠にフォークロア的なアプローチを試みようと現地への取材も終った。作家の船戸与一が『犯罪風土記』の解説で「朝倉喬司は現場しか信用しない男である。彼は統計上の数字やアカデミックな犯罪諸学説にはほとんど見向きもしない」というように、

三島由紀夫を描いた「MISIMA」の〃無修整ビデオ〃が国内へ逆輸入！

独得の文体、独自の斬り口で犯罪を語っている。そんな朝倉さんに、なぜ、犯罪を書き続けるのかと聞いてみた。

「ボクの場合、自分自身がなんとなく、社会のシステムになじめない、たえずズレが生じて来るんだね。そのズレは、誰でももってるんですよ。ところが、それを修正しようとすればするほどますますズレてくる。それが飽和状態になった時、犯罪になったりするんですね。そういうズレたとこから見た社会っていうのは、鮮明に見えて来るんです。闇から光の方がよく見えるってことはあるんでね。光の方から闇を見ても、なかなかよく見えないけど。だからボクは、闇の方に身をよせて、犯罪の方に身をよせて、犯罪者の感覚になって犯罪を追ってみたいっていうことなんだよね。はみだした肉体、はみだした身体に身をよせるっていうかね。ズレの隙間から、社会の実相が見えることもあるんでね。〃のぞく〃っていうかね、『メガロポリス犯罪地図』は〃のぞく〃ようにして書きました。

　犯罪者と共通するところがあると思うよ。家庭生活も満足にできない」(笑)。

「グリコ・森永事件にしてもね、けしからんと単調にみんな唱和しちゃってるでしょ。異物を排除して行く論理、ズレは勝手じゃないかと言えない社会、その先兵にマスコミの報道が立っているね。やはり、21面相の側から見ていかないとね、よく見えないんだよね。」

　来年になるかも知れないが、「グリコ・森永事件」に関してはぜひ、一冊にまとめたいという。

『ダカーポ』や週刊誌別冊特集も

　そんな朝倉さんも、井上ひさし、別役実、両氏との巻頭犯罪論座談会「現代という名の暗夢が疾子」や豊田商事永野一夫のドキュメントで参加した『週刊大衆』の増刊『現代犯罪百科』(7月11日号)は、かなりボルテージの高い犯罪特集を組んで好評であった。こうした犯罪モノの別冊は『アサヒ芸能』が、季刊で始めた『ポリスマガジン』があったが、『週刊大衆』は初めての試み。『ポリスマガジン』は売れ行きが良いので隔月から月刊化にしたが、結局失敗。『現代犯罪百科』も、もう少し成績が良ければすぐにでも出せるところだがいまいちで、今後はやはり季刊程度で出していければ…と語るのは企画から担当して編集した桑村隆之さん(40歳)である。桑村さんは、『週刊大衆』ではギャンブルモノや猪野健治氏の連載の担当。感想や意見をという編集後記の呼びかけに応えて来たのは、30~40代が中心。「小説よりよっぽどおもしろい」とか「次作を期待する」といった心強いものが多かった。

「本来の意味のブームじゃないと思いますよ。80年代は犯罪の時代だという捉え方、ドキュメントの時代みたいなとも結びついているとは思いますが…。民衆史の方からいっても、犯罪は重要なテーマですよね。毎日新聞の鳥井守幸さんが、『こういうテーマは努力の割には報われないものだ』って言ったのが印象的だったですね。

　従来のコラムレポートの書き手っていうのは、古いですよね。『残虐』といった古い考えでまとめていますが、そうじゃないだろうと思う。ドキュメントの書き手も人数がいないですね。まだ、若手の人は充分いないなあっていう感じです。新しい書き手がいない。今回のでは、池田房雄さんが良かったですが。昭和30年代は、文春なんかがこういう特集を組んだ時、新聞記者の人が書いてた。梶山季之さん、大下英治さん以後ですよね、ライターで構成力のある人が書くようになったのは。

犯罪報道もデカイテーマですよね。新聞記者についても、今の連中は当局発表だけですから。すぐ名前出すし、何も考えてないんじゃないですか。前坂俊之さんなんか、『あいつらバカばっかりだから』なんて言ってますけど」

という桑村さんが個人的に興味をもっているのは、保険金の問題、〝コンピューター犯〟〝海外犯〟だという。次回作ることになるなら、より中味をしぼって、編集意図を喰い込ませて行くとも。猟奇なら猟奇で、中味をえぐりとるように編集したいとのことだ。

『ダカーポ』は、9月20日号で「金・セックス・暴力・汚職の時代　現代の犯罪研究」という特集を組んだ。朝倉喬司、佐江衆一、山中一郎…といった専門家へのインタビューと佐木隆三、和久峻三などに「戦後犯罪ビッグ10」を選ばせたりしている。吉田仁編集長に聞いてみた。

「一般の人々が犯罪に走る傾向、誰でも犯罪にまきこまれる不安があるし、この辺で半年間の犯罪をふりかえってみようということです。こういう傾向があるからということで、あとは読者に判断してもらおうと。犯罪論ブームはややあるんじゃないでしょうか。浅野健一氏の本、『犯罪報道の犯罪』(学陽書房)や『犯罪報道は変えられる』(日本評論社)の反響もあるようですし、マスコミ犯罪のブームというのもある。」

58年10月に創刊されて5号目を数える、ユニークなミニコミ『カジノ・フォーリー』も7月25日発売の最新号で、「ステキ！　犯罪特集人間クセエ悪の世界(ワンダーランド)」という特集をやっている。あまり書店に並んでいない雑誌なので、ざあーっと主な目次をひろってみよう。「犯罪人類学」朝倉喬司、「メディアと犯罪」上野昂志、「泥棒あれこれ」下川耿史、「スリ&結婚サギ」安田雅企、他である。35歳、フリーライターでもある編集長の竹本幹男氏によれば――、

「ウチの雑誌は、前から人間くさいことやってるんだよね、笑いとか。犯罪は、一番人間が正直に出ると思うんだよね。犯罪と笑いが、一番人間くさい。共通項があると思うんだ」

書店でも犯罪書フェア展開

この秋、犯罪書フェアをおこなっている書店が少なくない。まず、八重洲ブックセンター(東京駅八重洲口駅前)では8月から9月13日までおこなっていた〝犯罪書フェア〟を評判が良いので一週間延長した。約60点の犯罪書をそろえたものだったが、マスコミ人がよく通って来たそうである。全国的にも広がっているようで、主な所を列記すると、札幌の紀伊國屋書店、東京・目黒区の恭文堂、京都のアバンティブック、名古屋の書店カッパ(松坂屋内)等々である。全国の書店も、犯罪書出版の増加をいちはやくキャッチしての動向といえそうだ。

かつては新聞記者、学者が専門であった犯罪分析を、ドキュメントや小説の世界で犯罪を追いかけるスタイルを作ってその第一人者となりつつある作家の佐木隆三氏(49歳)に、犯罪論はブームになっているか、と質問してみた。

「増えて来ていることは事実ですけど、送り出されても迎えられていないんじゃないでしょうか。

犯罪報道については、疑問に思っています。非常に偏った報道しかされていないと思います。報道に納得いかないから、報道では見え

天中殺ブームを仕掛けた後自己批判した和泉宗章は芸能プロ社長で健在

ないから、自分で見に行くんですね。

一番いけないのは、あきらかに近年の傾向ですが、新聞記者は、各所轄の警察を回って仕入れるのではなく、警察広報で仕事をしている傾向がある。各都道府県の警察が刷物か何かを手際良く配って、犯人はサキリュウゾウ、質問があればどうぞなんて言って、そのやりとりで書いちゃう。それがよくないと思うんです。

ボクはくどいようですが、自分には犯罪論はできないし、犯罪の現場について書いているのであって、論はつまらないし自分にはできないと思っているということです」

佐木氏が、今追っているのは人見安雄という怪盗についてで、日刊スポーツに実録小説として連載している。

『事件・犯罪大事典』の執筆者の一人でもあり、『戦後女性犯罪史』の著者でもある評論家の玉川信明氏（56歳）にも、犯罪書と犯罪論の現状について聞いてみた。

「犯罪論ブームはないでしょう。犯罪ブームだけど、論ブームじゃないよ。澤地久枝さんなんかは社会派だけど、分析らしきものは出て来ない。事実をもって語らしめるっていう方法だよね。

犯罪書は、読みもの中心から脱皮していないよね、明治以後。学界ではともかく、民衆の側には届かないからね。『朝日ジャーナル』で連載してた朝倉喬司さん、あのぐらいが、今のところ最先端。ただ、朝倉さんにも不満なのは、実存主義、社会分析にとどまるんだよ。人間まで降りて来ない。大門一樹さんでもそうだね。

現代の犯罪をどう理解するかだよね。大学の先生方が書いているものはほとんど、役に立たない。犯罪学をやっている人、犯罪心理学とかね。女性犯罪については、学者のモノはゼロに等しい。

都市問題ですよね、現代の犯罪は。都市で孤立した人間が起こすわけだからね、金がないとかね。田舎では、助けられたり助けたりでね。都会の泥棒と田舎の泥棒は違うよね。共同体の崩壊が犯罪を生み出すんだから…。」

また、玉川氏は昨今の犯罪書出版増加によって良くなって来ている傾向として冤罪についての関心が高まったことも指摘されていた。

硬派な犯罪書でマスコミ覚醒を!!

今日、写真雑誌やテレビの突撃レポーターに象徴されるように、マスコミが犯罪を作り出す時代、マスコミが犯罪を消費する時代になったといわれ、それらマスコミ報道に毒された人間が多くなっているようなのである。

こうした社会風潮、マスコミ暗黒時代へと傾斜して行こうとする流れに対抗する〝硬派犯罪論〟の必要性は、時代のニーズと言っても過言ではないだろう。そうした、マスコミ状況に対する、ささやかな歯止めにでもなればと考え企画したのが、前出の「事件・犯罪大事典」なのだと言うのは、東京法経学院出版の出版部長・奥田博昭さん（52歳）である。

「テレビなどの映像や犯罪報道。一面では、マスコミが犯罪を作りあげている。私はそう見ますね。そうした報道に日常にさらされている視聴者にとっては、たまりませんよ。そういう意味での犯罪ブームなんですね。犯罪の消耗品化が進んでると思います。そういった点においても、明治以後から今日までの事実、犯罪を正しく捉える資料をと考えたわけなんです。」

と語る奥田さんは、自分でも『六法読みかた辞典』や『法に強くなる法律クイズ』（共に東京法経学院出版）など4冊の著書をもつ

人で、中央大学法学部卒業後、法律学の研究をするかたわら北海道で地方公務員、保険のセールス、歌舞伎座の舞台づくりなどを経て現在に至っている。

法律関係の書籍を数多く出している東京法経学院出版には、三浦和義氏も出版目録を要望して来たことがあるそうだ。〃犯罪ドキュメントシリーズ〃の一冊、村野薫著『死刑執行』が、連続企業爆破・東アジア反日武装戦線の獄中の被告たちに〃支援の会〃から差入れようとしたところ、拘置所がこれを拒否するという事件が今年の春に起きている。〃支援の会〃では、民事訴訟も起こすかまえでいるらしいが、死刑執行の過程をその確定から執行・屍体の行方までドキュメントした本だけに獄中者に読まれては困ると恐れたらしい。しかし、死刑制度そのものが論議の対象となって久しいというのに、こうしたレベルでのタブーはまだ根強いようだ。

朝倉氏は、先頃、たて続けに出た著作の出版パーティを大々的におこなったが、その席上、スピーチに立つ人々から次々に、「朝倉氏にもう一回犯罪をやって欲しい」と励ましとも挑発ともつかぬ発言が飛び出す一幕もあった。そこで、取材の際に、今後の犯罪実行の予定はありますか、と聞いてみたところ、即座に「ない、ない」という答えが帰って来たが、続けて、こうつけ加えてくれた。

「自分でもやるつもりはなくても、気がついたら、そういうことになっちゃうっていうことはありうるよね。ある日、目がさめたら、犯罪者になっちゃったっていうことはね。普通にやってても、むこうさんがこれは犯罪だということもなきにしもあらず、だからね。ボクはこないだ新宿区役所へ伊達くん（不当な配置転換に抗議して区長室へ突入）と行って逮捕された時に、出れると思ったんで早く出たいから本名言ったら、コンピューターシステムで、カタカナで、モノの10分で出て来るんだね、過去の犯歴が。ニットクキンとか、ボク前に酔っぱらって自転車盗んだこともあるんだけど、それも出て来たね…。」

犯罪多発時代といわれる今日、小さな犯罪から大きな犯罪まで、個人の犯罪から企業や権力の犯罪まで、そのスタイルやパターンも多様化して来ているといえるだろう。一方では、センセーショナルな部分や猟奇的な部分だけをクローズアップした『フォーカス』や『フライデー』のような写真雑誌、オーバーヒート気味に追いかけまわして「物語」をデッチ上げてしまう各種メディアのなんと多いことか。本当に、こうした節操がないとしか思えない犯罪関係の報道はいつまでも、なくなることはないのだろうか。

犯罪という現実を通してみると、テレビにしても、活字にしても、写真にしても、各メディアが実に危険なところまで来ていることがわかる。冤罪についても、こうしたマスコミの情報管理の中で、新たに再構築されうることもありかねない。ましてや、いつ、どこで、犯罪にまきこまれるかもしれないし、犯罪者に仕立てあげられるかも知れない時代だ。

やはり、都市論と底流でクロスする「詩」のような犯罪論を書き続ける朝倉喬司氏や、犯罪報道を変える潮流を模索して熱いペンをとる浅野健一氏のような、事件や犯罪を本質的に読みぬこうとする〃硬派〃なライターの活躍と、目の見えなくなっているマスコミに目を開かせる犯罪書が次々に出版される状況をと期待せずにはおられぬ昨今ではある。

〈了〉

大型脱税の佐川急便会長がハワイの高級別荘を買増し派手な大名旅行を

マスコミ虚人列伝 第8回

芸能界の首領として権力志向と名誉欲願望を謳歌する〝裸の王様〟

森繁久弥



●芸能界のゴッドファーザー

森繁久弥について、故向田邦子（作家）は次のように書いている。

≪私は、この人の、一滴胡散臭いところが大好きだ。正義を説き純粋な感動をさそいながら、どこか一パーセント嘘っぱちな、曖昧なところの生じるおもしろさ。ローレンス・オリヴィエも、中村勘三郎も、みんなこの匂いがする……≫

その「胡散臭さ」は芸人にとって大事な資質のひとつであるが、森繁久弥の芸や人となりを語るとき、これほど簡にして要を得た評言はない。

昭和十一年、東宝新劇団で「馬の脚役者」としてスタートを切った森繁久弥も、いまや泣く子も黙る芸能界の〝ゴッドファーザー〟である。映画、演劇、テレビなどあらゆる分野で数々の栄誉に輝き、昨年は中退した早大の名誉学友にも推されている。子分の藤岡琢也や左とん平、竹脇無我、松山英太郎、西郷輝彦、加茂さくら、いしだあゆみ、赤木春恵らが〝森繁一家〟を構成し、その力と威光を背景にドンは芸能人として〝位人臣〟を極めた、といっても過言ではない。

この森繁久弥と森光子に対する明らさまな批判や悪口は、芸能界だけでなくマスコミでも一種のタブーになっているらしい。そんなドンのご機嫌を損ねたり、意に逆らったりした若手タレントやスタッフは、芸能界のひのき舞台から追われることにもなりかねない。

日本の芸能界で、お笑い芸人や喜劇俳優はこれまで不当に低く見られてきた。そのため彼らの多くは、功なり名を遂げるとシリアスな演技を志向する。そして、もっともらしい顔で正義正論を吐き、愛やヒューマニズムについて語り、若者に向って説教をたれるようになる。このような〝風土病〟の症状は、下

大手芸能プロ・芸映でタレント・社員に新興宗教に強制入信させるの噂

積み生活の長かった芸能人ほど顕著に見られるが、森繁久弥もその例外ではない。

たとえばドンは『近ごろの女優』と題する一文で、こんなことをおっしゃるのだ。

≪タレントを見て、こんな女を女房にしたいと思う男が多いというが、それこそフンパンものである。五十年も芸能界で仕事をしていると分かることだが、ほとんどがハシタナイ女どもばかりといってよい。

だいたいが浅知恵のかたまりのような女どもである。初めのうちこそネコをかぶっているが、売れはじめると尊大になり、取巻きにおだてられて独善の権化と化する。衣裳や小道具の担当をアゴで使って、イチャモンをつける。常識もない十代の小娘に大の男がボロクソに振り回される様相は、けっしてテレビにうつらない≫

たしかに、ほとんどのアイドル歌手や若手女優は、森繁久弥がいうような「ハシタナイ女ども」かもしれない。が、それなら若いころのご自分はどうだったのか? と問い返してみたくなる。かつて〝さわり魔〟の異名をとり、そうした「ハシタナイ」女優たちと幾多の浮名を流し、芸能界きっての色豪といわれたのは、ほかならぬ森繁久弥自身ではなかったのか。

他人をあげつらう前に、まず自分の言動を第三者の目でじっくりと見据える。そういう視座のかけらもない。したり顔の説教やら正義正論くらい聞き苦しく、鼻もちならないものはない。森繁久弥の人生論が、いつも〝床屋政談〟に終始するゆえんであろう。

しかし、取巻きにおだてられて「独善の権化」となったドンは、そのことに気づかないらしい。〝さわり魔〟のことをイーデス・ハンソンとの対談で、こう語っている。

「まあ、そこにあれば尻でも乳でも……だけど、ある日やめたんだよ。そしたらね、どうしてさわってくれないのって女優がたくさんいたよ。やめたら気持悪いっていうんだよ。あの人にさわられたら気持悪いけど、ぼくならいいっていうんだ」

世間では、このような自慢話を評して「いい気なもの」という。

●鼻につく裸の王様的自信家ぶり

森繁久弥は若い俳優について、次のようにも書いている。

≪撮影所に行くと肩で風を切って歩いているニューフェイスのお兄ちゃんやおねえちゃんがいる。いずれもハツラツたる美ぼうを惜し気もなくまき散らしている美男美女だ。が、意地の悪いいい方をすれば、芸なしのドしろうとの群れである。監督が手とり足とり口移ししてセリフを、アクションを教えるが、シナリオの人物からほど遠く、しかも風を切って歩いている時のように、いきいきとした生活をカメラの前でよう見せぬ……≫(『アッパさんの人生大学』)

そして、さらに彼らはせりふをきちんと憶えてこない、仕事の時間に遅れるなど、その説教はとどまるところを知らない。

が、そういう森繁久弥もかつては遅刻の常習犯だった。午前八時の撮影開始で、先輩俳優やスタッフが待機しているのに、夕方まで現われないことも珍らしくなかった。そこである日、怒った原節子が提唱し、出演者全員がスタジオの入口に並び、森繁のご出勤を最敬礼で迎えた。この強烈なしっぺ返しに、さすがの森繁も翌日は午前十時ごろに顔を見せたという。

前述のように、森繁久弥は若い女優に〝常識〟がないことを嘆いている。しかし、人生経験の豊かなドンの〝常識〟も、あまり自慢できるものではない。

森繁久弥の代表作『屋根の上のヴァイオリン弾き』は、昭和四十二年に帝劇で初演された。帝政ロシアの寒村に育ち、ユダヤ人なるが故に相次ぐ迫害を受けるテヴィエを主人公にしたミュージカルである。

ところが当時、ドン自身は「たいした作品とは思っていなかった」という。公演は赤字で、再演が八年後という経過からも、初演の不人気がうかがえる。

この初演のとき、外国の老人が通訳を連れて帝劇に森繁久弥を訪ねてきた。相手はアイザック・スターンと名乗り、どうしても会いたいという。もちろん、アイザック・スターンは世界的に著名なユダヤ人のバイオリニストである。ところが森繁は、彼の名前を知らなかったらしい。

しぶしぶ承知した森繁久弥は、かなり待たせて約束の喫茶店に出かけた。すると相手は不快な表情も見せずに、森繁の肩を抱いてその演技に最大級の賛辞を捧げた。

「あなたのために、ぜひバイオリンを弾きたい。場所はどこでも構わない。いちばん都合がいいのは、文化会館でNHKの演奏会があるから、その稽古のときにきてほしい。練習をやめて好きな曲をお聞かせする。もし都合が悪ければ、わたしのホテルでもいい。あなたに、わたしの最高の心を差しあげたい」

しかし、そんな身に余るありがたい申し出を、森繁久弥はこう断っている。

「ご厚志はうれしいが、実はわたしも忙しいので、そのお招きには応じられない」

森繁が後日、日本の音楽家や友人からさんざん罵倒されたことはいうまでもない。あるバイオリニストは、驚くより呆れ返った表情でいった。

「ピカソが君に惚れて、似顔を描いてやるといったのに、そんな男なんて知らんと断ったようなものですな……」

人気絶頂時代の森繁久弥は、舞台や映画で役になり切るよりも、その役を自分に引きつける傾向があった。演技に自信がある俳優の陥りがちな悪癖といえる。

そんな自信家も、テヴィエという老ユダヤ人の役にぶつかって、初めてその悪癖に気づいたらしい。のちに神津善行（作曲家）との対談で、こう語っている。

《……森繁がそこに出てきちゃまずいんですね。テヴィエというものがあそこで生活しているんですから。その生活の中で、テヴィエ風なことがチラッと出る》

●権力志向や名誉欲願望の男

森繁久弥は演技だけでなく、その洒脱な文章や絵にも定評がある。日本文芸家協会の会員で、著書も『森繁自伝』『こじき袋』『アッパさん船長』など数多い。しかし、元芸能評論家の竹中労は『くたばれスター野郎！』の中で『著作と称する何冊かは森繁久弥自身のペンによるものではない』と次のようにはっきり指摘する。

《それは、代作であった。ゴーストライターの名を、はっきり挙げることもワタシはできるが、それをしなくてもよいだろう。ご当人がよくご存知のはずだ。代作で〝文芸家〟になるのは、モノを書く人間をナメたことである……》

森繁久弥の演技は映画『社長シリーズ』や『夫婦善哉』のように、小心で好色なずる賢い庶民の役に扮したときもっとも冴える。しかし、素顔の森繁からは強烈な権力志向と名

誉欲が漂ってくる。

人気が出はじめたころ、森繁久弥はラジオの討論会で「芸術祭だなんていうが、どうしておれに賞をくれないのか」と訴えたこともあった。

昭和三十五年、森繁は二百万円の税金を滞納し、所轄の世田谷税務署に家財道具を差し押さえられたことがある。激怒した森繁は二百万円を持って税務署に乗り込み、署長を呼びつけて「あんたはわたしに個人的な私怨私恨でもあるのか！」とつるし上げた、と『森繁久弥のにんげん望遠鏡』で自慢し、自身でバクロしている。

それから十数年後、その世田谷税務署の一日署長を引き受けた森繁久弥は、次のように挨拶した。

「皆さん、わたしは今日は署長です。わたしは情状酌量が嫌いです。とるものはしっかりとって下さい。しかし、とられるものも人間なれば、人間以外のものになってはいけません」

また、あるときわざとヨレヨレの洋服に下駄履きでNHKに出かけ、守衛に「入れないから帰れ」といわれた。それに腹を立てた森繁久弥はさっさと自宅に帰って、NHKの幹部やプロデューサーが迎えにきても応じなかった。

このような森繁久弥の言動は反骨精神や稚気というよりも、やはり名声を嵩にきた一種のエリート意識と解すべきであろう。

≪わたしは一個の俳優である。銀行家でもなければ、演劇学校の校長でもない。ましてや道徳、宗教の祖でもないし、聖人などではまるでない。なまぐさい俗人である。……大それた看板などをかけられて身動きならぬようになれば、わたしは逆に自滅する。どうも、日本的風習は、すぐになにかに人を〝まつり上げる〟ことだ≫

森繁久弥は『アッパさんの人生大学』にこう書いているが、誰よりも〝まつり上げられる〟ことを願っていたのは、森繁自身だったに違いない。

こうした権力志向や名誉欲は、往々にして〝売名慈善運動〟につながる。かつて森繁久弥も「あゆみの箱」を持ち、政府や厚生省の旗ふりをしている。そのとき、三木のり平はそっぽを向いていった。

「メシが食えずに首をくくった俳優もいるんだ。おれはそんなものに協力しねえよ」

フランスの俳優ジャン・ギャバンは、フランス政府からレジオン・ドヌール勲章を授与された。その際、友人やスタッフが盛大なパーティを企画したが、本人はそれを辞退して、撮影所のセットの中で親しい人とささやかに祝った。この席上、ジャン・ギャバンは次のように挨拶している。

「……役者は勲章をもらっても、まさか、胸にぶら下げて映画に出るわけにはいかないしね。いままでと同じに、私の中身は少しも変っちゃいませんよ」

昭和五十八年十一月、芸能生活五十周年と金婚式、古希を迎えた『森繁久弥さんご夫妻を祝う会』が、東京・新高輪プリンスホテルで開かれた。このパーティでも、森繁はこんな説教をたれている。

「夫婦にはいろんな困難がある。皆さん、困難はチャンスだと思い、真正面からぶつかり人生を送ってほしい」

祝福に駆けつけた約二千人の中には、東京都の鈴木知事や自民党の原田憲参院議員らの姿があった。

〈敬称略〉

株価低迷を続けるにっかつが香港で悪どい手口の不動産売買のウワサが

最近の小劇場演劇集団の群雄割拠戦線を行く！

●匿名鼎談



映画にかわるヤングカルチャー

X 最近の小劇場の芝居は面白くない、とよく耳にしますけど、相変わらずお客さんは入っていますね。

Y これはもう完全に、小劇場がヤングカルチャーとして受けいれられているという証だと思うな。

X かつてこれほど演劇がマスコミに取り上げられたことはなかったと思いますし、それに『新劇』などの古くからの演劇専門誌に加えて、『演劇ぶっく』など新しい雑誌も登場しましたね。

Z いつまで続くかが問題だけどね。

Y 『PSD』の二の舞にならないといいね。(笑)

X あと、雑誌の特集でもよく取りあげられるようになったし、余り中味はないけど『るるぶ』のムック本という形で『東京おもしろ劇団ガイド』なんて出ましたね。

Z　演劇情報誌と名うった『マンスリーＡＧ』は百円で頑張っている。

Y　あれは銀座能楽堂の税金対策という話もありますよ。いくら道楽と言っても、百円の雑誌は今の時代では絶対に無理ですよ。

Z　小劇場がヤングカルチャーと認知された要因は、映画というヤングカルチャーの旗手、特に日本映画が余りにも面白くないからじゃないかな。いくら小劇場が面白くないと言われても、映画よりはずっと面白いですよ。

Y　だから、川本三郎や松田政男のような映画評論家が映画より演劇の方で活躍するようになったりする。

X　しかし、松田政男はあれだけ芝居を観ているのに、演劇専門誌に演劇評を書いていない。というより、原稿依頼が来ない。(笑)

Y　あと、自主映画を撮っている若い人たちも、演劇を観にくるようになった。

X　自主映画の雄、今関あきよしは自分で劇団まで作ってしまった。

Y　今、活躍している劇団の主宰者たちはみんな昔は映画少年だったんですよね。本当は映画を撮りたいんだけど、映画は金がかかるからできない。だから、てっとり早い表現方法として演劇がある、ということで演劇を始めた人が多いんですよ。

Z　ある劇団の主宰者がこう言っていたよ。「学生時代、演劇をやっていた人を軽蔑していたよ。それより、部屋のなかでひとりで8ミリ回していた方がどんなに楽しかったか」って。(笑)

Y　ああ、その話知っていますよ。秘法零番館の竹内銃一郎でしょ。

X　それにしても、演劇ブームから二、三年経ったけど、いわゆる「第三世代」以降のイキのいい劇団が登場しないですね。

Y　年齢的には若くはないけど白井晃と吉沢耕一の「遊◉機械／全自動シアター」とか、飴屋法水の「東京グランギニョル」なんか新しいと思うな。

X　あと、お嬢さん芸の「自転車キンクリート」ぐらい？

Z　「遊◉機械／全自動シアター」は実力派だけど、「東京グランギニョル」は芝居が新しいというよりお客が新しいというか、これまでの演劇ファンでないお客が登場したという感じだね。

X　パンクもいればヘビメタもいるというノリですからね、お客が。

Y　ジュネと福士恵二の「バジ・ワーク・シアター」や高取英の「月蝕歌劇団」なんかも新しい観客を呼んでいるね。

Z　音楽のコンサートと同じ。なんて言うか〈ライブ感覚〉なんだ。

Y　でも、これはいいことだと思うな。それだけ、演劇が一部の者だけのものでなくなって、ポピュラー化したということだから。

Z　そういう意味においては、お客の方が先に「第四世代」が登場したわけだ。(笑)

X　「第三世代」以降が登場しないのとパラレルに、若手の役者が各劇団のなかで全然育っていない。特に、「状況劇場」、「東京乾電池」、山崎哲の「転位・21」、大橋宏の「DA・M」、そして、渡辺えり子の「3〇〇」なんかは悲惨だと思いません？

Z　確かに、みんなお先真っ暗なぐらい、いないな。(笑)

X　と同時に、一時は「女性の時代」なんて言われたけど、女流劇作家の書くものがよく理解できないんですよね。

Y　作品が男には解からない生理的感覚なんだよね。

こまつ座の井上ひさし昭和三部作の第三弾は連合赤軍事件が題材との説

Z　全く、一人よがりな作品が多いね。

X　「NOISE」の如月小春、「岸田事務所＋楽天団」の岸田理生、それに渡辺えり子。みんな難解というか、チンプンカンプン。(笑)だけど、「二兎社」の永井愛の実験的なバランス感覚は買える。

Y　「女性の時代」とは別に「地方の時代」とも言われたよね。今年の夏は実に多くの劇団が上京してきた。広島の「十八米四十糎」、大阪の「南河内万歳一座」、「ちゃかぽこ調書」、「演劇群翔」、名古屋の「少年王者」などと。

X　どこか、面白いのありました？

Z　「ちゃかぽこ調書」が新劇っぽいけど、可能性を感じたね。あとは似たりよったりで……。

Y　東京に比べるとやっぱりレベルがまだまだ落ちますよね。

第一線小劇場の動向

X　ところで、「青い鳥」の木野花が休養宣言しましたね。一年間は芝居に出演しないし、演出もしないと。

Y　長い目で見るならば、彼女の決断は正解なような気がするな。彼女は北村想と同じように感情の起伏が激しい、いわばソウウツの気のある人だから、一服するのは彼女のためにいいと思うな。北村想も「彗星86」を解散してからノビノビしているような話を聞くし……。

Z　『想稿・銀河鉄道の夜』は確かに今までの彼の作品の中では毛色が違うね。

X　と言うより、以前の北村想に戻ったと言うべきじゃないですか。おかげで、一時何処からも台本依頼のお声がかからなかったのが、また来るようになったという話も聞くし……。

Y　休養宣言と言えば、竹内銃一郎もしばらく台本は書かないみたいだね。来年は「斜光社」時代の『夜空のルージュ』の再演を演出するだけで、後はお休みというか、単身外国に研修に行くとかいう噂が飛びかっていますね。

X　『夜空のルージュ』は木場勝己が例の帝劇でやる『レ・ミゼラブル』に出演のため、「第三エロチカ」の有薗芳記が客演するのは確実らしいね。

Z　休養というのは、ある意味では、今年既に行っている人もいるんですよね。「第三舞台」の鴻上尚史は今度は新作だけど、二月の「デジャ・ヴュ'86」と六月の「スワンソングが聴こえる場所」は両方とも旧作二本の焼き直しだったし、「蟷螂」の小松杏里も劇団のワークショップの方はほとんど関与せず、ジァン・ジァンの演出一本だけだものね。

X　「バジ・ワーク・シアター」の『ジル・ド・レ』も作・小松杏里となっているけど、ほとんど書いていないという話らしいね。

Y　困ったもんだ。

X　まあ、くだらない新作を観せられるよりいいけど、少し再演ものが多すぎるよ。しかし、相変わらず忙しい人もいるよね、例えば。

Z　今や子連れの客が必ずいるという「68／71」黒色テントの佐藤信。

X　いったいどうしてあんなに仕事するのかな。スパイラルホールの芸術監督から今度は東急文化村の芸術監督になるはず。

Z　台本は「最後の畜生」を、どこが〝新〟なのか解からない「新・加藤健一事務所」に書いて、演出を次から次と4～5本。働き過ぎという気がするね。「第三エロチカ」の川村毅が書いた『ラスト・アジア』なんかえらく大変な芝居という気がするが。

Y　その『ラスト・アジア』のプロデューサー

野々村文宏が女性ライターに"俺と寝れば仕事をやる"の珍妙なクドキ説

をしている流山児祥も相変わらずタフだよ。11月には「第三次演劇団」を旗揚げして、全国を旅するというから元気だ。

X　常に男優は客演に頼っている生田萬の「ブリキの自発団」も、またスズナリ長期公演のあと旅に出る。

Z　あの年代は地方にもネームバリューがあるから旅が出来るけど、「秘法零番館」の旅にしろ相当な強行軍だな。それにひきかえ、若い劇団は旅をしないねえ。

X　そんなことはないみたいですよ。坂手洋二の「燐光群」は今度、名古屋・京都・大阪と回るし。

Y　「第三舞台」も来年は積極的に回ると言ってるよ。

X　あと、「夢の遊眠社」は外国まで出張するという噂だけど。もし本当だとしたら凄いね。第二の「天井棧敷」になれるかだ。

Y　それを言うなら、第二の「四季」になれるかな、じゃないですか。(笑)既に制作部だけで十人近くいるらしいし、来年は三月に青山劇場だもの。まあ、そのために本多劇場の十二月公演を半分キャンセルして、若手公演に切替えてしまったけど。

X　それは結局のところ、以前から問題になっていた劇場のスケジュール編成の問題が露呈したという感じですね。

Z　そうだなあ。

X　本多劇場や紀伊國屋は三月ごろに翌年のスケジュールを全部決めちゃうなんての無謀ですよね。十二月の芝居にいたっては、つまり一年九カ月前ですから、これは異常としか言いようがないですよ。

Z　映画の世界にしろ、TVにしろこんなことはありえないからな。

X　この「夢の遊眠社」の本多劇場半分キャンセルの話は、他の劇団関係者を相当激怒させたようですよ。

Z　そうらしいね。(笑)

X　十二月の本多では「流山児祥事務所」は『悪魔のいるクリスマス』をやりたかったみたいだし、もたいまさこが辞めた「3〇〇」なんか小屋がなかったから、武蔵関のブレヒトの芝居小屋だもんね。

Y　「第三舞台」のサンシャイン劇場公演も本多劇場が使えなかったからだ。これなんか、玉砕公演なんて言われているからね。

Z　しかし、私はそうは思えないな。鴻上尚史というのは割と商売人でサンシャインでやることによって、西武や松竹と仲よくしたいという思惑がチラチラしてならないんだが。

X　それはあるかもしれませんね。もともと「第三舞台」は早稲田出身で地盤は西武。

Z　鴻上尚史の芝居は北村想と並んで、これからの商業演劇の下地を作っているような傾向があるからね。よって、西武や松竹とこの際お近づきになりたいというのは、うまい戦略といえるね。

Y　来年は映画も撮るというのも確実らしいし。

Z　まあ、それまで劇団が玉砕していなければいいけどね。(笑)

問題は劇場主導にあり!?

X　だけど、どうしてこうも多くの企業が小劇場に関わりだしたのかなあ。

Y　西武は銀座にセゾン劇場、東急は渋谷に文化村、そして、東宝は野田秀樹を『十二夜』の演出に起用するし、東宝や松竹の若い演劇関係者たちは実にこまめに小劇場演劇を観ていますしね。

Z それだけ現在の小劇場演劇が銭になるし、企業イメージアップにつながるということなのかもしれないよ。鴻上尚史ばかりでなく、流山児祥など他の主宰者たちも逆に企業とくっつきたがっているのは事実だよ。

X そして、またまた劇場がいっぱい出来ますね。

Y 新宿のモリエールが新装オープンしたのに続いて、今、話にのぼった銀座のセゾン劇場、渋谷の東急文化村には七百人規模の劇場、高田馬場にはシェークスピア劇場。

X 池袋には東京都が文化会館を建て、そのなかに演劇専用の小劇場を設けるという話もあります。

Z まさに、劇場過多になりそうだね。

Y でも、それはそれでいいんじゃないですか。そうなれば、「夢の遊眠社」の本多劇場半月キャンセルみたいなこともなくなるかもしれないし、「オンシアター自由劇場」のように博品館劇場で二カ月のロングランすることができるようになる。

X だけど、自由劇場はいつまで『上海バンスキング』の遺産で芝居を続けるのかな。

Z だから今年アトリエで『家鴨列車』と『WORK NO1』を演ったわけだ。

Y それなりにやっぱりマズイと思っているんじゃないの。

X でも来年は劇団ユニットで『上海バンスキング』を映画化するでしょう。東京・大阪と一館ずつで公開という噂だけど、すると博品館になるのかな。

Z 自由劇場は博品館劇場と繋がっているからね。今の小劇場演劇というのは劇場の方が劇団よりヘゲモニーが強いんだよね。

Y だから、各劇団は劇場に頭が上がらない。演りたいときに芝居ができない。

Z 劇場過多はその図式を変えるかもしれないよ。

Y と同時に、ロクに台本が出来ていないにもかかわらず芝居をしなくてはならないという図式も変えなくちゃいけないですよね。

X 「こまつ座」なんて台本ができるのはいつも本番二週間前。他の劇団だって新作のときはそう大差ないはず。

Z これが演劇界の大きな欠点だよ、と言われて久しいけどね。

Y 川村毅や北村想は作家というか、稽古開始までには台本をちゃんと上げてくるけど、あとは井上ひさしと似たりよったり。

X 映画なんか、どんな映画だろうと台本は初稿、次稿、最終稿と撮影前に練り直すのに、芝居にはそれがない。

Y 少し甘いんじゃないのかな、考えが。

Z だから、未だにアマチュアだなんて、何処からか言われるんだよ。

個人主義時代の落とし穴

X 最近になって、評論家や昔から芝居を観ている人に、今の芝居は以前のコピーで全然新鮮味がないよ、という言葉が聞かれるようになりましたしね。

Z 演っている本人たちはおそらく否定するだろうし、実際にそう思ってもいないと思うけど、確かに現在の芝居はオリジナリティが欠如していると思うな。

Y つまり、時代はくりかえす、ということですよね。

Z そうかもしれない。鴻上尚史はつかこうへいであり、川村毅は唐十郎であり、小松杏里は寺山修司であり、また、大橋宏は鈴木忠志といったように。これらの先人のやったことを無意識のうちに、今の芝居はコピーしているにすぎない、と考えるときがある。まだオリジナリティが確立していないんだ。

X　しかし、それはある意味では仕方がないことだと思いませんか。いくら劇場がよくなって、設備がよくなったにしろ、演劇そのものに無限の広がりがあるとは思えませんから。

Z　そう、それが今の世代のもっている代表的な冷めた考えであり、また、演劇だけが全てじゃないんだ、という固執しない姿勢の表れだと思うな。

Y　同じようなことは、単に主宰者ばかりでなく、役者も同じですよね。だから、今は簡単に他の劇団に客演したり、プロデュース公演、映画・TVに出演してしまう。劇団ナショナリズムの強かった昔の新劇などでは考えられなかったことだ。

Z　それが現在の演劇人のもっている柔軟な姿勢なんだよね。それがいいか悪いか解からないが、劇団という組織より個人を重んじている現代の風潮そのものなんだよ。

Y　演劇も個人主義の時代ということだ。

X　しかしながら、その個人主義を反映すべきプロデュース公演が余りうまくいっているとは思えませんね。

Z　今の日本ではまだ小劇場において、プロデュース公演というのは難しいよ。いくつかのプロデュース事務所はありますが、真のプロデューサーは皆無だし、アメリカのようにお金持ちの個人出資者を募るバッカーズ・システムができていないし、演劇に理解あるスポンサーもいないのが現実だよ。いてもホンの一握りだしね。

Y　それに、劇場側も小劇場演劇のプロデュース公演を積極的に支援しませんしね。

Z　若者を中心に認知されている演劇だけど、世間的にはまだまだマイナーな世界なんだよ。

X　だから、少しマスコミにチヤホヤされると本業を忘れて、劇団の主宰者たちは雑誌の原稿書きに精をだす。一方、役者の方も映画・TVドラマやCMに出すぎて、舞台では稽古不足がありありと観えたりする。

Y　自分たちの土壌をなおざりにしているね。

Z　もう一度、劇団を旗揚げしたころの初心に戻るべきだよ。

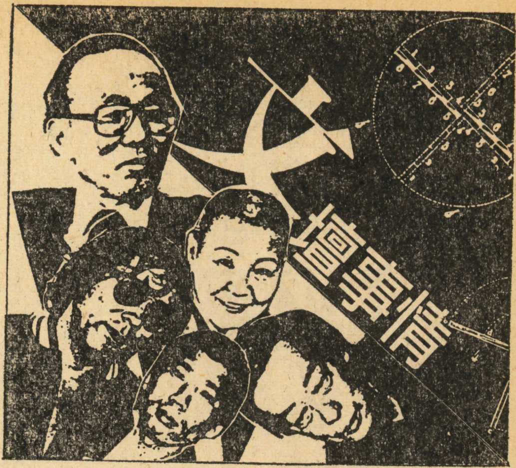
〈了〉

本番映画つぶしをはかる映倫に代々木忠が従来通り撮り続けると挑戦状

だ。こういうオンナノコの話には、必ずおふくろさんが出てくる。美空ひばりも例外でなかった。アイドルとナニワブシの間は直ぐに埋められてしまう。ワッペーちゃんの世紀末は、潜在的なオトコの被害者意識が、世間の横町で織り成す緩急を見事につなげている。

二十年前に、みんな農村から大都市に出てきた。二十年たって、男らしさや男の生きがいの重荷に耐えられない男が激増してきた。こういう男たちが、単身赴任に飛ばされたり、派遣出向で大メーカーの子会社にバラまかれている。北海道や四国・九州は失業率三〜四%になった。欧米並みになる日も近いという。新宿や渋谷を歩いていて、アジア・アラブの人間が多いのにおどろく。バーや喫茶店のボーイさんに、茶色の肌、とび色の眼が目立つ。まさに「国際国家日本」だ。十万円もらえば故郷の家族・親類十人以上は暮らせるよ、とマニラからきた若い男は言う。A・A諸国から東京にくる出稼ぎが増えて、東京の中年サラリーマンが日本の地方に単身赴任していく。まさに血の入れかえである。

そこで、いろんな小説のタネが生れる。富士銀行の山形支店長。ジャスコで万引した婦人服を毎夜せっせとスナックのママのところに運ぶ。このやるせなさ。国鉄の管理職の男が酔って新幹線の中を、小便して歩いちゃう。三十代の精神科病院の医長が、帰宅したらおくさんが酔っぱらっておそく帰ってきたので、文句を言って、なぐったりけったり、翌朝おくさんは内臓破裂で死んでいた。自衛隊の落下傘部隊の隊員が、習いおぼえた技術をいかして、ビルの谷間をとびこえとびこえ盗みを働こうとしてつかまった。どれもこれも面白くてたまらぬタネである。他人の不幸は楽しくこっけいだ。タネはいくらでも出来る。中年サラリーマンがタネをまけば、ノンフィクション作家がほじくって小説にする。昔、近松も西鶴も南北も同じことをした。今近松や今西鶴が行動派として働いている。そこへ行くと、島田雅彦の『ドンナ・アンナ』や近藤紘一の『佛陀を買う』のほうが頭をつかって書いているのかもしれない。いま、小説が面白い。森常治の『文学の記号的空間』(いや記号の文学的空間かな?どっちでもいい)は、「文学らしさ」を追究して一冊の本になった。御先祖の鴎外は、小説から史伝に転向したが、ジョージの仕事をみて苦笑しているだろう。経済不況、株の暴落をひかえて、いま、小説がますます面白いよ。　(世紀末通りマント)



立松和平の『世紀末通りの人びと』(毎日新聞社)は面白い。沢木耕太郎の『人の砂漠』や、藤原新也の『東京漂流』に通じる面白さである。それはまた『フライデー』や『フォーカス』の魅力と相通じる。『エンマ』もついに週刊になり、もうひとつふたつ、フォト・ウイークリー・マガジンが名乗りをあげる。『文藝春秋』十月号も、藤尾で売れたのより、有希子で売れたのである。いや、両方の相乗効果であろう。『エンマ』週刊第一号も有希子大特集

文芸記者日記



●秋の文学賞シーズンのさきがけは、中央公論社主催の各賞で、九月八日に女流文学賞、同じく十八日には谷崎潤一郎賞が発表された。

女流文学賞にきまったのは、杉本苑子『穢土（えど）荘厳』（文藝春秋）。

選考委員の佐伯彰一は「奈良時代の文化的背景がよく出ていて楽しませる。物語がいきいき伝わってくる。満場一致だった」と選評した。

もっとも候補になったのは、受賞作のほかは、干刈あがた『しずかにわたすこがねのゆびわ』（福武書店）と三枝和子『曼珠沙華燃ゆ』（中央公論社）のわずかに二作。

女流作家の作品が不作だったのか、というとそうでもなく、この賞もことしで二十五回、一回で二作ということもあるから計二十九人の女流に賞を出しており（うち曽野綾子は辞退）つまり目ぼしい作家には、ほとんど賞を出してしまっている、というわけである。

●一方の谷崎潤一郎賞は▽富岡多恵子『水獣』▽阪田寛夫『まどさん』▽小林信彦『ぼくたちの好きな戦争』（以上新潮社）▽日野啓三『砂丘が動くように』（中央公論社）のうち、日野の作品が決まった。

谷崎賞の発表には、なぜか二人の選考委員が現れることになっており、ことしも丹羽文雄、丸谷才一の両委員が現れた。丹羽「君が言えよ」、丸谷「いえ、ぼくはお伴ですよ」とゆずり合いのち、丸谷が「(日野作品は)いまの日常的な日本文学を超えた形而上学的、神秘的なものを書いている。社会の中に個人があり、個人の中に魂がある、というところをつかまえようとした作品で、文章も優雅で質が高いと語った。

丹羽は「これまで私小説を書いていた人だが『夢の島』（前回候補作）を見た時、これは大きな小説の書ける人だな、と感心した。こんどの小説はあの人の気力で読ませる」と語った。

●直木賞作家、志茂田景樹の百冊記念パーティが、九月十八日行なわれた。

この種の記念会はエンタテインメント作家には多く、時折行なわれるが、変わっているのは、場所が東京・麻布十番のディスコ・バー「マハラジャ」だったこと。

百人をはるかに越える編集者、作家が集まった。

注目を集めたのは、志茂田のパフォーマンス。

最初は本人の後姿のパネル人形を抱いて現れ、アラビアのロレンス風に〝二人で〟踊ってみせた。ついでに温泉芸者のメロディに合わせて、田舎芸者に扮して現れ、一枚ずつストリップ。志茂田プロダクションと聚楽共催というのは、モンローに化けて、口をパクパクあけてみせるやつ。顔のホクロまでそっくりに作って観客？　をうならせていた。

当人にとっては「それどころじゃない」んだろうけれど、やたらと話を面白くしてくれたのが、名高達郎クンとその婚約者だった西尾かおるさんってお嬢さん。教会での挙式リハーサルから、披露宴の案内状の発送、会場での席順まで、すべて整ったところでの婚約解消はまさに前代未聞。芸能界屈指のプレイボーイといわれてきた名高達郎は、全くのカタなしって恰好で披露宴会場となる筈だった帝国ホテルで記者会見したものの、婚約解消の理由について「お答えできません」の一点張り。

婚約者だった元ミスニッポンの24歳は、取材陣に押しまくられて会見を約束したが、再三エスケープ。かわって登場した後見人とかいう英語学院の院長夫妻は、

「本人たちは愛し合っているが、双方の家や事務所の思惑が噛み合わなくて……」

などと訳のわからん説明の末に「ほかにもっと深い理由があるかも……」なんてマスコミの喜びそうなリップサービスも試みるって具合だったから、怪情報と憶測が入り乱れて、「長持ちするネタになった」って寸法だったのである。

「お付合いをはじめ、結婚の準備が進むにしたがって、芸能人の名高さんについていけないと感じた」というのがお嬢さんの表向きの理由だったが、なにかと話題の色男ってことは先刻承知の筈。それにこのお嬢さん、世間知らずの深窓の令嬢ってわけでもなく、結構、派手に青春をエンジョイしてたらしい節もチラホラ。それでも乳離れしてないってのは事実のようで、母親ってのが、なかなかの強者で、娘はひっぱりまわされてたとか。

結局のところ、どたん場で袖にされたのは名高達郎の方で、とんだ三枚目って図。

ならば「お答えできません」などといっていないで「アホな話で」と真相でもぶちまけたら



プレイボーイ・名高達郎の挫折

よさそうなものだが、婚約解消をめぐる帝国ホテルへの損害賠償や、結婚衣裳、引出ものなどのキャンセル料などの支払いをめぐってのゴタゴタを考慮すれば、口を閉ざすにしくはないって計算。婚約破棄の慰謝料などで話がこじれて、裁判沙汰ともなれば、余計なことをいっちまっては大変って寸法なのである。

まァどっちに転んでも、35歳にもなった男が、結婚相手を選んだにしては、あまりにもおそまつ。知恵遅れのプレイボーイってそしりはまぬがれないが、色事師をきどっていた名高が実はホモだったとか、いやいや極めつけのひどい早漏で愛想をつかされたのだ……とか、お嬢さんの方が〃小野小町〃だったのではなんて話にも発展。結婚って段取りには、お互いの愛情の確認や生活の見きわめが第一だろうに、ウェディングケーキの高さや、花嫁衣裳の豪華さなんて方ばっかりに気がいってしまったという虚飾の報いって話。

それにひきかえ、かつての虚像を脱して人間をとりもどした天地真理の結婚披露宴は、心あたたまるものだった。そのあたりを芸能ジャーナリズムも敏感にキャッチしていたのは、うれしい話だったのである。

芸能・ゴシップ



●吉永小百合が田中絹代の半生を演じる『映画女優』（市川崑監督）は、彼女にとって九十九本目の映画である。そこで各社は次の百本目の記念作品を狙って熾烈なサユリ争奪戦を展開しているが、真っ先に名乗りをあげたのが、数年前から映画製作に狂奔するフジテレビだ。東映と組んで、かつてヒットした戦記映画『きけわだつみの声』のリメーク版を企画している。先ごろ〝不倫〟と騒がれた岡田裕介プロデューサーは、そこに割り込みを図ったらしい。

「彼はこれまで吉永小百合の作品を数多く手がけたし、彼女の信頼も厚い。だけど、あの不倫騒動で動きにくくなったな。ひょっとすると、あれはライバル会社のプロデューサーがリークしたんじゃないかね」（あの映画プロデューサー）

まさかと思うが、百鬼夜行の映画界を考えるとあり得ないことではない。

●十月一日、森進一と森昌子の結婚式が日本テレビで生中継された。当初、テレビ朝日も挙式と披露宴の独占中継を狙っていた。しかし、森音楽事務所側の「独占は金銭的に疑惑を持たれるし、各局とも公平にしたい」という意向で断念し、当日はアニメ映画『幸福物語』の放送にふり替えた。テレビ朝日は「二局が同じ映像を流しているのは、視聴者にも申しわけない。テレビ局の良識でとりやめました」と話しているが、よくぞ〝良識〟なんておっしゃる。昨年六月、松田聖子と神田正輝の結婚式を長時間にわたって放送し、世間のヒンシュクを買ったのは、どこの局でしたっけ？

●親の七光りで芸能界にデビューしたものの演技よりも、男遊びや大麻のベンキョウに忙しかった勝新太郎の長女・奥村真粧美が十月十八日、北海道札幌市の大山敏行さんという青年実業家と結婚する。おなじみの青年実業家といっても、新郎は新婦と同じ二十三歳のこれまた親の七光り二代目。父親同士が友人だったことから知り合い、とんとん拍子に結婚話がまとまったとか。ただし、ある芸能プロの社長によると「父親同士が友人？早い話が大山さんは、多額の負債を抱えて首が回らない勝新太郎のスポンサーの一人ですよ」というから、つまりは〝政略結婚〟〝人身御供〟の匂いがしないでもない。それはともかく、真粧美は結婚を機に芸能界を引退するという。その話を聞いた民放テレビの某プロデューサーが、ホッと胸を撫で下ろしてこんな祝辞を贈る。

「いや、よかったよ。勝さんや中村玉緒さんに『うちの娘を頼む』といわれたら、むげに断われませんからね。ついでにダメ息子のほうも引退してくれたら、なおさらめでたいんだけど……」

世の中はどっこい、そう都合よくいくものではありません。

●名高達郎の婚約解消をめぐって、いま芸能マスコミは名高の「ホモ説」や元ミス日本の「プレイガール説」など、さまざまな怪情報が飛びかっている。しかし、前フィアンセ側に近い関係者によって、婚約解消の要因はそんな問題ではないという。

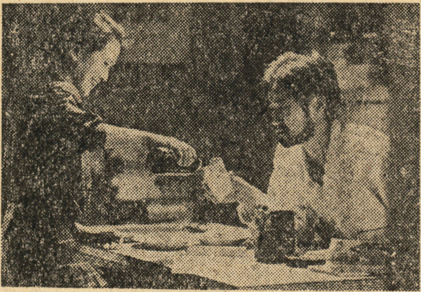
「カタギ同士のロマンスでも、いざ結婚となって両家の利害や思惑が微妙にからみ、一度や二度の衝突も珍らしくない。あの二人の場合は、それにプロダクションの商品論理が加味されたわけですから、なかなかうまくまとまりませんよ」

Written by 塩田時敏 Tokitoshi Shiota
江森盛夫 Morio Emori

CINEMA

〈監督〉をめぐるドラマ

時計（倉本聰監督）



言わずと知れた有名シナリオ・ライター倉本聰の初監督作品だ。ところどころに映像的なセンスの良さを見せて、シナリオ・ライターが撮った映画にしては良く出来ている。だが、シナリオ・ライターが書いた脚本にしてはちょっとヒドイ。

スケートの特訓を受ける娘（中嶋朋子）と、その母（いしだあゆみ）の5年間のドラマを主軸に、その記録を映画にしようとする映画監督（永島敏行）や、離婚した両親と中嶋のドラマやらなにやら、あれも入れたいこれも入れたいで、まとまりがつかなくなるという脚本家＝初演出の弊害が出たようだ。

本来狙ったのは〃時〃をめぐるドラマなのだろうが、それはともかく、この映画を私なりにとらえかえしてみると、これは〃監督〃をめぐるドラマである。この映画自体が中嶋朋子の数年間の成長を追いながら撮り進められているだけに、映画中で永島監督が撮ろうとしている映画と妙にダブってくる。だが、この永島監督が実に身勝手なダメな男として描かれている。いしだに数百万のフィルム代をせびったあげく、昔の恋人とヨリを戻したり、そのくせ、何故映画は長嶋監督引退時のあの感動を越えられないのかと、いっちょ前に悩んだりする。それに対し、いしだの別れた亭主、アイスホッケーの監督渡哲也は実にかっこいいのだ。〈映画〉監督より〈ホッケー〉監督。この認識は今の時代にあって、映画こそ最高のエンターテイメントだと信じます、とか何とか脳天気に思っているよりずっと正しい認識だと思う。そして、このひかえめな姿勢の中に、いやまだまだ映画だってこんな凄い感動がやれるんですぜ、と「時計」本編自体の感動がしめくくって映画の意地を示す、はずだったのだけど――。

まあ、最終目標にまでは到達していないが、多くを望まなければ、永島敏行扮する監督は誰がモデルか？　と想像するだけでも、見て損はない。

CINEMA

着くずした魅力が横溢

めぞん一刻（澤井信一郎）

原作のマンガを読んでいないから、スッと入っていけたせいもあるのか、今までの澤井四作品の中では一番いい。むろん、作品の完成度という点からいけば他にいいものがあると思うが、映画は完成度だけではあるまい。

この映画が面白いのは、澤井演出の崩れ方だ。めぞん一刻というボロ・アパート自体が、崩れかけたあばら屋ながら味があるのと同様に、澤井監督ほど徹底した力量のある演出家は、少しばかり破綻があった方が面白いのだ。洋服でいうなら着くずした感じだ。

どの辺にその面白さがあるかというと、まず題材が（澤井作品）らしくない。あるいは、池の水面の向うに人物をロングでとらえっぱなしのところに、突然仕掛人形のようなものが水面を横切るのがいい。相米のようではないか。突然ミュージカルが始まるのもいい。



それでいて、軽い表面の裏に生生しい性の匂いがたちこめているのが、やはり澤井信一郎だ。あのイヤミな石原真理子が酔っぱらうシーンの何と見事な演出。

CINEMA

愛の落下重力を測定する

沙耶のいる透視図(和泉聖治)

足かけ4年にわたってオクラになっていた「沙耶のいる透視図」が、ついに公開される。

ビニ本の世界を背景にした狂気の愛の世界だが、「魔女卵」という躁映画の傑作を撮っている和泉聖治監督の、もう一方の特質である鬱映画の秀作だ。

かなり重い作品ではあるが、実に透明感のある映画で、撮影佐々木原保志、照明金沢正夫の力も大きい。脚本石井隆のモチーフでもある堕ちてゆく愛の意志を、見事に映像化したラスト・シーンは特筆されるべき名シーンだ。これはそれぞれの愛の落下重力を測定する映画として、観客につきつけられた映画である。（塩）



PLAY

走り続けて完全燃焼

100m決勝(銀幕少年王)

機械音に近いセッパつまったリズムを刻む音響に促がされて、6人のランナーが走り出す。スタートし、ダッシュし、加速させつつ横にずれ、入れ替り、様々なフォーメーションのパターンがくり返され、汗が飛び全員客を忘れて無我夢中のランナーズハイの恍惚状態に陥り……。銀幕少年王公演「100m決勝」(作・演出＝内田栄一)は全編ほとんどが疾走シーンに終始するステキなパフォーマンスだった。おどろいたのは〝海底大冒険クジライルカ隊長〟に扮する美里が、他の5人が困パイしてダウンした直後に、縄トビを取り出して、息も切らずに2重回しを飛び続けたことで、倒れ伏した男共を踏みつける感じで独り飛び続ける姿のタフな美しさは、「エイリアン2」のシーガニー・ウィーバーを思い出したほどだ。

色々楽しい〝お芝居〟も混じるが、走り続けてエネルギーを完全燃焼させた役者たちは自意識をそぎ落としてしまっていて、裸の各々の存在自体が露呈して無類のリアリティを生みだした舞台になった。

PLAY

見定めておきたい力業

白瀬中尉の南極探検(手の会)

別役実の「白瀬中尉の南極探険」(演出＝末木利文・手の会公演)はじわじわと観る者をからめとって、遂には別役的魔圏に連れ去る荒業に成功した力作だ。背景は明治43年に白瀬中尉が南極探険に使った開南丸のシルエット、下手にここでも1本の電信柱。そこに中村伸郎を先頭に楠侑子、三谷昇、高木均がぞろぞろ出て来て、こわれた椅子を拾うかどうかというお馴染みの会話が始まって……。中村と別役の相性は定説が定まっているが、後から出る林昭夫、豊川潤を含めて今度の作品ほど、別役の台詞が役者の生理と化して、密度の濃いアンサンブルを醸成したのは初めてではないだろうか。彼等が白瀬中尉とどう係りがあるのか、最後には全員が白瀬だという話になって了うのだが、極端な単純化の果ての途方もないタアイの無さが底のしれないリアリティを感じさせるこの舞台では、解釈は次の楽しみで、役者を自分の文体の手足にしてしまった、別役の力業を見定めておきたい。

劇団キラー・クイーン「イヴニング・ライズ」(作・演出＝菅原正志)、戦争のシミュレーションゲームが、ホンモノの臨場感を感じさせる、鋭くて、才気カン発な新しい才能(作・演出)の出現だ。

自転車キンクリート「MIDNIGHT UPRIGHT うしみつ時のピアノ」(作＝飯島早苗・演出＝鈴木裕美)ジァン・ジァンをこんなに広々と使ってみせたのに感心した。ラストの立派な船のセットを、ホンの一瞬だけ見せた、オシャレな才気に脱帽。（江）

Music & Concert 音楽コンサート情報コーナー

Written by 田家秀樹 *Hideki Take*
森野眞人 *Masato Morino*

LIVE

神宮球場処女コンサート

井上陽水&安全地帯(神宮球場)他

遅ればせながら8月後半の野外イベントの話から。8月20、21日の陽水・安全地帯のジョイント、30日の大沢誉志幸、31日の中村あゆみと、神宮球場に集中した格好。コンサートに使用されるのは、神宮球場開設以来という〝処女コンサートになった〞陽水・安全地帯の3時間のジョイントは、たとえていえば〝知性の陽水と魔性の玉置〞。ま、これは玉置をほめすぎになるが、でも、陽水の濁りのない堂々とした歌いっぷりと、どこかに水商売的な匂いを漂わせる玉置浩二の声の対比が、面白かった。

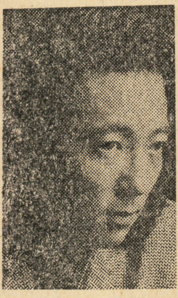
神宮球場は、独特の雰囲気があるのだろう。陽水は、顔がひきつる程緊張していたし、大沢誉志幸は、緊張と疲労で倒れ、アンコールができなかった。その中ではステージでスカートをはくのは初めてという中村あゆみのコンサートが、ひたむきで良かった。高校生の男の子が多いのに、アンコールで一斉にライターの灯が揺れたのが演出っぽくなくほほえましかった。



LIVE

R&B色が濃くなった

佐野元春東京マンスリー(日本青年館)



4月から日本青年館で、続けられていた佐野元春の〝東京マンスリー〞コンサートが、9月25日、第6回を終了した。当初の予定通り、マンスリーはこれで終わり、10月29日からは、従来の大ホール規模の全国ツアーに出る。毎回コンサートの曲目を変えたり、アレンジを変えたりする試みは、パターン化した盛り上がりに飽きたらなくなったアーティスト側の実験といっても良かった。1200人しか入らない会場だけに、チケットの申込みに電話回線がパンクするというハプニングもあったりした。

6回目のこの日は、11月に発売されるアルバムからの何曲かも聞かせてくれたが、以前より、益々R&B色を加え、そして、ジャズに近くなってきたような気がした。

全国70カ所に及ぶツアーは「カフェ・ボヘミア・ミーティング・ツアー」と題されている、ボヘミアン達の集い、そんな意味なのかもしれない。

DISK

風に吹かれる流れ者

旅空夜空—熱き心に(小林旭)

思いがけない中味のアルバムを一枚。小林旭の「旅空夜空—熱き心に」が、意外な発見という感じだった。ネスカフェのCMソングで小林旭の歌う「熱き心に」が、大滝詠一の作だということは知っていたが、このアルバムは、その路線を延長した上に作られている。大滝詠一、吉田拓郎、鈴木キサブロー、大野克夫、宇崎竜童が曲を書き、10曲中7曲、阿久悠が、残りを岡本おさみと、松本隆が手がけている。

ひょうひょうとしている。演歌特有のドロッとした淀みや、べたついた感傷や、飲み屋の片すみの溜息といった感じが全くなく流れ者をしている。あの、日活の一連の〝渡り鳥シリーズ〞のような荒唐無稽さもなくなり、胸に何かを貯めこんだまま旅の風に吹かれているという感じがいい。B面の何曲かは考え過ぎだったり、多少あざとかったりするものの、A面の、無言で地平線の彼方に消えていく感じが、アメリカのホーボー・ソングを思わせる。ホーボーというのは、30年代のアメリカに生まれた放浪者たちのことだ。何よりも都会の暮らしに破れ、傷ついて、故郷に帰っていく、なんていうパターンがないのが掘り出しものでした。でも、演奏ミュージシャンが書いてないのが、歌謡曲だね。

DISK

J・レノンの死んだ年齢

9月の半ばにニューヨークに行った。神宮球場を終えて3日後に歌入れに発った中村あゆみの取材が主な目的だったのだが、やはり同じ時にシオンがレコーディングしていたり、某超大物女性シンガー・ソング・ライターが、これも大物男性シンガー・ソング・ライターのプロデュースでトラック・ダウンを行っていたり、NYは、日本人アーティストの競いあいの場となっていた。

中村あゆみの5曲入りミニ・アルバムの歌入れは、マンハッタンのレコード・プラントというスタジオ。その名前は知っていたのだが、ロビーにかかったゴールデン・アルバムを見て立ち尽してしまった。何と、ジョン・レノンの「イマジン」「ウォールズブリッジス」「マインド・ゲーム」を録ったスタジオだった。おまけにエンジニアのトムは、ジョンが射殺される2分前に〝じゃ、また明日〟と握手して別れた男だった。「ダブル・ファンタジー」もこのスタジオだった。「12月8日のことを…」とトムに聞くと「うん、ジョンは、そこに座っていて……スタジオを出た2分後……」というのだ。泣きそうになった。40で死んだジョンが、死ぬ2分前までいたスタジオで、ボクは30代の最後の何日かを過ごし、40になった。（田）

DISK

久々のド歌謡曲に感動

王様と私（坪倉伊織）

一枚のクソのようなレコードから話は爆発的に発展する。「王様と私」を唄うのは坪倉伊織というテイチクの新人歌手である。JOTXの「メガロポリス歌謡祭」の選抜番組の新人賞部門で、段田男と並んでノミネートされていた。TXで一～二回「露出」（業界用語で、TV・雑誌他の媒体に出演し、顔を売る事）した際の異常な衣裳が印象的だった。

〽ためらわないでイヤイヤ…
両手ついて犬になれと
言って強い声で

といったSM調の下品な歌で、かつての山本リンダや大信田礼子あたりのキワモノ路線を感じさせる。スカートのフロント・ジッパーをギリギリまで開いたジャケ写はまだ大人しい方の衣裳で、TX出演時などは、斜めにカットしたミニスカに乳房も見えようという穴だらけの上着といった今時珍しいとんでもない恰好であった。



A・B面いずれも詞なかにし礼曲三木たかしで、まるで70年代初期のパターンである。ド歌謡ポップス丸出しのB面「男なら女なら」は出色。いずれ値打が出るゾ。

DISK

段田男と全共闘運動

話はこれからだ。今、レコード屋でB級アイドルの棚を漁ってごらんなさい。驚くべき事にどいつもこいつも秋元康の作詞だから。考えてみればタモリ・たけしだって、CX横沢班以外じゃまともに使いこなせもしない。所謂TVなんてバカが造ってんだ。しかしそのバカが造った物が世の中でいちばん影響力を有しているのだという事を心の底から認識しておく必要がある。めっきり露出頻度が高くなった最近の段田男を見ていると、こいつも実は最初から誰かが仕組んでたんじゃないかとすら勘ぐってしまうのである。

歌謡曲を、権威ある「音楽雑誌」風に、演歌を100年間聴き込んだオッサンが「音楽的」に評価してみせても不毛にしか過ぎぬ。もはやそういう時代に来ちゃってる。

今、筆者の周囲の30歳前後の同業者が急に真顔になって言う。「俺ちゃんと言いたい事を発言した方がいいと思うんだ、今」。申し合わせたように。しかしお茶の水駅前でハンドマイクでガナれば三日後に神田がカルチェラタンになるような時代でもないのだ。その後に必ず「でもどこで？（発言するのか）」という疑問符がついて回る。「新人類」等という呆けたコトバを発明したオジサン達、貴方がたはまだ気付かないですか？（思想が浅いから「敗北」したんだぜ）。（森）

Weekly Magazine Review

●週刊誌記者匿名座談会●

週刊誌の第1線現場記者が知られざるマスコミの内幕と虚々実々の報道合戦の舞台裏を語り分析論評す！



▼『文藝春秋』二大仕掛け路線のウラ

A　月刊『文藝春秋』十月号が久方ぶりにマスコミ仕掛け路線を大々的に展開したね。藤尾正行の「〃放言大臣〃大いに吠える」と「岡田有希子の日記」の二本が雑誌発売前からマスコミにとりあげられ、話題を呼んだ。文春としては異例の五万部増刷体制を取ったわけだが……。

B　文春にマスコミ仕掛け路線を取り入れた田中健五常務ラインにつながる堤堯編集長―花田紀凱編集次長コンビの発想だというのは十分にうなづけるところだが、十日発売の『文藝春秋』の〃刷り出し〃が出た一日直後に政府中枢に流れたというルートが問題になっているが……。

C　常識的に考えれば、刷り出しを入手できる文春編集者及び文春幹部を通じて誰かにという線だろう。その点でもっとも疑われて仕方がない立場にいるのが、八月二十一日赤坂プリンスの一室で藤尾文部大臣に〃放言〃させる場をセッティングした評論家の屋山太郎だろう。外部の人間だけど責任上、ゲラもしくは刷り出しを見ても少しもおかしくない

立場にあるわけだしね。

D おまけに屋山太郎は中曽根首相にも近いし、中曽根派の研修会で講演している間柄だしね。屋山本人はゲラも見てないし、中曽根首相にも話していないという公式コメントを出してるそうだが、疑いは残るな。

C もっとも一時流れたけど、文春を印刷している凸版印刷から漏れたという線もまったく考えられないわけじゃない。あそこの体質や経営陣の顔ぶれとか人脈関係でいえば想定はできる。

A 事実関係を整理してみると、要するに三日朝に後藤田官房長官が人を介して文春の上林吾郎社長に電話をして「藤尾発言を読んだ。これは大変なことになるので外務省の藤田アジア局長にあって欲しい」と連絡。翌日の四日、藤田局長が文春に駆けつけて全文削除もしくは、文部大臣の肩書をはずして「韓国を併合していなければロシアの領土になっていた」という部分を削除して欲しいと申し入れた。後藤田長官の名代としてね。

B もちろん文春はその要請を断わったが、今度は藤尾文相自身が「首相側近にゲラを流したのはけしからん」と文春に吠えついた(笑)。そのため文春としては九日付で中曽根首相と後藤田長官にあてて「発売の一週間も前に記事を入手、その変更を迫るのは事前検閲としかいいようがなく、変更を拒否されるとコピーを外部に流して発言内容が世に問われる以前に発言者を封じ込めることは許されない」という趣旨の抗議文を送りつけた。

C 何だか藤尾文相に対して体面をとりつくろうための抗議文という印象だな。

A 要するに文春じたいが、なぜゲラもしくは刷り出しが流出したのかという第一の問題点に対して追跡・調査する意志がないことから、計画的に発売前に話題をあおろうとしたと見られても仕方がなさそう。これまでも事前にゲラもしくは見本誌を他のメディアに流して話題づくりをするという方式を当然のように取ってきた〝前科〟もあるしね。

D それにしても『文藝春秋』が店頭に並んだ時には藤尾文相は早々と元文相になっていたわけだから、いくら藤尾の確信犯的行為とはいえ、今後に問題は残るだろう。

A 一方、同じ号の『文藝春秋』にあった「岡田有希子の日記」の方だが、相前後して『女性セブン』も〝独白入手〟として公開した。ところが『セブン』のものは文春側が日付などを入れかえたり修正・加筆したところがあったらしいが、それがソックリ同じになっていたことから、文春側は『セブン』がゲラ刷りを入手して盗んだと思ったらしい。

B 文春はこの件で『セブン』の発行元の小学館に抗議文を送りつけたという話もあるが、『セブン』側の言い分はこうだ。つまり文春よりも早くから、この日記の存在に目をつけてアプローチしていたが、この日記を出した岡田有希子の母親は精神病院に入院したりという事情があったため、配慮してペンディングにしておいた。しかし、文春がやるという情報が入り、それならばこちらが先ということでやったようだ。

A 文春は誰がゲラを『セブン』に流したかヤッキになったらしいが、そんなの藤尾の一件同様、どうにでもなる(笑)。直接的にルートのある岡田有希子の母親からゲラをもらったことだって考えられる。

D どっちにしても、後になって、この日記が流出したことに対して、岡田有希子の父親は、女房が勝手にやったことで困惑している感じのコメントを出していた。ということ

山梨県唯一のローカル紙・山梨日報が何と県の監修付写真月刊誌刊行中

は、文春は精神的に問題のある母親をうまくダマして日記を持ってきたということにもなる。なにしろ『文藝春秋』は三浦良枝サンの手記掲載のアプローチをやってるぐらいズブトイ神経を持ってるところだしね(笑)。

C そういえば『エンマ』週刊化第二号(10／1号)で「三浦良枝さん最後の告白」なんてインタビューをとっていた。『エンマ』といえば劇画で三浦和義を主人公にしてデッチあげをやったり、他誌以上に三浦夫妻にとことん悪意を持ってやってきたところだし、三浦氏が告訴を検討中の雑誌でしょう。離婚を決意した良枝さんのあてつけかな?

A 火をつけた張本人である『週刊文春』と同じ発売元ということを知らないのかな。

D まさか(笑)。『週刊文春』が三浦弁護団の五十嵐二葉弁護士の手記を取ったけど、うまくのせてやるという手口がうまいんじゃないの。良枝さんもドミニカ共和国でフジ・サンケイグループの世話になって「いい人だった」というくらい、マスメディア批判の原則よりもその時のノリでという人だから。

C その点は三浦和義サンもそうだ。愛染恭子と良枝さんの対談をデッチあげた『週刊ポスト』とは絶縁状態にあったはずなのに、「独占 三浦和義獄中書簡 いま書いているマリワナ小説のこれがサワリだ」なんて連載が突然はじまったりね。

D 『ポスト』には三浦サンと親しいといわれているM女史がおり、そのルートだが、先の『週刊現代』の独占手記も一歩間違えば『ポスト』だったという事情もあったようだ。

A 結局、あれだけの大批判にさらされたり、何回か裏切られたりでマスメディア批判の感覚がマヒしたか、逆に利用しようという発想なんだろうけど、したたかなマスコミ人はもう一枚上手で十分に利用しているという点に気づくべきじゃないかな。ロス疑惑報道は大問題という、われら人権派応援団の心知らず、困ったもんだが……。

▼写真雑誌の現象が面白い!

A それにしても藤尾文相を手早く〝処分〟してしまった中曽根首相が今度は、自民党の全国研修会という内輪の会ということで油断があったのか、アメリカに対して「知的レベルが低い」と発言して問題になった。でも自分だけは逃げ切りそうな気配だな。

B 三選をゴリ押しして手にした最高権力者のイスを〝失言〟ぐらいで手離すわけにはいかないと思っているんじゃないの。結局は藤尾正行とほとんど同じ発想の持ち主ということがバレちゃったというのに……。

C マスコミが総動員してキャンペーンでもやれば、と思うけど、まず無理だろう。

D というよりアメリカのジャーナリズムが徹底的にキャンペーンをやれば、マルコス政権みたいにコロッといくんじゃないのか。

A わが国のジャーナリズム状況を何よりも的確に反映している写真雑誌にいこう。『タッチ』『フラッシュ』の創刊も近いわけだが、なかなかスタッフが集まらないらしいね。業界内ではツテをたよって「誰か若いヤツいない?」が合言葉になってるらしいね(笑)。

B それでもギャラのせいかカメラマンはいるらしいが、記者の方が不足しているらしい。記者といってもハリコミ専門というのがミエミエだしね。金のためにと割り切らなければやってられる仕事じゃないしね。

C 最近は『週刊現代』あたりも記者にポケベルを持たせて、いつでも出動できる体制を敷いているらしい。誌面に『フライデー』的な活気をつけようとの狙いらしいけど。

A それにしても週刊化された『エンマ』

にはビックリ仰天。『エンマ』が創刊当初狙っていた独自な視点も姿勢もかなぐり捨ててF・F一直線(笑)。あれだけソックリならばそそっかしい読者が間違って買ってしまうかも(笑)。

B　その割には内容がいまいち。第二号の目玉仕立ては「アラン・ドロンの〝東京妻〟を発見!」で、どうでもいい内容。『フライデー』が立派に見える(笑)。

C　やはりスタッフと機動力においてF・Fに大きく立ち遅れていることがよく分る。

B　『フォーカス』の吉永小百合と岡田裕介の車中写真(9/19号)は話題になったね。岡田太郎が糖尿病という説が以前からあったし、ここ数年の吉永小百合のカゲキさは性的な不満の発露ともいわれていただけに、やっぱりという感じではあった。

D　しかし、この二人は本命とは考えにくい。岡田がイレ込んでいるのは分るけど、小百合の方は単に亭主の不足分を補ってもらっているだけという割り切りが感じられた。サユリストとしてはね(笑)。

B　あと軟派路線としては倍賞千恵子と気鋭の作曲家(9/26号)、石原真理子と石黒賢(9/12号)、山口百恵のヌード(10/3号)なんてのがあったが……。

C　山口百恵のヌードは『フライデー』にも持ち込まれたらしいけど、結局、撮ったのが篠山紀信ということで『フライデー』は著作権やら篠山との今後の関係を考えてボツにしたということじゃないかな。

D　流れたルートはおそらく現像所だと思うけど、よくいままで表面化しなかったな、という印象だな。実際に見た人物の話によると確実にホンモノという話だったが、それは間違いないようだね。

C　『フライデー』に比べて『フォーカス』は硬派ものもキチンと拾っているね。「中曽根首相と兜町『陰の黒幕』——『コーリン産業』小谷光浩社長との気になる関係」(9/5号)とか「これも『空前の大収益』のおかげ?—野村証券会長の10億円の〝公邸〟新築」(9/26号)、「『総資産は3兆円』—最後の政商『小佐野賢治』急死説と夫人の行状」(10/3号)という具合にね。

D　小佐野の極秘入院は一部で流れたけどどこもキチンとフォローしなかった。入院先もさがしたけど分らないという話も聞いた。

C　『フォーカス』が頑張っているというよりも『フライデー』が野球選手や芸能人の尻ばかり追っかけているから、逆に目立つということじゃないの。

A　今月の『フライデー』も佐藤浩市と手塚理美(9/12号)、志穂美悦子と長渕剛(10/10号)、巨人・吉村禎章と美女(10/10号)と相変わらず。とにかく、野球選手か芸能人だったらどんなに知名度が低かろうが、相手が無名でフツーの人であろうが狙われると覚悟すべしということだろうね。

B　それで面白かったのは十月十日号の「楠田枝里子さんが頼りにしてる『男』との一夜」。ホテルで密会中を嗅ぎつけながら相手の男に対しては「フツーのサラリーマン」のひとことで片づけている。

C　業界内では角川書店『月刊カドカワ』の見城徹編集長と囁かれているわけだが、講談社側が同業者だし、作家との絡みなどもあって自主規制したとしか思えない。

D　張りこんだカメラマンも記者も見城編集長の顔を知らなかったということもあるんじゃないの(笑)。

A　当の見城編集長も離婚して一人身だし

宮沢喜一が「夕刊フジ」などマスコミを使って再浮上の世論工作を展開

楠田枝里子も前の恋人と別れて、いまだ独身、堂々としていればいいのに。見城編集長は親しい仲間に「彼女はCMに出ており、スポンサーを刺激しなければいいが……」などといってるそうだけど、それこそよけいな心配。楠田枝里子に恋人がいたらいけないことになっちゃうよ(笑)。

B 同じ号に久々に人肉事件の佐川クンが〝フライデー〟されていたけど……。

D 佐川クンの人権ということもあるけど、六本木に住む外人のガールフレンドをさがし求めて、電柱や地下鉄に手製のビラをはって「ラバー カムバック トゥ ミー」じゃ目立つのも当然。本人は必死の思いなんだろうけど、ちょっと困ったものだという感じ。

C 逃げた女性をあれだけ執念ぶかく追いかけるというのも何だか……。それこそが佐川クンの〝思想〟なのかもしれないが……。

D それはともかくF・F・Eがそろって日教組の内情を取りあげているのは気になった。内調あたりが何かリークしているんじゃないかという気すらしたね。日教組に問題があるにしても、国労に次ぐ日教組批判は右翼をはじめ体制側の意志でもあるわけだからね。

▼『週刊新潮』のワイド特集の定着化

A 『週刊新潮』のワイド特集スタイルが、日常的スタイルになってきた。ライバル誌の『週刊文春』も恥も外聞もなくモノマネを始めているほどだが……。

B ワイド特集スタイルというのは、つまらない古ネタでも、何とか無理矢理こじつけられる利点はあるけど、現場スタッフには不評のようだね。ひとつのネタを腰をじっくりおちつけて追跡取材するわけにもいかないし、一人で何本もかけ持ちなんてことになって、けっこうハードらしいしね。

D 最初からメインテーマとして結論が決められているわけだから、ネタが意外な広がりを見せたりということにもならない。やり手の記者にしてみればやっつけ仕事で事足れりになるから張りあいもないというわけじゃないの。

A 結局、週刊誌もF・F現象に浸食されてきたということになろう。ワイド特集にすれば売れるというしね。コマ切れ情報時代というわけか。もっとも本家の『週刊新潮』あたりじゃ、斎藤十一〝天皇〟が齢のせいで長いものを読む根気がなくなったせいじゃないかというカゲ口も出てるらしい(笑)。

B その『週刊新潮』のワイド特集のテーマをざっと拾ってみると、「『衰退』の嗅覚」「娘と息子の紳士録」「夫は外人富豪」「照る日曇る日」といった調子。そのものズバリもあれば、文学的表現を意識したようなテーマもありでバラエティにとんでいる。

A その中の「照る日曇る日」(10/2号)の中に「『エイズ』を出したアフリカボランティア」という記事があったけど、『新潮』の手口は、日本に帰国したボランティアのうち二人がエイズ抗体陽性の反応を示したことをとりあげて、現地女性と性交渉を持ったからで何しにボランティアにいったんだという、いつものボランティア叩きの論理を持ち出していた。

B ウラもとらずにね(笑)。

C ところが、つい最近、中央アフリカでは蚊によってエイズが感染する可能性もあると報道されたばかり。アフリカ駐在の商社マンの妻たちがあわてて殺虫剤を日本から送ったというのが話題になったのを知らなかったことになる。明らかに勉強不足か、意図的なボランティア叩きということがミエミエ。

D 『新潮』のこの種の思い込みはもはや頑迷な妄想としか思えない。〝斎藤教〟の信者集団がインテリジェンスをふりかざすところに最大の危険性がある(笑)。

C 面白かったのは「照る日曇る日」のワイド特集で「井上ひさし氏『再婚』のステップ」とやっていたが、再婚相手とされる米原ゆりさんの写真が手に入らなかったらしく、『赤旗』の写真と記事をそのまま使っていたこと。『フォーカス』もまったく同様。

D 米原ゆりさんは元共産党代議士・米原昶の娘。タカ派・反共雑誌の盲点だったというべきか(笑)。

A 『週刊文春』もしっかりとワイド特集。例えば「『イチャモン』がいっぱい」「身の『不運』」「母の『愛情』」といった調子だ。本来は文春としても好みのスタイルではあったわけだ。突っこみが甘くても許されるという点でもね(笑)。

B 久々に『週刊文春』をほめておくと、「再審梅田事件判決 拷問冤罪で指さされた元取調べ官のしどろもどろ」(9/11号)。昔、梅田事件を取り調べた捜査員にあって質問をぶつけているわけだが、皆一様に逃げの体制。冤罪デッチあげが判明したら、捜査員や裁判官にも何らかの処罰を加えるべきといわんばかりの熱気が伝わって、いいレポートだった。

D それがどうしてロス疑惑になると捜査員調の記事になってしまうのか。人権意識がカゲキに芽生えたり、からっきしなくなったりで一貫しない。もっともそのいい加減さこそ文春ジャーナリズムの良さというい方もあるわけだが……(笑)。

A 「中曽根首相が赤鉛筆片手に読んだ『藤尾発言』の破壊力」(9/18号)は問題の火元が同社の『文藝春秋』にある割には、突っ込みも迫力もいまいちだった。こういう時こそ力量を見せるチャンスなのに……。

B 『南』がすぐに『北』を指さした金浦空港爆破テロ事件の犯人」(9/25号)にしても、むしろやらない方がましという表層的な、何の核心もない記事だった。新編集長の力量がまだ見えてこないね。ワイド特集以外では。

潮流ジャーナルの天野が資金難のためブラック紙のダイジェスト版発行

▼『週刊ポスト』の老成と他誌の活気の差

A　『週刊現代』の編集長が交代して十月十一日号から記事末尾の記者名をはずしたね。無署名記事の利点を生かして思い切った取材を展開するためということらしいけど、その通りとは思えない狙いがありそうだが……。

B　ただいままでの署名の入り方はカンジンの時や風俗ネタは○○取材班で、どうでもいいような時だけ署名が入ったりで、有名無実化していたことは確かだから、スッキリはした。

C　それにしても、いままでの部数の落ち込みはヒドイもんだったらしいね。『週刊大衆』や『アサヒ芸能』クラスという説もあったほどらしい。そのせいか、新編集長になって定価を二十円あげてもいく分上向きらしい。

D　江口編集長時代の六千万円あまりの累積赤字を一カ月余で解消したなんて話もあるそうだ。もっとも現場にすれば以前は一本半ページあたり五万円ていどの稿料が半分くらいになったらしい(笑)。

A　『週刊現代』で笑ってしまったのは「山口百恵秘中の秘『ヌード写真』流出事件の大騒動」(10／4号)で記事中にあった山口百恵ヌードの「想像イラスト」。想像どころか『フォーカス』に発表された同じヌード写真を見てソックリ点描画にしていた(笑)。

C　著作権のある篠山紀信への配慮だろうけど、ここまでやると笑ってしまう。

B　記事で目についたのは「噂の教団『真如苑』入信は㊙リスト」(9／27号)、『ペントハウス』に連動した「横山ノック・角界マリワナ／麻薬『疑惑』『ウソというならこれが証拠だ』」(9／13号)といったところか。

C　「これじゃ孫がかわいそう　親のゴタゴタ感づいた」(9／20号)という三浦和義氏の父・明氏のインタビュー記事も、側近にいる人物のホンネだけに説得力があった。

A　『週刊ポスト』の方は、機動力が感じられないね。秦野章、早坂茂三、江夏豊、三浦和義といった知名度というか人物を中心に据えた企画もの勝負という印象。記者労組問題の後遺症のせいもあるんだろうね。

B　確かに物量作戦の割には企画が安易になっており、総合娯楽誌という印象。定価が『週刊現代』より十円高くてもまずまず売れてるのはやはり、内容より物量で勝ってるとしか思えない(笑)。

C　いわゆるビジネスマンの実用娯楽誌という路線が定着してきたため、この座談会でもお呼びじゃないになってきたことは確かだ。

D　その点、後発という点で『週刊宝石』のゲリラ性はまだ救いがある。過去の人・田中角栄をしつこく追跡したり、「中曽根首相が〝信奉〟する大前研一って誰！」(9／19号)なんてトバシ的にトップ記事でやる。

C　『朝日ジャーナル』の連載で田中康夫が林真理子批判をやったのをとりあげて「田中康夫クンにケンカを売られた林真理子サンの『ド迫力気炎』」(10／10号)のように五ページに引きのばしたりね(笑)。

D　かと思えば「NHK看板美人アナの手を股間に導いた有名人は誰?」なんていうコラムネタを堂々と特集第二弾に持ってくる。とにかくネタに敏感に反応する現場のフンイキが感じられるのが新鮮にうつるね。とくに『ポスト』あたりの老成ぶりを見ていると。

A　その辺は新編集長下の『アサヒ芸能』の「土井たか子ウワサの恋人は名物政治記者」(9／18号)といった記事にもいえるセンスだね。多少荒っぽいけど活気はある。

〈敬称略〉

おわび ア・ラ・カルト

●平凡パンチ（9／15号）

〔訂正〕本誌123号P33の記事中、〈資生堂のイメージガールになった国生さゆり〉はカネボウの誤りでした。訂正します。

▼ったく、もう。パンチが女の子のことまちがって、どうすんだよ。ほんとヤキがまわってんだから。

●週刊文春（9／11号）

■先週号「表紙はうたう」のタイトル名〈ヴェニスの夏休み〉は〈ヴェニスの夏の日〉の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

▼べつに「夏休み」だろうが「夏の日」だろうが、いいじゃない。と思いきや、"題名は「旅情」の主題歌"と結んであった。そりゃマズイわ。

●サンデー毎日（9／28号）

◎訂正　サンデー毎日臨時増刊9月20日号中、106ページ神戸女学院大学家政学部食物学科の難易度▲四九・八は五二・四。また203ページ専門学校一橋スクール・オブ・ビズネスの住所、東京都新宿区高田馬場一―三二―一四は西早稲田二―六―一の誤りでした。訂正しておわびします。

▼毎年毎年、難易度を掲せて合格者氏名を掲せて、結局はまちがい訂正だらけ。だいたい訂正の文章で、ビズネスなんて訛るんじゃないってえの。

●毎日新聞（9／14朝刊）

訂正　十三日付朝刊22面「平凡社人事」の記事中、東京印書館が平凡社の「子会社」とあるのは「関係会社」の誤りでした。

▼平凡社社長になったのが、下中一族の三男で東京印書館社長。創業者の息子の会社を「子会社」と短絡したのか。ま、実質は同じようなものでしょうが。

●読売新聞（9／14朝刊）

訂正　十三日掲載の「植物状態の自然死の訴え認める」の記事中、米ニュージャージー州のカレンさんが生命維持装置を取り外す前に死亡していた――との表記は誤りで、カレンさんは取り外した後もしばらく生存していました。共同通信配信の間違いによるものでおわびして訂正します。

▼幸か不幸か朝毎にはこの記事がなく、したがって訂正もなし。それにしても「共同通信配信の間違い」とことわるところが、なんとも責任のがれというか、言い訳めいてイジマシイ。

●神戸新聞（9／23朝刊）

おわび　22日夕刊「白血球が猛毒物質生成」の記事中、末尾10行の談話を削除します。

▼談話は東北大学長（細菌学専攻）のものだが、発見された毒素「ロイコトキシン」ではなく「グリチルリチン」についてのコメントになっている。一読記事とは無関係とわかる紙面から浮いた談話。

●赤旗（9／20）

訂正　十八日付、青山四郎「どうみる株価急落」中、六段終わりから四行目に「先物買い」とあるのは「先物売り」の誤りでした。

▼「売り」と「買い」をまちがう経済研究家というのはスゴイ、と思って元の記事を読んでいったら、最後に（談）とあった。ま、記者のミスでしょうな。

●朝日新聞（9／10朝刊）

訂正　七月三十日付「鄭成功の五言絶句見つけた!!」の記事で、徳島大学に留学中の鄭安晧氏が「帰国の際持ち帰ったもので……鄭成功記念館に寄贈」とあるのは「写真に撮って……鄭成功記念館に送った」の誤りでした。訂正します。

▼そんなに大切なものを、そうそう持ち出したり、寄贈したりできるはずがないか。

●毎日新聞（9／18夕刊）

訂正　十七日付「近事片々」引用俳句の作者は「秋櫻子」でした。おわびして訂正します。

▼呉智英氏から「教養のない、バカな新聞」と批判されても知らないよ。

●平凡パンチ（9／15号）

【訂正とお詫び】1123号（9月8日号）の『鈴鹿1000kmレース速報』中で、イセキ・ポルシェが2位とありましたが、イセキ・ポルシェはタンク違反のため失格となりました。2位ミノルタ・トムス86C（黒沢元治／小河等／星野薫）、3位レノマ・ポルシェ956（高原敬武／戸谷千代三／都平健二）が正しい順位です。お詫びして訂正いたします。

▼ったく、もう。パンチが車のことまちがって、どうすんだよ。ほんとヤキがまわってんだから。

O W A B I · A · L A · C A R T E

週刊誌を斬る

■藤尾暴言に続いて中曽根首相の「アメリカは知識水準が低い」の放言。その直前に中曽根の本心を見抜き、予言していたのが野坂昭如氏だ(週刊文春9/25)。ヤスの内心には抜きがたい対米劣等感があり、それ故にロンにすり寄るのだが――「アメリカに対し、ひけ目を感じるたび、周辺諸国に対し威丈高となり、かつ内にナショナリズムを宣揚、自らの支えとなす。二流の男の権力志向ほど危いものはない」――週刊誌コラムニストには、この洞察とタイミングのよさがなければならぬ。

■「近ごろ稀にみる気骨ある政治家の大論説」と藤尾センセイをほめあげるのが山口洋子オバサン。皮肉ではなく、マジなのだ。「こいつがどうして文相罷免に繋がるのかわけがわからん」「久々にみる日本の頑固親父をホーフツさせて懐かしいばかり」(ダカーポ10/5)。――そうですかねえ。どこにでもいる日の丸親父だけど。きっと山口サンちに飲みに来る男が軟弱過ぎて、珍しいんでしょうね。

■韓国人にとって「嫌いな外国人」は北鮮、ソ連を抜いて日本人がトップに。お詫び訪問の中曽根首相が青瓦台で「王将」のカラオケをやっていた頃、ソウル市内のスナックで歌っていた日本人旅行客が、韓国人の「帰れ」コールで追い出された。週刊サンケイ(10/9)の目立たぬが大事なレポート。

■「考えすぎだろうか」と二十一歳の学生田辺勝則氏が朝日ジャーナル(9/26)に投書している。藤尾発言騒ぎの直後に日本のSDI計画参加が決定された。「藤尾問題に目を奪われ、日本国民はSDI論議を忘れ、韓国国民は改憲運動その他、自国内の問題に対する力を奪われた」――悪質な世論操作ではなかったろうか、と鋭い。

■そろそろ言い出すんじゃないかと思ってたら、案の定、ヤン・デンマン(週刊新潮9/4)が、イジメや非行にひっかけて「軍隊のメシ」の効用を説教した。旧軍隊は、「弱い奴が鍛えられる社会であり、強い奴も人間としてほんとに強くなって帰ってくるところだ。ほんとに強い人間は、いじめをしないものなのだ」。じゃ、南京やシンガポールでの虐殺は〃弱い日本兵〃だけがやったの?

■文藝春秋十月号はまことに読みでがある。目玉の藤尾発言よりも、完売の真因は岡田有希子ちゃんの日記だろうが、ほかに山口敏夫の新自由ク解党の内幕も面白かったし、「もう一般紙なんていらないよ」というスポーツ紙デスク座談会が示唆に富んでいる。文春にいいところが残っているとしたら、こうした雑多な、しかし一つ一つ生きたネタを大きく包む容れものであるところ。毎号そうというわけじゃないが。

■〃週刊化〃したエンマのお粗末ぶりには目をおおうばかり。第二号(10/1)の目玉にした「あのアラン・ドロンのお相手」だって、

ご当人に、「あの〝事件〟？　もう過去のことじゃないのッ。オトコでお金さえ持ってれば、あたしにとってお客なのよ。普通のソープの女のコと同じことをしただけなんだからねッ！」と叱られて、いうことなし。かえって読者のタレ込み（密告）を求める広告「写真週刊誌は読者と編集部とが共同で作るもの……誠意をもって対応いたします」が切実で面白い。

■おニャン子現象がオジさんたちの雑誌に及び、エンマ（8／20）、フライデー（9／26）がしきりに「素顔」や「私生活」を追ってうれしがっている。もともとシロウトが化粧もロクにせずにテレビに出た。そのまたもとの姿を撮ったって変るわけはないのだが、若い女の子イジメなら何でもやってみたいというところか。それとも苦労なしで人気者のおニャン子にFFE編集者もあやかりたい心境というわけか。

■苦しくなるとワイド特集――は、かつて週刊新潮のお家芸だったが、九月ごろから各誌いっせい右へならえで、ついに週刊朝日も……。目次や広告にタイトルがたくさん並ぶだけで、読者は別にトクをしない。情報のスポット売り、羅列。次第に全週刊誌がFFE化し、日刊ゲンダイ化する兆候か。



■マドンナの旦那、ショーン・ペンがつけてきたカメラマンを殴っているシーンがフォーカス（9／26）に。殴られたのはアメリカのノゾキ専門写真家で、場所もNYだが、フォーカスの立場はむろん一方的に「仕様のない男」ショーンをやっつけること。出演映画は酷評だとか酔っ払いだとか。しかし、そういうこととノゾキへの抵抗は関係がない。それともFFEに抵抗する者はすべて「仕様のない」人間といいたいのか。

■サンデー毎日が創刊三千六百号（10／5）とかで三十六人の女性のワイド。全く深味も切れ味もなし。井上好子の新連載もスタート緊張気味で冴えず。――まあいろいろとイメ・チェンはいいが、目次をうしろに持ってったのだけはカンベンしてもらえませんか。最後をみて前へ戻るのは疲れる。もっとも女性誌はそんなことをやってるが、ヘタな媚びはやめようよ。

■真面目な独身女性薬剤師が駅のホームで刺殺された。オカ惚れしてつきまとった男が逆恨みしたという全く不条理な事件だが、もっと不条理なのはフライデー（9／19）が彼女の写真を探し出し、葬式までノゾいて撮ったこと。不快きわまる。

■角栄軽井沢健在情報のウソを衝く角栄ウォッチャー小林吉弥の「渾身のスクープ・レポート」は、別にスクープもなく、情報整理に役立つぐらいが取柄だ。うまいのはタイトルだけで、「角さんの鼻歌が聞こえる」をモジって、「田中角栄の歯ぎしりが聞こえる」（週刊現代10／4）

長部日出雄のページ

Hideo Osabe



●日本傲慢派の登場

問題の藤尾発言につづいて、「アメリカは平均的な知的水準が低い」という中曽根発言。やはり国際派の衣の裾から、日本傲慢派の鎧が顔を覗かせましたね。

五年前のいまごろ、NHKのラジオ講演で、「日本傲慢派の登場」という副題の話をした。本当はこれを表題にしたかったのだが、なんのことかよくわからないといわれたので、「われわれの国際性について」という題のサブタイトルにしたのだ。これを日本浪曼派のもじりと気がつく人は、いまじゃずいぶん少なくなっているに違いない。

中曽根首相はたしか就任早早、「まほろば」という日本浪曼派好みの言葉を口にしていたし、先頃は「国家としてのアイデンティティー」を強調していた。横文字を使えば当たりがソフトになるが、国家の自己同一性(アイデンティティ)をことさら強調するのは、国粋主義に通じる。だから、この言葉を独自の理論の基礎概念にしたE・H・エリクソンは、「より包括的なアイデンティティー」をめざすことが重要だといった。

社会党議員の質問にたいする「私は先行する話の部分でアメリカ人はアポロ計画などで実績を示した。ただ多民族国家なので教育に関しては容易ではない。日本は単一民族なので教育をやりやすい、とした趣旨のことを言ったまでだ」（毎日新聞）という国会での弁明にも、そうした多様性と包括性への志向は認められない。野暮を承知の口調でいえば、これは時代に逆行する考え方だ。

最近は、「今後は文化の受信国でなく、発信国にならなければならない」ともいった。まことに尤もな意見だが、前記の「まほろば」と「国家としてのアイデンティティー」に、この言葉をつなげると、日本の文化的伝統は世界に冠たるものであるから、海外にも広めなければならない、という戦前の日本浪曼派の思想の現代版であるようにもおもえる。

中曽根首相のいい方は横文字まじりで、一見スマートだが、藤尾発言のように乱暴な口調でやると、文字通りの日本傲慢派になる。

五年前のラジオ講演で、ぼくはこう話した。

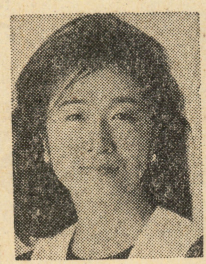
……とくに日本はアジアの諸国にたいして、日本傲慢派になりかけている。あるいはすでになっているといっていいのではないかとおもいます。しかしながら、なんでもかんでも自分のところが一番だと主張するのが、いちばん田舎者の証拠なんですね。これは島国根性のあらわれだとおもうんです。……

横文字とカタカナが氾濫するいまの世の中を見て、どこに国粋主義が復活する余地があるか、とおもわれるかもしれないけれど、日本浪曼派が登場する前も、ちょうどそんな風だったのだ。

発信国になりたいのなら、なんでもレーガン大統領に右へ倣(なら)えではなく、憲法で戦争を禁じられた日本が、どれだけ世界の緊張緩和の役に立てるかを、広く諸外国に訴えて貰いたいものだが、まあ、これは無理ですよね。

木野 花のページ

Hana Kino



●さよならの謎々

〃あなたが引退するのはなぜですか。あなたの突然の引退は、あなたのふいうちのデビューの時のように私達を戦慄させます。そしてあなたの謎がまた一つ、私達の想いの中で増えてゆくのです。あなたが去った後、私達はどうすればいいのでしょうとはいいません。ただ、あなたの決断する心が、私達を不安にさせるのです。私達は、これからどこへ行けるのかと問いかけられているようでこわいのです〃

長々と引用してしまいました。このやけに感傷的で真面目なセリフは、六年前、青い鳥が公演した「コンセントメモリー」という作品の中の一節であります。アイドル歌手の突然の引退と、それをめぐる熱狂的ファンの想いが、どこまでも追って追われる永遠のメリーゴーランドになるのだゾオ、というおそろしく執念深いお話だったんだけど、この芝居をつくるきっかけになったのは、あの山口百恵の引退声明だったのだ。文句あっか！ それぐらい好きだったんだ。悔しかったんだ。その勢いで芝居が一つできちゃうところが、青い鳥のいいとこなんだ。

それはともかく、あの時の山口百恵とファンの関係にとって、「引退」という別れ方ほど挑発的なものはなかったんじゃないだろうか。それは、スターがファンにかけた最後の謎々じゃないだろうか。それは、あの天才ランボーが22歳でその才能もペンも捨て、キプロスで現場監督になってしまったのと同じように、残された者をこの上もなく不安にさせる残酷でミステリアスな訣別の仕方だ。あの時期あれだけ愛され、あんな風に輝いた一人のスターが突然もうおしまいって背中むけて奥さんになっちゃうなんて、計りしれない結論の出し方なのだ。なぜ、どうしたらそういう答えが出せるのか、21歳の魂の謎は宇宙をめぐるようだ。本人にはそれなりの理由があって、そんな事は自分の心の一番奥の引き出しにしまって鍵をかけてしまいましょ、と賢い判断下したつもりだろうけど、そういう人が奥さんになったってタダの奥さんになれるはずがないのだ。タダの奥さんは引き出しに鍵なんかかけたりしないのです。人生というものにそのような結論を下したりしないのです。そういう奥さんにかぎって、人目を忍ぶようにひっそりと暮したがるけど、タダの奥さんは決して忍んだりしないから余計目立っちゃうのである。だから、平凡な奥さんになろうなんて無駄な努力をせず、タダ者ではないしたたかな奥さんとして胸をはってマスコミを相手にした方が自然なのだ。ああ、一ファンは人知れず取り越し苦労までしてしまう。

それにしても、謎々の答えというのは、誰にでもとける簡単な方が幸せなようだ。

≪ひさかたの　茶のぬくもりや　けさの秋≫
総理大臣　中曽根康弘　朝日新聞
（86・7・8）の記事より

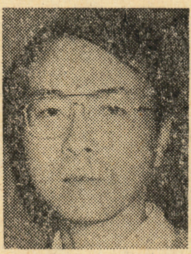
中曽根首相に『中曽根康弘句集』（角川書店）という俳句集があるということは、雑誌の記事で読んで知ってはいたが、彼がどんな句を作っているかは、全く知らなかった。想像するに、それは伝統的作法は重んじているものの、面白味の少ない教科書のような俳句だろう、という気がしていたからである。戦後の乱れた教育の見直しを主張する首相の俳句であるからには、私がこうした予断を持ったとしてもおかしくはなかろう。

そんなわけで、実物にお目にかかったのは、新聞の記事中に引用されたこの句が初めてである。一読、ブホッ、私は食べかけのトーストを噴パンしてしまった。和歌俳諧に何の造詣もない私だが、高校の古文の授業ぐらいは人並みに受けている。むろん、乱れた戦後教育の高校古文である。その程度の教養しかない私でも、こんな珍妙なものが俳句だとは、とても思えない。

私が習った戦後教育の高校古文では、「ひさかたの」が「茶」にかかる枕詞だとは、ついぞ教わらなかった。「ひさかたの」は「遠い天空の彼方の」を意味し、天、日、月、さらに光などにかかる枕詞だと習っている。一例を挙げれば、紀友則の「ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらん」が有名である。こころみに、岩波書店の「日本古典文学大系」の別巻索引を引いてみたが、〃皇紀二六四六年〃を誇る日本文化の歴史の中で「ひさかたの」を「茶」にかかる枕詞としたものはただの一つもなかった。さらに、よく考えてみれば、そもそも俳句に枕詞を使うという例も珍しい。小林信彦のパロディ小説『ちはやぶる奥の細道』に出てくるのならおかしくもないが、まともな俳句集では見たことがない。

呉　智英のページ

Tomohusa Kure



●折々のバカ 2

十数年前、日支国交回復に際し、当時首相だった田中角栄が、自作の漢詩と称する漢字の書き取り帳のようなものを支那の要人に得意気に披露した時も驚いたが、これは、好意的に解釈すれば、無知な庶民を自作自演する田中の作戦だったのかもしれない。しかし、戦後教育の見なおしを主張し、日本の伝統を重視しようという中曽根の俳句が、日本語として意味不明であるとは大笑いである。

この句が引用された朝日新聞の記事は、今年七月の国政選挙の結果を報じたものである。私は、それを書いた記者は、中曽根のバカぶりを報道するつもりだったのだと思い、この日以後の読者の反応を待っていた。しかし、読者も野党も進歩的知識人も、誰一人としてこの俳句もどきを問題にする人はいない。民主主義に毒された彼らには、バカな首相が文化バカを演じているのを批判する力もないのである。彼らに代わって私が中曽根を揶揄して二句ほど即吟。

●たらちねの　戦後教育　総決算
●八雲立つ　変な日本語　右太臣



ワイセツ最前線

芳賀書店のビニ本販売中止

PORNOGRAPHY FRONT LINE
BY TETSUO OKUDE

●奥出哲雄

〃ビニ本のデパート〃として親しまれてきた神田・神保町の芳賀書店が10月1日よりビニール本の販売から手を引くと宣言、マニアを含む業界関係者の注目を集めている。従来から扱っているアダルト系取次本はそのままに今後はアダルトビデオを中心にした品揃えでいくという。マニアならずとも、芳賀書店の名は知っている人々も多いはず、いわばビニ本の代名詞的存在であり、ビニ本ファンにとってその象徴でもあったといえる。

ビニ本は現在、かつての熱狂的ブームも去って細々と命脈を保っている印象、撮り下ろしの新刊はなく、出廻っている全ては、「再生本」と呼ばれる古本ばかりである。表紙を変え、あるいはレイアウトを多少いじくり回して、しかし中身の写真は昔のままなのだ。熱心なコレクターはビニ本を見限って、新たな〃ズリネタ〃であるアダルトビデオへと関心が移ってしまっている現状ではある。

一見するところ、確かにビニ本の影は薄い。ところが関係者に取材してみると、ビニ本は今年に入ってから売り上げを伸ばしているというのだ。再生本であるから、元手もかからず、昔の製版ポジフィルムを幾度も使い回しているにもかかわらず、安定した売れ行きであるという。しかも裏本に薄い〃消し〃を入れただけの本番ビニ本が定着して、人気商品となっているらしい。たとえ芳賀書店が前線から撤退したとしても、ごく一部のカバン屋を除けば、版元も問屋も、他の小売店にも影響などサラサラなく、ましてやビニ本が消えて失くなることなどまずあり得ないと、業界人は苦笑した。ある版元によれば、今回の芳賀サンの決断もどこまで本気かと首を傾ける。「おそらくは行政処分が下りるまでの、当局向けのポーズではないか」とも言った。

そこで当の芳賀書店に取材を申し込んだところ、行政処分が下りるまではマスコミ向けのコメントは差し控えたいとの事。調べてみると、今年三月、芳賀書店は、わいせつ図画販売ほう助の疑いで取り調べを受けていたのである。今までのビニ本販売の「累積効果」も加味されているらしいが、しかし今だに当局からの処分は下りていない不可解。芳賀書店側にとっては落ち着かない猶予の日々であるらしい。それに昨年末の前例もある。神田にあるビニ本古書店の文省堂が、新風営法施行後、書店としては初めての営業停止処分を受けたのだ。いわゆるアダルトショップではなく、書店に対するこの処分は、ビニ本街の住人たちにとって、驚きと同時に他人事ではなかったはずだ。風営法の改悪によって、営業停止期間も旧来の五日単位から一挙に30日間に延長されたことも大きいハズ。かような前例から照らし合わせてみれば、今回の芳賀の決断も、なるほど察知が付かぬこともない。かくなる警察の巧妙な小売店いじめは、風俗広告締め出しを企んで代理店や夕刊紙への露骨な干渉の前例をもち出すまでもなく、結局のところ、真の狙いはビニ本退治なのである。

すると芳賀書店の今回の路線変更は、ホンネはどうあれ、その累積効果は充分のはず、やはりビニール本は危機に瀕しているのである。

雑誌界初の六大都市を網羅した部数調査

★月刊総合雑誌売れ行き調査

誌　名	札幌 中央区 冨貴堂	東京 池袋 芳林堂	横浜 西口 有隣堂	名古屋 中村区 近鉄星野書店	大阪 心斎橋 駸々堂	福岡 新天町 金文堂
いんなあとりっぷ	5	10	9	28	8	5
ヴォイス	6	24	54	32	20	18
潮	12	24	44	27	20	22
噂の真相	6	65	41	20	23	9
月刊 PLAYBOY	31	20	62	29	38	15
現代	14	33	81	29	50	66
諸君！	17	47	76	31	35	45
新雑誌X	4	8	8	3	1	0
新潮45	18	24	60	22	22	15
スタジオ・ボイス	21	6	7	24	6	3
政界往来	0	3	7	6	3	1
正論	5	15	25	21	8	18
世界	11	80	74	60	25	21
第三文明	4	8	4	19	1	0
中央公論	17	15	41	18	10	26
創	6	42	23	24	4	3
文藝春秋	32	57	440	52	95	179
ペントハウス	18	24	64	18	45	17
宝石	17	20	58	39	26	25

＜8月号分実売＞

EVENT-MEMO

イベント●メモ●

●流山児★事務所'86スペシャル「ラスト・アジア」
作＝川村毅　演出＝佐藤信　出演＝塩野谷正幸／若松武／斎藤晴彦／小須田康人／他　時＝10月9～15日PM7：00　所＝新玉川線用賀駅北口特設テント　料金＝前売2700円　当日3000円　問合せ＝流山児★事務所☎03（365）2042

●二兎社公演
「カズオ」時＝10月10～12日PM7：00　12日PM2：00のみ）　所＝池袋西武スタジオ200
「マサコ」時＝10月25日～11月3日PM7：00（土曜PM2：00あり　日曜・祝日PM2：00のみ）所＝新宿シアター・モリエール
作／演出＝永井愛　出演＝大石静／永井愛　料金＝前売2000円　当日2200円　通し券3800円　問合せ＝二兎社☎03（291）7424

●薔薇座公演「ミスター・シンデレラ」
作＝グレイ&ニューマン　演出＝野沢那智　出演＝戸田恵子／岸野幸正／他　時＝10月10～19日PM7：00（土・日曜・祝日PM2：00あり）　所＝新宿シアター・モリエール　料金＝3000円（日時指定）　問合せ＝劇団薔薇座☎03（379）7030（12：00～18：00）

●山の手事情社VOL6「メロドラマティック」
作＝池田成志　演出＝安田雅弘　出演＝池田成志／安田雅弘／他　時＝10月17～27日PM7：00（21日休演）　所＝早大大隈講堂裏特設テント　料金＝前売1200円　当日1500円　問合せ＝劇団事務所☎03（202）6210

●ブリキの自発団第12回公演「かくも長き快楽」
作／演出＝生田萬　出演＝銀粉蝶／赤染歌丸／他　時＝10月18日～11月3日PM7：00（19・26・2日PM3：00あり）　所＝下北沢ザ・スズナリ　料金＝前売2000円　当日2300円　問合せ＝ブリキの自発団☎03（554）1957　【大阪公演】時＝10月10～14日PM7：00（12日PM3：00あり）　料金＝東京公演の200円増　所／問合せ＝扇町ミュージアム・スクウェア☎06（361）0088

●石井愃一プロデュース公演
「馬鹿にかまうと日が暮れる」
作＝水谷龍二　演出＝石井愃一　出演＝郷田和彦／石井愃一／他　時＝10月20～26日PM7：00（土・日曜PM3：00あり）　所＝新宿THEATER／TOPS　料金＝前売2300円　当日2500円（全席指定）　問合せ＝東京ヴォードヴィルショー事務所☎03（232）4731

●青い鳥公演「青い実をたべた」
作／演出＝市堂令　出演＝芹川藍／上村柚梨子／葛西佐紀／他　時＝10月23～31日・11月5・6日PM7：00（土・日曜PM2：00あり）　所＝青山円形劇場（地下鉄表参道下車）　料金＝3000円　問合せ＝劇団青い鳥☎03（468）7333

●転位・21公演「エリアンの手記」
作／演出＝山崎哲　出演＝木内みどり／木之内頼仁／他　時＝10月26日～11月4日PM7：00（1・2日PM3：00あり）　所＝下北沢・本多劇場　料金＝前売指定2200円　当日自由2500円　問合せ＝転位・21☎03（371）1872

●Cカンパニー公演「寝盗られ宗介」
作＝つかこうへい　演出＝長谷川康夫　出演＝石丸謙二郎／岡本麗／他　時＝10月28日～11月11日PM7：00（土・日曜PM3：00あり　3日PM3：00のみ）　所＝新宿THEATER／TOPS　料金＝2500円（全席指定）　問合せ＝Cカンパニー☎03（230）4594　【大阪公演】時＝11月15・16日　所＝上六・近鉄小劇場

●独立ジャーナリストの会
「大論争　国鉄分割民営化の行方について」
講師＝中島誠／他　時＝10月14日PM6：00　所＝文京区民センター（三田線春日下車）　料金＝800円

●「中国人強制連行の記録」上映会
講演＝石飛仁　時＝10月30日・11月29日PM6：00　所／問合せ＝いしとびじん事務所☎03（815）7244

●第32回東海大学建学祭コンサート
【サブ・コンサート】出演＝中山美穂　時＝11月2日PM5：00　料金＝前売1500円　当日1700円　所＝東海大湘南校舎2号館大ホール
【メイン・コンサート】出演＝とんねるず／太田貴子　時＝11月3日PM4：00　所／料金＝サブ・コンサートと同じ　【夜のコンサート】出演＝ラフィン・ノーズ　時＝11月4日PM5：30　所＝東海大湘南校舎野外音楽堂　料金＝無料　問合

EVENT-MEMO

せ＝建学祭湘南実行委☎0463（58）1211内線5920～1

●**名古屋シネマテーク**
「ミツバチのささやき」「エル・スール」時＝10月9～14日 「アンダルシアの犬」「小間使の日記」「欲望のあいまいな対象」10月16～21日 「無垢なる聖者」10月23～28日 料金＝前売1000円（会員900円） 当日1200円（大学生1100円 中・高・予備校生850円 会員950円） 所／問合せ＝名古屋シネマテーク☎052（733）3959

●**ミカラ・ペトリ リコーダーコンサート**
【リサイタル】時＝10月20日PM7：00 所＝東京文化会館ホール 【協奏曲の夕】時＝10月29日PM7：00 所＝都市センターホール 料金＝S4000円 A3500円（朝日メイト600円引 同時入会申込み可） 問合せ＝神原音楽事務所☎03（403）8011

●**鼠派演踏鑑VOL31「羊水夢」**
作／演出＝宮下省死 出演＝アルチュール・絵魔／長江弥弥／他 時＝10月18日～11月9日の毎土・日曜PM7：30 所＝鼠派演踏鑑（池袋西口下車） 料金＝前売1800円 当日2000円 中・高校生1000円 問合せ＝☎03（984）4670

●**中山直一・中山規佐子デュエットダンスコンサート「寝た呆け――究極の背骨」**
構成／演出／出演＝中山直一／中山規佐子 時＝11月1・2日PM7：00 所＝テルプシコール（中野駅南口下車） 料金＝前売1800円 当日2000円 問合せ＝ダンス・ラヴ・マシーン☎03（387）9201

●**スライド「あなたも逃げられない――ふたたび葬れ 国家機密法――」**
79コマ19分（シナリオテープ付）12000円 監修＝自由法曹団 企画／製作／問合せ＝日本電波ニュース社☎03（584）7441 ビデオ版もあり

●**早稲田祭第9回スーパーCMフェスティバル「ビニール教室」**
出演＝つボイノリオ／ひさうちみちお／蛭子能収／他 時＝11月3日PM1：00 所＝早大本部キャンパス15号館202教室 料金＝前売700円 当日1000円 問合せ＝☎03（785）5543森山

●**ヤーノシュ・シュタルケル・チェロコンサート**
時＝10月20日PM7：00 所＝昭和女子大人見記念講堂 料金S4000円 A3500円 B3000円 問合せ＝神原音楽事務所☎03（403）8011

●**月蝕歌劇団公演「月蝕歌劇団☆黙示録」**
作／演出＝高取英 出演＝麻山まゆみ／津田卓也／他 時＝10月9～14日PM2：00・6：30（9・13日PM6：30のみ） 所＝高円寺・明石スタジオ 料金＝前売1900円 当日2200円 高校生1600円 中学生1200円 小学生300円 問合せ＝劇団事務局☎0422（53）8602

●**笑ボート第9回公演「ご先祖様は22歳」**
作／演出＝はらけんたろう 出演＝怪男児日の丸／高階ルンナ／他 時＝10月12日PM2：00・6：30 所＝スタジオ赤坂プレイBOX（千代田線乃木坂下車） 料金＝前売1000円 当日1200円 問合せ＝東京軽演劇センター☎03（702）1919PM10：00～11：00

●**劇舎バーストマン公演「夜明けのフーガ」**
構成＝野伏翔 演出＝千葉繁 出演＝千葉繁／立木文彦／他 時＝10月16～19日PM7：00（18・19日PM2：00あり） 所＝明大前キッド・アイラックホール 料金＝前売1600円 当日1800円 問合せ＝オフィスバーストマン☎03（235）8777真山

●**タラフマラ劇場公演「モンク」**
作／演出＝小池博史 出演＝清水啓司／小川摩利子／他 時＝10月29日～11月3日PM7：00（2・3日はPM4：00） 所＝氷川台・T2スタジオ 料金＝前売2000円 当日2200円 問合せ＝タラフマラ劇場☎0425（74）8980

●**ライブバンドVOL7「綿の国星'86」**
作／演出＝小宮紳一郎 出演＝風吹優太／佐々木なおみ／他 時＝11月1～3日PM7：00 所＝雑司ケ谷・鬼子母神境内特設会場（都電鬼子母神前 バス停千登世橋下車） 料金＝前売1500円 当日1800円 高校生1000円 中学生800円 問合せ＝劇団ライブバンド☎03（460）0578

●**本多座組公演「アンタッチャブル」**
作／演出＝北野ひろし 出演＝榎田逸美／福留修／他 時＝11月5～9日PM7：00（7～9日PM2：00あり） 所＝下北沢ザ・スズナリ 料金＝前売1800円 当日2000円 学割1500円 問合せ＝劇団本多座組☎03（469）3669

●**OFF★OFF★OFF第6回公演「BIG BAD BABY」**
時＝11月11～16日PM7：00（土・日曜PM2：00あり） 所＝高田馬場・東芸劇場 料金＝前売1500円 当日1800円 問合せ＝劇団事務所☎03（468）8488 読者招待あり（10名） 〒151渋谷区上原2－43－7モリグチハイツ303まで住所・氏名・年齢と本誌名を書いて申し込んでください

●**掲載は無料／毎月20日締切り翌月10日発売（先着順掲載）**

BOOK-MEMO

新刊メモ

■「醒めて見る夢」長部日出雄著　福武書店刊　1500円

※迷宮の街にそびえたつ夢見の塔をめぐり交錯するさまざまな生の断片。夢幻の境界を斬新な手法で描き、物語を綾なす自伝的連作小説。

■「同窓会」嵐山光三郎著　講談社刊　1100円

※集まり散じた友たちの奇風的生活を描いた「不良同窓会」をはじめ「黄金釘」「終電人生」などノスタルジアと妖しさの同居した人情綺譚集。

■「フグと低気圧」椎名誠著　講談社刊　1000円

※シベリア、蚊、背広、ウドン、フグ……。怪し楽し世間のただならぬ気配をみつめる著者の極私的視線を堪能するエッセイ集。

■「少年少女絵物語」沢野ひとし著　本の雑誌社刊　1000円

※夏休み、安普請の家、そして友がいて先生がいて妹がいて父がいた。過ぎ去りし少年の日々をノスタルジックに描く東京物語。

■「遠いアメリカ」常盤新平著　講談社刊　1300円

※ピッツァもクリーネックスも知らなかった。アメリカへの憧れと怠惰な日常のはざまでゆらめく30年代の青春。著者はじめての創作集。

■「復活祭のためのレクイエム」新井千裕著　講談社刊　980円

※コピーライターの〝私〟と言葉の精・W_1とオカマの彼。不思議な言語感覚と思わず笑ってしまうほど、向日性にあふれた群像新人賞受賞作。

■「私小説」鈴木いづみ・荒木経惟著　白夜書房刊　1200円

※17歳で小説家としてデビュー以後、スキャンダラスに疾走し、自殺という手段でその36年間の人生に終止符を打った作家・鈴木いづみの写真集。

■「イチ、ニのサン！」筒井康隆／ミハエル・リューバ著　河出書房新社刊　1500円

※閉ざされた町から逃げだそうと、〝一、二の三〟のかけ声でそろって飛びだした人々の運命は？筒井康隆ニュースラプスティック絵本。

■「アメリカ『新宗教』群像」D・G・ブロムリー他著　ジャプラン出版刊　1800円

※いまアメリカ全土を覆う「新宗教」の実態を詳細に解説分析し、はじめてその正体に迫り大反響を呼んだ〝STRANGE GODS〟の邦訳。

■「エコトピア国の出現」アーネスト・カレンバック著　ダイヤモンド社刊　1600円

※アメリカから独立した緑の国。自由と生存のための闘いに立ちあがった人々を描く、近未来エコロジカル&ポリティカル・サスペンス。

■「午後の砲声」森詠著　講談社刊　1200円

※火を吹くカラシンコフ自動小銃、轟く対空砲火……。戦争、革命、国家の意味を問い、戦火のレバノンに生命を賭ける男たちの生き様を描ききった書き下ろし長編小説。



■「秩父困民党群像」井出孫六著　社会思想社刊　520円

※山間にこだました叫びに、農民を中核として侠客、教員、神官たちが決起。無名者たちの姿を今に甦らせて、困民党蜂起の実像を描く。

■「マザー・グースの誕生」鈴木一博著　社会思想社刊　400円

※イギリス伝承童話を総称して「マザー・グースの唄」という。イギリス人が心の奥底に持つ文化栄養素を手がかりにして、誕生の背景を探る。

■「4WDカッとび北海道5000キロ」村野雅義著　実業之日本社刊　980円

※マルチ放送作家の著者が、見やすいイラストマップとドライブテクニック指南をまじえながら北海道ドライブのダイゴ味を伝える。

■「国鉄民営化残酷物語」丸山昇著　エール出版刊　980円

※再就職残酷物語、首切り名簿の作り方、広域配転、人材活用センター残酷物語など揺れる国鉄マンの実態報告。

■「アントニオ猪木／闘魂滅び詩」板坂剛著　エスエル出版会刊　980円

※八百長の暴露、組織の弱体化、崩壊する猪木神話にかつて熱狂的信奉者だった著者が、万感の思いをこめて最後の鉄槌を下す。

■「眺めて彩事記」小松満貴子著　エスエル出版会刊　980円

※女子大で教鞭をとる著者が、働く女性や女子学生の生態、考え、悩みなどを描く辛口エッセイ。女性の視点で現代社会を解読する。

■「道元『禅』とは何か」遠藤誠著　現代書館刊

BOOK-MEMO

2300円

※社会矛盾のただなかで弁護士として活動する著者が、自己の体験に即して道元を自分の目で読み現代に生きる人々に指針を与える。

■「**予備校にあう**」**牧野剛著**　風媒社刊　990円

※巨大予備校・河合塾のスター講師である著者が現代の思想・教育状況と風俗をなで切りにし、予備校の未来を考えた生録本。

■「**日本映画俳優全史／現代編**」**田山力哉著**　社会思想社刊　560円

※既刊「日本映画俳優全史」のその後のスター150人を収めた書。最近新たに脚光をあびているベテラン俳優から新鮮な若手俳優まで網羅。

■「**コピーなんでもかんでも大集合**」**面白・激射コピー発掘人編**　日本経済評論社刊　1000円

※流通、電気製品、ファッションから霊園、求人はてはピンク産業まで、世の中にあふれるあらゆる広告コピーを集めた集大成。

■「**米長流　株に勝つ極意**」**米長邦男著**　サンマーク出版刊　1000円

※将棋と株は〝先を見る〟勝負事という意味では共通性があるのか。十段が独得の歯切れのよさでその極意を伝授する。

MAGAZINE

極私的雑誌論

永山　薫

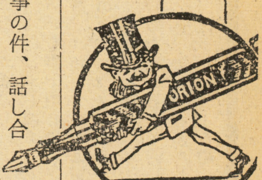
Kaoru Nagayama

遊撃的電算機小僧御用達雑誌『ハッカー』の巻

この夏、風変わりなパソコン雑誌が登場した。なにしろ誌名が『ハッカー』(日本文芸社)でサブタイトルが『あなたのパソコンが生まれ変わるグレードアップ機能付き裏情報誌』と言うのだから人を食っている。俺はこうした犯罪ぽいことや裏○○と言うのにとても弱いので門外漢であることも顧みず飛び付いてしまった。無論、犯罪ぽいと言っても『私はこうして銀行のオンラインに侵入し、中○根の隠し口座から100億円引き出した』とかそういう本格的に面白いハッキング告白なんてのは載っていない。記事の中心はハードの解析と改造、コピーツールの紹介及びコピーのテクニックである。前者はともかく後者は現在のコピー文化と著作権問題を考える上で興味深いし、法的に言っても問題がありそうだ。ソフトはコンピュータの命である。ところがこのソフトがまた結構なお値段である。そこで日常的にユーザー間でコピーと言う手段が取られる。だが、コピーを防ぐためのプロテクトが純正ソフトには施されており、素人ではコピーしきれない。そこで、それに対抗して登場するのがアンプロテクターと呼ばれるハッカーたちであり、彼等が開発したコピーツール(プロテクタ破り用ソフト)を売るゲリラ的ソフトメーカーである。要するに現在、この純正メーカー対ゲリラメーカーのイタチゴッコ的攻防戦が秋葉原を中心に展開されており、かような雑誌が出る素地ともなったわけである。純正メーカー側に立つ一般パソコン誌ではゲリラメーカーの広告掲載を拒否しているが、当然『ハッカー』の方はそのテの広告が山盛りだ。しかも面白いことにこれらのゲリラメーカーの中には最初から著作権を放棄し、『ウチのソフト(コピーツール)のコピーはどんどんやって下さって結構』と言い切っている者もあり、ゲリラにはゲリラの仁義があるのだな、と俺は感心してしまった。無論ゲリラ側にも『純正ソフトがイカれた場合に備えてバックアップコピーを取るのが目的で著作権侵害には当たらない』と言う大義名分があるのだが、実際にはそれらのコピーツールを使ってコピーソフトを廉価で売る海賊業者もいるし、個人間のコピーはもはや常識だ。メーカー側に取っては頭の痛いことにゲリラ側のユーザー、メーカーとも、利益と同じくらい愉快犯的な要素が強かったりする。あと、『ハッカー』では『ファミコンだめソフトお買い損情報』と言う一般のファミコン誌では絶対不可能な連載があり、この種の広告主に縛られない商品批評が充実してくるともっと面白くなると思う。しかし、記事全体の文章があまりにも冗長度が高く、結局は内容が竜頭蛇尾だったりするのがなさけない。

ジャーナル読書日記

JOURNAL BOOK LIFE



井家上隆幸

Takayuki Ikegami

×月×日　例の中学プール工事の件、話し合い中に日の丸背負った小官僚が「最後通牒、強行！」と発言「戦前軍部と同じ」と85歳老激昂。他も同じ。かくなれば、と区長に手紙（返事はこない）、社会党区会議員の仲介で中官僚と会い、「最後通牒」を若干だがなお修正させる。が、これで全て終ったわけではない。池田重善著／柳田邦夫解説『活字の私刑台』（青峰社、１５００）。昭和24年3月、「ウランバートルの日本人抑留所で吉村久佳隊長が隊員を〝暁に祈る〟なるリンチで虐殺」と朝日新聞が報道。国会も証人喚問するなど日本中の注目を浴びた事件があった。池田重善は即ち吉村久佳の本名。刑事裁判で懲役3年の判決をうけ服役、無実を訴え続けていたが、その主張を世に問うたもの。「40年前のことというなかれ、事は今現在の問題」と言う柳田邦夫のアピールは重い。

×月×日　柳田邦夫入院と、丸山邦男さんから電話あり。ついでに「最近のキミは」と叱られる。一言もない。萎えた心、故郷に向い、というわけではないが、中国新聞社編『新中国山地』（未来社、３８００）を手に取る。この〝過疎〟地帯が竹下、安倍、2人の〝ニューリーダー〟を支えるという不思議さ。誰彼の顔が浮かんでくる。そこにいた頃あこがれた新聞記者の世界。「昭和30年代前半、社会部最後の黄金時代」の体験を綴る本田靖春『警察回り』（新潮社、１２００）、羨しいの一語につきる。気分転換に〝近未来海洋パニック〟リチャード・ラモン『南極大氷原北上す』（サンケイ文庫、600）だ。どこかで読んだ、見たような話だが、ま、そこそこ面白い。アーヴィング・ウォーレス『奇蹟への八日間』（文春文庫、上下各440）、作家というのはいろんなことを考えるものではありますなあ。

×月×日　寝くたれるにもそれ相応の体力が必要とか。じゃあオレは体力が落ちてきたかと、まだまだ背負わねばならぬあれこれを考えて前途不安。いや、真ッ暗。100人の普通の人々による普通の人のための人生相談、スタジオ・アヌー編『家族？』（晶文社、２８００）で安心しよう。17歳から95歳まで、さまざまな人の体験インタヴュー。予定調和的な臭さがあると思うのはヒガミか。しかし、とにかく皆さん、向日的ですごい。『針の眼』『レベッカの鍵』のケン・フォレットの新作『獅子とともに横たわれ』（集英社、１８００）、アフガニスタン舞台の冒険スパイ小説で読ませる。女性の性の奔放さは、最近のアチラの小説に共通している。「結婚、子育て、自分の生活を少しでも住みよくする、それこそ本当の冒険」という結句に爆笑しました。50人の発言を集めた、赤塚不二夫他著『フォーカス、フライデーの愛読者に贈る本』（四海書房、１０００）これでよいのかF・F報道と、みな世を憂い、読者を叱り啓蒙しているが、どこか無力感が漂っていて切ない。森詠『午後の砲声』（講談社、１２００）は「戦争とは？　革命とは？　国家とは？」という問題を、中東の火薬庫レバノンで日本人ジャーナリストの行動で追究する。冒険小説ファンには不評かもしれぬが、この視座が貫徹するだろう森詠作品は、

海外物に匹敵するのではと期待したい。
×月×日　中曽根、米国少数民族差別発言。藤尾放言を咎めたのだ。ご本人も「罷免」されるがスジというものではないか。１９６２年のキューバ危機を舞台にしたダグラス・ターマン『シェルゲーム』(早川書房、２０００)は、ソ連の仕掛ける謀略が面白い。当時、核ミサイル基地の下級指揮官だった著者の「ケネディ、騙されやがって」という気分が反カストロ・ゲリラの活躍に投影され「オレならこうやった」的長篇となっている。フィリップ・ヴァン・リント『解き放たれた＜プロメテウス＞』(角川文庫、上下各580)は、英米独の秘術を尽した諜報合戦。どこまでが実でどこまでが虚か、ここを先途の張扇。
×月×日　長部日出雄『醒めて見る夢』(福武書店、１５００)、目に見えない世界を鉛筆と想像力で現出させようとする自伝的連作。僕はファンだ。第32回江戸川乱歩賞受賞作、山崎洋子『花園の迷宮』(講談社、１０００)、少女探偵ふみのいつも頭をもたげた昂然さがいい。が、シナリオ的改行多々の文章はどうも性に合わない。台湾出身元日本兵の靖国神社占拠と、敗戦の日に父を謀殺した日本軍人を追って潜入した反北ベトナムゲリラのモンロンの復讐と交錯させた、麗羅『英霊の身代金』(文藝春秋、１２００)のほうが、ある種御都合主義のところはあるが、僕には面白かった。戦前は浅草、戦中は大陸、戦後はドサ回りと芸人の裏街道を歩き続けたボードビリアン・パン猪狩の聞書。滝大作『パン猪狩の裏街道中膝栗毛』(白水社、１２００)は、芸人とはこんなもんよという自負がいい。パン猪狩の生きた世界の周辺が描きこまれていればもっと面白くなったのでは、というのはないものねだりというものか。さて、今夜も例の話し合いだ、気を入れてガンバラねば——。

著者の〃真相〃

MONTHLY● THE BOOK

活字の私刑台　池田重善著
青峰社刊　一五〇〇円

著者の池田重善は元吉村隊隊長。暁に祈る事件で朝日新聞に〃鬼畜〃のレッテルをはられた。本誌読者なら7月号「朝日の大誤報と直木賞作家・胡桃沢耕史の抑留記の大疑惑」(柳田邦夫)で、朝日による人権無視のキャンペーンも御承知か。本書は戦争中から現在までの出来事を綴った池田手記と、柳田邦夫による解説から成る。

「裁判では質問されたことに答えるだけで、その質問も朝日の言う通りですから、こちらから思うように言われんわけです」

その無念が、これだけの克明な手記を書かせた。とりわけ書きたかったのは、池田側に不利な証言を次々と重ねる原田という通訳についてだったようだ。

「原田は通訳と言ってますが、正式な通訳ではなく蒙古語も不十分でした。だいたい処罰とか、そういう重用な内容は日本人に通訳させませんでした。現地人や特務機関の人間には、日本語の巧いのが、たくさんおりましたから。そういう(原田の)ことは裁判では取りあげない。弁護士さんにも『(あの裁判は)最初から処罰するつもりでやっていた』と言われました」

裁判の後半では、被告であるにもかかわらず呼び出しがなく、法廷に立っていないこともあるという。昭和五十四年、東京高裁は一度再審請求を却下している。この時も原田の証言申立書取り下げが契機となっている。

「原田は今度の本では実名で出ており、本人もびっくりしたそうです。(原田が)訴えることはないでしょうが、そうなったらもってこいです」

再度の再審請求のための具体的な方策については、調査団に一任してあるからと、語ってもらえなかったが、調査団事務局である青峰社の人の話では、朝日新聞と胡桃沢耕史を法的に責任追求していき、そこでの裁判過程で新証言をできる限り集め、その証言を基に再審請求をするという戦略だという。

読者の場

★ご投稿をお待ちしております。原稿用紙に六〇〇字程度にまとめてお送り下さい。採用分には薄謝を贈呈いたします。住所、氏名、年齢、職業をお忘れなく。匿名希望も可。

三浦和義氏と面会して…

去る八月二十九日、東京拘置所で初めて三浦和義氏に面会した。腰痛と心痛からか、顔の色は冴えなかったが、その瞳には不屈のファイトが光っていた。

本誌八月号から登場した三浦氏の連載「東京拘置所日誌」の手記第一回目の文中、〃…こんだけ騒がれた事件で、犯人がいません、わかりませんじゃ通らないんだよ。お前が犯人じゃなくては国民が納得しないんだ！ わかったか、バカヤロウ!!〃（原文通り）と言ったのは「だれですか？」と、そのとき三浦氏に訊いたら、即座に「警視庁の今井刑事でした」と答えた。取調べに当った四人のなかの一人というから、三浦氏にとっては忘れることのできない名前であったろう。

その今井刑事の発言が三浦氏の書いた通りであったとしたら、看過出来ない重大な問題だと思う。なぜならば、その言葉には合理性が無く、論理の飛躍があるだけで、極めて感情的な悪意の〃予断〃が臆面もなく露呈しているからである。いくら職務熱心の余りでも人権上「無罪」を推定されている被疑者に対しては、言っていいことと悪いことがある。そのケジメも分からないような刑事は、冤罪をデッチ上げるバチルス的存在で、すでに国民の負託に応える刑事としての資格は無い。

公表された今井刑事の暴言は、主権者として無視できない。よって、これが責任者である警視総監の厳正な処断を望むものである。

（太田市・熊倉由貴男・著述業33）

権力となった生徒会

私は現在、非常に驚いています。九月十五日の祝日、私の通っている学校（工業高）の生徒会が登校を命令したのです。名目は体育大会のエール交換（振りのつく応援の類に当たるくだらないもの）。果たして生徒会はいつから生徒の拘束機関になったのでしょうか。更にひどいのは九月十四日の日曜日、生徒会は学校の緊急連絡網を使って、登校時間を八時半（当初九時と発表されていた）に繰り上げることと、弁当を持参（半日の予定だった）するように命令したのです。

後日、このエール交換が予行演習日に行われましたが、十五日休んでいた生徒（私も）に対しては適切な処置もせずに叱り飛ばし、更に上級生は一年の教室に入り、「応援が明日までに出来ないと、どうなるか覚えておけ！」と脅迫するのです。以前、生徒会は学校側による生徒弾圧に反発する機関だった訳で、決して生徒を弾圧しませんでした。顧問という形で権力を介入させてきた結果、生徒会も歴とした権力となった訳です。生徒会室でラリっているような奴が運営しているからかもしれません（このような奴等が体育大会になると何故か学校側の意を代弁するような態度・発言をするのもよくわからない）。

この予行演習を特活（生徒会などを統括する部門）担当教諭がこう評しました。「少し位の間、みんな統率を受けられんのか！ そんなにだらけるようならやめてしまえ！」

（愛知県碧南市・匿名希望15）

十月号の呉氏のページを読んで

バカにも大きく分けて二種類あって、自分をバカと知りつつも、雑誌社だのTV局だのからお声がかかり、こづかい銭になるので割り切ってやっているバカと、マスコミからお声がかかるのは、やはり自分の有難い御言葉を求められているに違いないと信じて疑わないバカとがいると思う。

私は、以前は井上好子を後者と決めつけていたが、離婚騒ぎ以後は前者のほうと思うようになった。

「ちょっぴり有名人の妻」から「超有名人の妻」に至るまで、普通の社会規範を受容して、その見返りとしての庇護以上のものを受けているらしい女性達をステイタスの低い順から（かなりの臆測を含む）大まかに整理すると、㈠雑誌の「お部屋拝見」に出る ㈡「我家の自慢料理」に出る ㈢「家族対抗歌合戦」やゲーム、クイズ番組に出る ㈣以上をきっかけとして「婦人口論」等で手記を書く ㈤いつしか評論家やエッセイストに昇格、といったところであろう。

好子さんは㈤まで達し、呉氏がいくら彼女のことを主体性がないと言ってみたところで、モア・コスモポリタン・クロワッサン等の読者達の羨望の眼差しを遮ることはできな

い。
それにしても彼女は、自立とかキャリアウーマンとかいった言葉とはいかにも矛盾する「内助の功」で売った人であった。そのイメージから一転して「恋に生きる女」のイメージで売ってくれるマスコミがいるかどうか考えてみたが、呉氏の文からすれば、良識派からは総スカンをくいそうである。

しかし、池田理代子さんほどのアホをしでかしてもネームバリューを生かしてくれるマスコミもあることだし、踊るアホーに見るアホーの譬もあることだし、同じアホなら稼がにゃ損々、と私は思いたい。が、残念ながら、私の彼はどうも、有名人にはなれそうもない。呉さん、あたし、あなたに乗り換えてもよろしいんですが。もし、㈠をきっかけとして、私のほうが更に有名人になってしまったら、私のヒモにしてあげましょう。

結局、金にもならないこんなモノを書く私は一番のバカである。

（清瀬市・井下スキ子）

絵の先生のカラクリ

ウチのカミさん、絵が好きで、初めは日曜画家で満足していたが、そのうち欲が出て二科展などの大きな展覧会に出品したくなり、それなら、先生につかないとダメだと、ある画家のアトリエに通うようになった。そして半年も通わぬうち、初出品で入選し、その次の入選では、賞までもらってしまった。

当初、本人は天才だと浮かれていたが、そのうち私に、入選作とふだん描いている絵のあまりのレベルの違いを指摘され、そのカラクリを白状した。つまり、入選作の方は、ほとんど先生に描いてもらったというのである。先生は審査員もしているのだから自分で描いたものは落とすはずないのは当然である。

しかも、芸術の世界でも、政界同様に勢力争いがひどく、多くの弟子をもっている先生ほど発言力があるとかで、自分の弟子はどんどん入選させ、会友やら会員にしてしまうのだそうだ。だから、出品するなら先生につかないとダメということが、日曜画家の間では常識になっているわけだ。

入選やら会員という肩書き欲しさに金品やら果ては肉体まで使って、ただの日曜画家の主婦たちが、美術団体にむらがり、それを政治家顔負けの権力欲にかられた画家達が利用しているのだ。人並み以上に忙しいタレントが、簡単に入選しているカラクリもこの辺にあるようで、先生にほとんど描かせて、自分はサインだけというわけだ。

ウチのカミさん、せっかく入選させてもらったのに、今は自分でやれる編物に転向してしまった。

（北区上十条・笹本幸一・自営業36）

ビートルズ神話またまた一つ

10月号の本欄にて舟木礼文氏が、朝日の記事について「事実誤認、いや不注意か意図された仕儀かはしらず、ビートルズ神話の延命温存に利する記事」として批判しておられる。その中で舟木氏は'70年初頭の雑誌記事を元にビートルズの曲はジョン、ポールいずれかの曲であり、共作曲は少ないことを示し、これが「音楽ファンならこれはもう常識、基礎知識ですよ」と断言なさっておられる。

しかし、あの悲しむべき'80年末のジョンレノン射殺事件の直前にジョンが応じた「プレイボーイ」誌とのインタビューにて、ジョンは次の様なことを述べている。

PB（前略）あなたがこれまでに認められた以上に、レノンとマッカートニーは密接に協力して仕事をされてたようですね。ふたりの名前にはなっているけれども、その歌の大部分は別々に書いたものだって、あなたは言っていたんじゃないですか？

レノン　そう。ぼくがウソをついていたんだよ。ぼくが憤慨してたときだから、あらゆる歌を別々に作ったような気がしてたんだ。実際には顔をつき合わせて、歌をたくさんつくったよ。（PBインタビュー　ジョンレノン、'81年集英社刊、35〜36P）

以上でおわかりのように、詩はポール、曲はジョンと短絡的な朝日の記事が舟木氏の言うとおり事実誤認ではあるが、舟木氏の見解も現在では、というより'81年からは事実誤認なのだ。

舟木氏は「ビートルズ神話の延命に利する記事に小さなクサビを打ち込んでおこう」とおっしゃるが、それは個人の自由ではあっても、事実にもとづかぬ議論は無意味なのである。

とは言っても小生もビートルズファン、音楽ファンであるが、別にビートルズ神話にこだわって生きているわけではありません。念のため。

（中野区東中野・三村勝利・医師27）

訪問募金に意義あり

朝、チャイムが鳴りました。「どなたですか？」と尋ねると「○○地区委員長ですが回覧板を回しています。昨日、お留守でしたので」という返事がありましたので、町内の回覧板かと思いドアをあけました。すると、名簿の閉じ込みファイルを差し出し、「これにサインをし

て、寄付金一〇〇〇円をお願いします」という決めつけの文句。「母体はどこですか?」と聞くと「カンボジア難民支援委員会です」という答え。私が聞きたかったのはファイルの上に貼られた紙の〝光の会〟の説明でしたが、余計なお世話だという態度におされ、何の説明も受けられないまま一〇〇〇円を支払わされてしまいました。

こういう募金の仕方、おかしいと思いませんか?

第一に「どなたですか」との返答に作為が感じられます。「光の会、カンボジア難民支援委員会の者ですが、寄付金をお願いにまいりました」というのが筋です。

第二に募金を一〇〇〇円と決めてかかり、払わざるをえない状況に追い込むやり方。本来、募金というのは自主的に善意をもって行うものですが、これでは反発心が起き、善意などスッ飛んでしまいます。

第三に母体の説明が得られない。

第四に、募金の使途について確認することができない。などなどの問題があげられます。

こういう、一方的な訪問募金についての規制はないのでしょうか。みなさんはどう思われますか?

(京都市左京区・匿名希望の女)

「中流」ニッポンというデマ

一組あたりの結婚費用が三和銀行の調査で明らかになったが、なんと平均七百三十四万円だそうな。

「日本人も豊かになったものだ」と例のチャチなナショナリズム＝経済大国神話にとりつかれている人は思うだろう。

だが一方では、この〝豊かな中流ニッポン〟の現実と相反するような現象、病気による経済苦を理由にした老人の自殺や、サラ金地獄があとをたたない。

いったい日本は、というより私たち日本人はほんとに豊かで中流なのだろうか。

はなはだ疑問である。私たちの多くはいぜん貧しいのではないか。…「七百万も結婚費用にかけるんだよ」という反論がもどってくるかもしれないが、しかしそもそも私はその「調査」自体に疑惑を感じるのである。

だいたいこの結婚費用の調査対象は実は一部のトップエリートに限定されている。つまり三井物産とか海上火災とか大手都市銀行のサラリーマンのみを対象とした調査であって、中小企業などや非エリート層はまったく対象外なのだ。

だがなぜかその事実はふせられ、あたかも七百万円が日本全体の「平均」であるかのごとく印象づけられている。これは「中流幻想」を上から植えつけるための大資本の一種の策略、デマ宣伝ではないのか、とも言いたくなる。

式もあげられなかった組もたくさんいるのだし、日本人の結婚費用の平均は五十万にも満たないだろう。

地方の中小企業では管理職でさえも年収二百万に達しないのはザラである。が、アメリカではパートでも必死で働けば職種によっては年収一千万を超える。欧米の一流企業は初任給ですでに年収一千万を超える。かつての〝経済大国〟北欧諸国は福祉大国となって、経済苦による老人の自殺などはないという。

先進国一の長時間労働と低賃金、先進国一の貧弱な住宅と低福祉社会にあえぎながら、自らの財布の中身に眼をつぶって、「豊かな中流ニッポン」というデマに踊らされ、ひたすら働き続ける私たち日本人はまことに不思議な国民ではある。

(東京都狛江市・代山真彦・会社員30)

本欄十月号の松井氏へ

松井氏が労働者に対し、どのようなイメージを抱かれようとご自由である。好きなだけ妄想をふくらませるがよかろう。

しかし、松井氏が言われる「ダサイ」だの「陰険」だのといった批判はイメージの産物に過ぎない。だから空虚で説得力に欠けるのである。

「野蛮」については例として某労働者の投書を挙げておられる。この場合「野蛮」なのはあくまでも投書してきた労働者に限られる。他の労働者の例は全く挙げていないのだから。

にもかかわらず「労働者というのは」と、他の労働者まで野蛮であるかのように書かれる。曖昧で不正確な記述は止していただきたい。

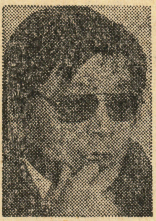
「労働者」ではなく、「会社員」とすれば、確かに言葉のイメージは違ってくるだろう。だが本質的には、さほど違いはあるまい。会社員であれ、労働者であれ働いて賃金を得ることに何ら変わりはないのだ。松井氏はどうもイメージのほうを重視しておられるが。

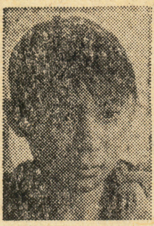
松井氏におたずねしたい。松井氏の業種はブルーカラーであるか、ホワイトカラーであるか。松井氏の文章には、一部ホワイトカラーによくありがちなブルーカラーへの蔑視と嫌悪感が感じられると指摘しておく。

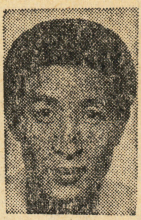
(山口県宇部市・山田賢一・工員21)

今月の登場者
（敬称略）


木野　花


筒井　康隆


家田　荘子


五野井博明


三浦　和義

★離婚騒動も一件落着。国選弁護人二人も決定し、良枝さんも週一回のペースで面会と差し入れに通ってくる日々。腰痛が心配だが12月の公判再開に向け目下着々と準備中とか。

★本誌ではおなじみのベテラン・ライター。自分でテーマをさがしコツコツと取材するスタイルだが、足腰にも衰えはない。本誌の他に『アサヒ芸能』『創』などでも活躍中。

★58年生まれ。女優、取材記者などを経て、『週刊文春』の「黒い肌に群がった女たち」でジャーナリストとして本格的にデビュー。今秋「極道の妻たち」が単行本化された。

★本誌連載も30回を超えて、ますます好調。M・リューバの絵による絵本「イチ、ニのサン！」（河出書房新社）と「旅のラゴス」（徳間書店）が9月に相次いで刊行された。

★10月末の青い鳥の公演に出演せず休養をとると言った矢先、今月号〆切直前に発熱でダウン。幸い入稿には支障なく、年内にロンドンへ行って向こうの芝居を観てくるとか。

編集長日誌

EDITOR'S DIARY



某月某日　湘南・江の島にある全逓会館「金亀楼」で開かれた総評系某組合の研修セミナーに講師で行く。夏と海の大好きな筆者としては、九月上旬とはいえ、まだその余韻を楽しめるかも、という〝下心〟もあって引き受けたのである。会場は江の島の山頂近くにあり、眺望も建物もなかなかのもの。組合の持ちものとしては立派すぎると思ったら、やはり〝放漫経営〟で近々手離すことになるらしいと主催者の人が教えてくれた。講演終了後、鎌倉で友人と待ち合わせていたため、初めて「江の電」とやらに乗る。車窓からはウインド・サーフィンを楽しむ人々の姿がいっぱい。ふと、このあたりに別荘でもあれば、とブルジョワ的気分に浸ったのも、きっと太陽と海のせいだろう。

某月某日　「フルハムロード」閉店の二日後、店のスタッフと良枝さんの家族の慰安を兼ねた二泊三日の千葉・鴨川旅行に誘われて出かける。マスコミ関係は筆者と女性週刊誌のSさんだけという内輪の予定だったが、どこから嗅ぎつけてきたのか、「スポニチ」の記者二人にピッタリとマークされ、報道陣同伴旅行となり、ガックリ。鴨川はちょうど年一回のお祭りの日にあたっており、町中がエキサイティングの真っ只中。中、高校生の男女は原宿のタケノコ族も裸足で逃げ出しそうな派手派手ルック。やはり祭というのは娯楽色の乏しい地方の方がより盛りあがるということをあらためて痛感。二日目の深夜、海岸で焚き火中、祭の熱気にあおられたのか、良枝さんがエキサイトして大ハプニング。幸い、物書きらしからぬ筆者の強靭な肉体?が功を奏して事なきをえたが、「スポニチ」が帰った後でホントよかった、と胸をなでおろす一幕もあった。

某月某日　毎月、本誌の執筆以外に何本か他誌にも書いているが、今月は久方ぶりに引き受けた後に悔やんでしまった原稿があった。『現代の理論』が毛沢東没後10年ということで特集を組み、その中の一本として「毛沢東と私」というテーマの依頼。さあ、どうしたものかと考えている間に、アンジンさんこと安東仁兵衛編集長の勢いに押されて引き受けさせられてしまったのだ。いまだ中国大陸にわたったこともないが、行ってみたいという気持とみたくない気持が半々という、複雑な心境が正直なところ。昨今の中国事情に関するそうした複雑な心境こそは、かつての文化大革命とは一体何だったんだという疑問が解消されないことから来ている。結局、原稿は書きあげてわたしたものの、そう簡単にソーカツしえないのは、先頃判決が下りた「連合赤軍」とて同じことだろう。

某月某日　東京拘置所の三浦和義氏と面会。〝サングラスの奥から三浦氏をパーだと思って見ないように〟、サングラスをはずして臨む。用件はとくになく、三浦氏の近況を知り良枝さんの心境を伝えることがメイン。面会終了間際、「娘のHが一カ月もほっとかれて可哀想だ」と泣きながら訴えられて、グーンと重い気持に。ロンドンから帰国した良枝さんとも何回か話してみたが、固い離婚の意志を知った後だけに、「とにかくまだ法的には夫婦なんだから、仲介者を立てる前に二人だけで直接話し合う機会を持って欲しい」と良枝さんを説得するのが精一杯。結婚よりも離婚の方が何倍ものエネルギーを要するというのは、むしろ一般的な傾向なのだから…。ともあれその後、良枝さんも週一回ペースで面会に行き、おだやかな話し合いが始まり、三浦氏の国選弁護人二人も決まり、この間の事態は不幸中の幸いという線で何とか落着し、とりあえずはホッと一息。

某月某日　秋の学園祭シーズン。今年は11月2日早大マスコミ研究会、11月3日名古屋の愛知県立大自主講座の学園祭に出席の予定。時間とヒマのある読者はぜひ駆けつけて下さい。

月刊 噂の真相　一九八六年十一月号（第八巻第十一号）★毎月10日発売★定価四二〇円★編集兼発行人　岡留安則★発行所　株式会社　噂の真相
〒160　東京都新宿区新宿5—11—18　☎03—341—7578（代）★郵便口座　東京4—75386

★本誌は各取次会社を網羅して全国の書店で発売されております。なるべく書店に予約注文下さい。★やむなき事情により直接本社にお申し込みの場合は、半年分二、八二〇円、一年分五、六四〇円（郵送料込み）をそえて現金書留か郵便口座にてお申し込み下さい。切手の場合は六〇円以下の小さい単位でおねがいします。

昭和五十四年六月二日第三種郵便物認可　通巻九十二号
昭和六十年二月二十六日国鉄首都特別扱承認雑誌八二二九号
昭和六十一年十一月一日発行（毎月一回十日発売）第八巻第十一号

噂の真相

編集兼発行人＝岡留安則　発行所＝株式会社噂の真相
〒＝160 東京都新宿区新宿5-11-18
tel.＝03〈341〉7578（代）



定価＝420円

雑誌 01807-11

噂の真相

よど号グループ二〇〇枚の原稿…★

「マニラ市内殺人事件【第二話】大久保利久★

任天堂の神話を剥ぐ★

犯罪報道の静かなブーム！★

自動車業界のマスコミ対策……

十一月号…一九八六年